

ト異ル所ナシ。然レドモ本罪ノ詳細ハ次編第一章第三節犯人又ハ拘禁中逃走シタル者ヲ藏匿シ又ハ隱避セシムル罪及ヒ第四節刑事々件ノ證據湮滅ノ罪ヲ説明スル際ニ讓ラン。

### 第五章 刑罰

刑罰

- (一) 公務實行中公務員ニ對シ暴行又ハ脅迫ヲ加フル罪ハ三年以下ノ懲役又ハ禁錮ヲ以テ處斷ス可キモノトス。
- (二) 公務員ヲシテ或處分ヲ爲サシメ又ハ爲サ、ラシムル爲メ又ハ其職ヲ辭セシムル爲メ暴行又ハ脅迫ヲ加フル罪ハ三年以下ノ懲役又ハ禁錮ヲ以テ處斷ス可キモノトス。
- (三) 封印又ハ差押ノ標示ヲ損壞シ又ハ其他ノ方法ヲ以テ之ヲ無効ナラシムル罪ハ二年以下ノ懲役又ハ三百圓以下ノ罰金ヲ以テ處斷ス可キモノトス。
- (四) 被拘禁者ノ逃走罪中(一)單純ナル逃走罪ハ一年以下ノ懲役ニ(二)重キ逃走

罪ハ三月以上五年以下ノ懲役ヲ以テ處斷ス可キモノトス。被拘禁者ヲ逃走セシムル罪ノ中(一)被拘禁者ヲ奪取スル行爲ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ該當シ(二)被拘禁者ノ逃走ヲ幫助スル行爲ハ其手段ノ如何ニ依リ刑罰ニ輕重アリ即チ(イ)被拘禁者ヲ逃逃セシムル目的ヲ以テ器具ヲ給與シ其他逃走ヲ容易ナラシム可キ行爲ハ三年以下ノ懲役ニ(ロ)同上ノ目的ヲ以テ暴行又ハ脅迫ヲ爲ス行爲ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ該當ス。(三)看守又ハ護送スル者ノ被拘禁者ヲ逃走セシムル行爲ハ一年以上十年以下ノ懲役ヲ以テ處斷ス可キモノトス。而シテ被拘禁者ノ逃走及ヒ被拘禁者ヲ逃走セシムル罪ノ未遂ハ總則未遂罪ノ規定ヲ適用處斷ス可キモノトス。

國家ノ立法及行政ニ對スル一般觀念

## 第五編 國家ノ立法及ヒ行政

### ニ對スル罪

#### 第一章 一般觀念及ヒ分類

一個人ノ意思活動ヲ保護スル必要アルカ如ク國家ノ意思活動ヲ保護スル必要アリ。國家ノ意思活動即チ國家ノ動作ハ之ヲ大別シテ立法及ヒ行政ノ二ト爲スコトヲ得。法律ハ立法及ヒ行政ノ動作ヲ適當ニ保護センカ爲メ一面瀆職罪ヲ規定シ立法及ヒ行政ノ事務實行ノ任ニ當ル當該公務員ノ職務行爲ニ關スル不都合ナル所爲ニ對シ相當ノ刑罰ヲ定メ又他ノ一面ニ於テ國權ニ對スル罪ヲ規定シ何人モ公務員ノ職務實行ニ關シ其職務ノ實行前ナルト其實行中ナルト又其實行後ナルトヲ問ハス之ニ對シ妨害ヲ與フ可カラサル

コトヲ定メタリ。然レトモ立法及ヒ行政ニ關スル國家ノ動作ヲ適當ニ保護セントスルニハ瀆職罪及ヒ國權ニ對スル罪ヲ規定スルヲ以テ足レリト爲サス。是ニ於テカ各國ハ法律ヲ以テ立法及ヒ行政ニ關スル國家ノ動作ニ妨害ヲ與フ可キ諸般ノ所爲ヲ禁止シ且ツ斯ル動作ヲ爲スニ必要ナル行爲ヲ爲ス可キコトヲ命令シ且ツ之ニ違背スル者ニ對シ相當ナル刑罰ヲ規定スルニ至レリ。斯ノ如キ禁止ニ背キ又ハ命令ヲ遵奉セサル行爲ニ對スル罪ハ之ヲ總括シテ國家ノ立法及ヒ行政ニ對スル罪ト指稱スルヲ得。而シテ方今文明各國ニ於ケル立法及ヒ行政ノ事項ハ年ヲ逐ウテ増加スルニ從ヒ國家ノ立法及ヒ行政ニ對スル罪モ亦次第ニ増加スルニ至レリ。我國ニ於テハ立法及ヒ行政ニ對スル罪ニシテ我刑法ニ規定アルハ獨リ廣キ意義ニ於ケル行政ノ一部タル司法ニ屬スル裁判ニ關スル罪ニ限り其他ノ立法及ヒ行政ニ對スル罪ハ之ヲ特別法ニ讓レリ。蓋シ裁判ニ對スル罪ハ此ノ種ノ規定中最モ古キ歴史ヲ有シ且ツ最モ重要ナル地位ヲ占ムルニ基クガ爲メナラム。

裁判モ亦國家ノ動作ノ一ニ外ナラサルカ故ニ一般ニ國家ノ動作ニ對シ妨害ヲ可フ與キ罪即チ瀆職罪若クハ國權ニ對スル罪ニ依リ妨害ヲ受クルモノトス。即チ裁判ハ裁判事務實行ノ任ニ當ル公務員ノ瀆職ニ依リ之カ適正ヲ妨ケラル、コトアリ。又裁判事務ノ實行前實行中又ハ其實行後之ヲ侵害スルニ依リ妨ケラル、コトアル可キナリ。然レトモ裁判ハ獨リ瀆職罪若クハ國權ニ對スル罪ニ依リ妨害ヲ受クルノミナラス其他ノ各種ノ行爲ニ依リ其適正ヲ害セラル、コト少カラス。其著シキモノヲ舉クレハ(一)裁判事務ヲシテ不適正ナル進行ヲ始ムルニ至ラシム可キ行爲、(二)不適正ナル裁判ヲ爲スニ至ラシム可キ行爲及ヒ(三)裁判事務ノ妨害ト爲ル可キ行爲若クハ不行爲ナリトス。我法律ノ定ムル誣告、僞證、證據湮滅、犯人藏匿及ヒ證人、鑑定人ノ義務違反ノ罪ノ如キハ此種ノ行爲ニ屬スルモノナリ。就中誣告ハ裁判事務ヲシテ不適正ナル進行ヲ始メシム可キ行爲ニ屬シ、僞證ハ不適正ナル裁判ヲ爲スニ至ラシム可キ行爲ニ屬シ、證據湮滅、犯人藏匿及ヒ刑事訴訟法及ヒ民事訴訟法

等ニ規定セラル、證人、鑑定人、通事カ裁判所ノ呼出ヲ受ケナカラ故ナク出頭セサル不行爲(刑訴、二九四、三〇二條)及ヒ證人、鑑定人カ故ナク宣誓ヲ拒ミ又ハ宣誓シテ供述ヲ肯セサル不行爲(刑訴、一三六、一三三、一三〇九條)等ハ裁判事務ノ妨害ト爲ル可キ所爲ナリ。故ニ學者誣告罪、偽證罪、犯人藏匿若クハ證據湮滅罪及ヒ裁判事務ニ關シ公務ノ執行ヲ拒ム罪(證人、鑑定人、通事ノ不出頭及ヒ宣誓ヲ以テ裁判ニ對スル罪ト稱ス(註一))。

(註一) フォン、ビルクマイヤー、フォン、リスト等ノ諸氏ハ何レモ同一ノ分類ヲ爲セリ(v. Birkmeyer, S. 1195 ff. v. Liszt, S. 182-184.)。

茲ニ注意ヲ要ス可キハ裁判トハ主トシテ通常裁判所ニ於テ行フ裁判即チ民事、刑事ノ裁判ヲ指稱スト雖モ尙ホ偽證罪及ヒ誣告事件ニ關シテハ通常裁判所以外ノ官廳ノ審理判定ニ關スル行爲ヲモ包含スルコト是ナリ。

我法律ノ認ムル國家ノ立法及ヒ行政ニ對スル罪ハ第一國家ノ裁判ニ對スル罪、第二特別法ニ規定スル國家ノ立法及ヒ行政ニ對スル罪ノ二ト爲スコト

國家ノ立法及ヒ行政ニ對スル罪ノ分類

ヲ得。

國家ノ裁判ニ對スル罪ハ之ヲ分テ(一)誣告罪(刑一七三條)、(二)偽證罪、(三)犯罪者又ハ拘禁中逃走シタル者ヲ藏匿又ハ隱避スル罪(刑一〇五條)、(四)刑事々件ノ證據ヲ湮滅スル罪(刑一〇五條)、(五)裁判事務ニ關スル事務ヲ怠ル罪(刑訴、一三六、一〇一、一三三、一九四、三二二)ノ五ト爲スコトヲ得。而シテ其中偽證罪ハ更ニ之ヲ分テ(甲)證人カ虛偽ノ陳述ヲ爲ス罪(刑一七〇條)、(乙)鑑定人又ハ通事カ虛偽ノ鑑定又ハ通譯ヲ爲ス罪(刑一七一條)ノ二ト爲スコトヲ得可シ。

特別法ニ規定スル國家ノ立法及ヒ行政ニ對スル罪ハ之ヲ分テ(一)國家ノ立法ニ對スル罪、(二)國家ノ行政ニ對スル罪ノ二ト爲スコトヲ得。而シテ國家ノ行政ニ對スル罪ハ更ニ之ヲ分テ(甲)內務行政ニ對スル罪、(乙)外務行政ニ對スル罪、(丙)財務行政ニ對スル罪、(丁)軍務行政ニ對スル罪、(戊)産業行政ニ對スル罪、(己)交通行政ニ對スル罪ノ六ト爲スコトヲ得可シ。

以上ノ分類ヲ圖示スレハ左ノ如シ。

國家ノ立法及ヒ行政ニ對スル罪

第一、國家ノ裁判ニ對スル罪

- (一) 誣告罪(刑、一七二、一七三條)
- (二) 偽證罪
  - (甲) 證人カ虚偽ノ陳述ヲ爲ス罪(刑、一六九、一七〇條)
  - (乙) 鑑定人又ハ通事カ虚偽ノ鑑定又ハ通譯ヲ爲ス罪(刑、一七一條)
- (三) 犯罪者又ハ拘禁中逃走シタル者ヲ藏匿又ハ隠避スル罪(刑、一〇三、一〇五條)
- (四) 刑事事件ノ證據ヲ湮滅スル罪(刑、一〇四、一〇五條)
- (五) 裁判事務ニ關シ義務ヲ怠ル罪(刑、一三六、一〇一、一二六、一三八條、刑、四一條、民、一九四、三二二、三〇九條等)
- (六) 國家ノ立法ニ對スル罪
  - (甲) 内務行政ニ對スル罪
  - (乙) 外務行政ニ對スル罪
  - (丙) 財務行政ニ對スル罪
  - (丁) 軍務行政ニ對スル罪
  - (戊) 産業行政ニ對スル罪
  - (己) 交通行政ニ對スル罪

第二、特別法ニ規定スル國家ノ立法及ヒ行政ニ對スル罪

茲ニ國家ノ立法及ヒ行政ニ對スル罪ナル題目ヲ掲ケ説明セント欲セハ此種類ニ屬スル罪ヲ學理的ニ分類シ各項ニ涉リ稍ヤ詳細ナル説明ヲ與フルヲ

以テ相當トスルナル可シ。然レトモ刑法ヲ講スルヲ以テ目的トスル本書ハ國家ノ立法及ヒ行政ニ對スル罪ハ第一國家ノ裁判ニ對スル罪、第二特別法ニ規定スル國家ノ立法及ヒ行政ニ對スル罪ト爲シ前者ニ對シテハ稍ヤ詳細ナル説明ヲ爲シ後者ニ對シテハ單ニ其綱目ヲ舉クルニ止ムルハ蓋シ相當ノ措置ト爲ス可キカ。

第二章 國家ノ裁判ニ對スル罪

第一節 誣告罪

第七十二條 人ヲシテ刑事又ハ懲戒ノ處分ヲ受ケシムル目的ヲ以テ虚偽ノ申告ヲ爲シタル者ハ第六十九條ノ例ニ同シ(三月以上十年以下ノ懲役)。

第七十三條 前條ノ罪ヲ犯シタル者申告シタル事件ノ裁判確定前又ハ懲戒處分前自白シタルトキハ其刑ヲ減輕又ハ免除スルコトヲ得。

誣告トハ行爲者カ人ヲシテ刑事又ハ懲戒ノ處分ヲ受ケシムル目的ヲ以テ虚偽ノ事實タルコトヲ知リナカラ當該官署ニ對シ虚偽ノ申告ヲ爲スヲ謂フ。

誣告罪

即チ虚偽ノ事實ヲ官署ニ申告シ以テ裁判事務ヲシテ不適正ナル進行ヲ始メシメ若クハ始メシム可キ虞アル行爲ナリ。左ニ本罪ノ梗概ヲ説明ス可シ。

### 第一 法益及ヒ客體

誣告罪ニ依リ害セラル可キ法益ハ國家ノ裁判事務ナルコト前既ニ之ヲ述ヘタルカ如シ。然レトモ誣告罪ニ依リ國家ノ裁判事務カ不適正ナル進行ヲ始ムルニ依リ被誣告者モ亦之ニ依リテ或ハ自由名譽其他財産ニ對スル害惡ヲ被ムルコトナシト爲サス。此點ヨリ觀察スレハ被誣告者ノ利益モ亦誣告罪ニ依リ侵害セラル、モノト謂フヲ得可キカ如シ。然レトモ誣告罪ニ依リ直接侵害ヲ被ムルモノハ國家ノ裁判事務ナリトス。而シテ一個人カ此罪ニ依リ害惡ヲ被ルコトアリ又之ヲ被ラサルコトアリ。而シテ之ヲ被ル場合ト雖モ其害惡ハ裁判事務カ侵害ヲ受ケタル間接ノ結果ニ過キス。左レハ假令誣告罪ニ依リテ一個人カ自由名譽若クハ其財産權ヲ侵害セラル、コトアルモ是レ國家ノ裁判權カ侵害ヲ受ケタル結果之ニ附隨シテ侵害セラル、モノ

誣告罪ノ  
法益

ニシテ之ヲ要スルニ本罪ニ依リ直接侵害セラル、ハ國家ノ法益ナリト謂ハサルヲ得ス(註二)。以上ノ見解ノ當然ノ結果トシテ被誣告者カ虚偽ノ申告ヲ爲スニ付テ承諾ヲ與フルト否トノ事實ハ誣告罪ノ成否ニ何等ノ影響ヲ及ボスコトナシ(註三)。故ニ學者或ハ此罪ヲ以テ一個人ノ法益ニ對スル罪ナリト説明スルカ如キハ相當ナラス(註四)。又此罪ヲ以テ國家及ヒ一個人ノ兩者ノ法益ニ對スル罪ナリト説明スルカ如キハ一應理由アル如クニシテ理論正確ヲ缺ク憾アリト謂ハサルヲ得ス(註五)。

(註二) 同說 誣告罪ノ性質ハ國家ノ裁判事務ニ對スル罪ナリト説ハ獨逸ニ於ケル通説ニシテフォン・ビルクマ  
イヤー、ビンチンク、フォン・リスト、ヘルシナー、メルケル等ノ諸氏之ヲ主張ス。(V. Birkmeyer, S. 1195; Binding,  
Lehrb. II, 523; v. Liszt, § 182; Hülsenher, II, 897; Merkel, S. 408.)

(註三) 同說 フォン・リスト氏 (V. Liszt, a. a. O.)

(註四) 我尙刑法ノ如キハ明カニ誣告罪ヲ以テ一個人ノ法益ニ對スル罪ナリト認メタルモノ、如シ。尙刑法ハ誣告  
罪ヲ以テ第三編身體、財産ニ對スル重罪、輕罪中ノ第一章身體ニ對スル罪中ノ第十二節ニ於テ誣告及ヒ誹毀ト相連ネ  
テ規定シタルニ由テ之ヲ觀ルニ足ル。獨逸ニ於テモ尙ホ此罪ヲ以テ一個人即チ被誣告者ノ法益ニ對スル罪ナリト説  
明スル者ナキニ非ス。マイヤー、アルフェルトノ諸氏ノ如キ其例ナリ (Vergl. Meyer-Alfeld, S. 517.)

(註五) (一) 異説 誣告罪ハ國家ノ法益タル裁判事務及ヒ一個人ノ法益ニ對スル罪ナリ。フランク、ハイルホルン等ノ諸氏 (Cenzl. Frank, I. zu § 164; Heilmann, Verfl. Darstellung, S. 110.)、岡田、小崎、谷野、泉二ノ諸氏ハ前掲フランク氏等ノ所説ト趣旨ヲ同リスルモノ、如シ。岡田氏刑法講義二七〇頁、小崎氏日本刑法論各論七二九、七三〇頁、谷野氏刑法各論講義七二、七三頁、泉二氏日本刑法論六〇二頁參照。

(二) 一種ノ異説 牧野氏曰ク『誣告ハ一方ニ於テハ國家ノ司法其他ノ事務ヲ紛亂スルモノニシテ又他方ニ於テハ誣告セラレタル者ノ名譽其他ノ法益ヲ侵害スルモノナリ。誣告罪ハ此兩者ノ一ヲ侵害スルコトニ因テ成立ス。刑法通義三〇八頁ト。』

誣告罪ノ客體ハ刑事又ハ懲戒ノ處分ヲ受クルコトヲ得ル人格者ナラサル可カラス。故ニ本罪ノ客體ハ生存スル特定人ナルヲ以テ原則トスト雖モ法人カ罰セラル可キ場合ニ於テハ法人モ亦本罪ノ客體タルコトヲ得可シ。死者ハ刑事又ハ懲戒ノ處分ヲ受クルコト能ハサル者ナレハ本罪ノ客體タルコトヲ得ス。生存者ト雖モ責任能力者ニ非サルトキハ本罪ノ客體タルコト能ハサルヲ原則トス。生存者ト雖モ特定人ニ非サルトキハ本罪ノ客體タルコトヲ得ス。又實際ニ存セサル虛構ノ人モ亦本罪ノ客體タルコトヲ得ス。又行為者自身ハ本罪ノ客體タルコトヲ得ス(註六)。是レ法律ニ人ヲシテ刑事又

誣告罪ノ客體

ハ懲戒ノ處分ヲ受ケシムル目的ヲ以テ虛偽ノ申告ヲ爲シタル者ト規定シタルニ依リ之ヲ知ルヲ得可キナリ。行為者自身カ犯罪者ナリト自首ヲ爲スカ如キハ稀有ナリトノ理由ニ依テ規定セサリシモノナル可シト雖モ斯ル行為ヲ罰スルノ必要アルヤ別論ニ屬ス。

(註六) (一) 同趣旨 江木、岡田、小崎、泉二諸氏。

江木氏曰ク『申告セラレタル者ハ必ス何某タルコトヲ知リ得可キ現在ノ人タルコトヲ要ス。死人、想像上作製セル人又ハ氏名容貌等ノ知レサル者ヲ誣告スルモ其罪ナシ』現行刑法原論一六〇頁ト。岡田氏曰ク『誣告罪ハ或人カ或罪ヲ犯シタリト謂フ偽リノ告訴又ハ告發ヲ爲ス罪ナリ。故ニ犯罪ノ主體ト爲ルコトヲ得サル者ニ犯罪アリタリト偽訴スルモ誣告罪ト爲ル能ハサルハ勿論ナリ。例ヘハ十二歳未滿ノ者カ或罪ヲ犯シタリト偽訴スルモ此ノ如キ幼者ハ犯罪無能力者トシテ訴追ヲ受クルコト無キカ故ニ本罪ハ不成立ナリト謂ハサル可カラス』(刑法講義二七一頁)ト。小崎氏曰ク『被誣告者ハ現ニ生活スルモノニシテ且ツ特定ノ人タルコトヲ要ス。既ニ死亡シタル人又ハ架空ノ人ヲ誣告スルモ本罪ヲ構成セス』(日本刑法論各論七三〇頁)ト。泉二氏曰ク『誣告セラレタル者ハ刑事又ハ懲戒處分ノ客體ト爲リ得可キ他人タルコトヲ要ス。故ニ(中略)死者カ其生前ニ於テ犯罪又ハ職務違反ノ行為ヲ爲シタリト謂フ誣告ノ如キ又ハ狂者某カ他人ヲ殺シタリト謂フ誣告ノ如キハ本罪ヲ構成セス』(日本刑法論六〇三頁)ト。

(二) 一種ノ異説 牧野氏曰ク『誣告ハ此兩者(國家ノ司法其他ノ事務、誣告セラレタル者ノ名譽其他ノ法益)ノ一ヲ侵害スルニ因テ成立ス。故ニ虛無又ハ死亡シタル人ニ對スルノ誣告亦罪ト爲ル』(刑法通義三〇八、三〇九頁)

## 第二 所爲

本罪ハ官廳ニ對シ刑事又ハ懲戒ノ處分ヲ受クルコトヲ得ル人格者ニ刑事又ハ懲戒ノ處分ヲ受ク可キ行爲アル旨ノ虛偽ノ申告ヲ爲スノ行爲アルニ依リテ成立ス。左ニ注意ヲ要ス可キ點ニ付キ略述ス可シ。

(一) 被誣告者ヲ特定シ得可キコト。誣告ハ被誣告者ノ氏名、住所等ヲ明瞭ニ申告シテ之ヲ爲スヲ常トスト雖モ誣告罪ヲ構成スルニハ必スシモ氏名住所等ノ明告ヲ必要トスルモノニ非ス。申告者ノ爲シタル申告ニ依リ直ニ何人ニ對スル申告ナリヤ明カナル場合ハ勿論申告者ノ爲シタル申告ニ依リ何人ニ對スル申告ナリヤ明カナラサルモ取調ノ結果何人ニ對スル申告ナリヤヲ知り得可キ場合ニ於テハ被誣告者ハ特定シ得可キモノト謂フ可シ。故ニ被申告者ノ風貌、骨格、特徵等ヲ指示シ又ハ其異名、通稱等ヲ指示シテ申告スルモ本罪ヲ構成スルニ足ル。然レトモ申告ニ依リ何人ニ對スル

所爲

被誣告者ヲ特定シ得可キコト

刑事又ハ懲戒ノ處分ヲ受ク可キ事實ヲ申告スルコト

(二) 刑事若クハ懲戒ノ處分ヲ受ク可キ事實ヲ申告スルコト。此點ハ之ヲ刑事上ノ處分及ヒ懲戒處分ノ二ニ分テ之ヲ説明スルヲ便ト爲ス。

(甲) 刑事上ノ處分。刑事上ノ處分ヲ受ク可キ事實ノ申告タルヲ要ス。故ニ行爲者カ被申告者ニ犯罪アルコトヲ申告スルモ同時ニ或ハ第一刑事上ノ責任ナキ事實例ヘハ正當防衛ノ事實若クハ心神喪失ニ出テタル事實或ハ第二免刑ノ事實例ヘハ親族相盜ノ事實或ハ第三公訴權消滅ノ事實例ヘハ時効完成ノ事實ヲ主張スルトキハ誣告罪ヲ構成セス。何トナレハ斯ノ如キ場合ニ於テハ被申告者ハ刑事上ノ處分ヲ受クルコトナケレハナリ。親告罪ニ對スル告訴權者以外ノ者ノ虛偽ノ告發ハ誣告罪ヲ構成スルヤ否ヤハ外國法制ニ於テハ多少爭ナキニ非サレトモ我法律ニ

モノナルヤ到底之ヲ知ル途ナキ場合ハ誣告罪アリト謂フ能ハス(註七)。

(註七) 同題旨 勝本氏刑法新義下卷二四六、二四七頁、小崎氏日本刑法論各論七三〇頁、泉二氏日本刑法論六〇三頁參照。



於テハ誣告罪ヲ構成セサルコト疑ナシ。何トナレハ告訴權者ノ告訴アルニ非サレハ法文カ之ヲ要求スルカ如ク刑事上ノ處分ヲ受ケシムルコト能ハサレハナリ(註八)。

(註八) (一) 同題旨 小崎氏日本刑法論各論七三四、七三五頁、泉二氏日本刑法論六〇五頁、牧野氏刑法通義三〇頁參照。

(二) 異說 江木氏曰ク『犯罪ノ事實ヲ申告スルコトヲ要ス。而シテ此犯罪トハ即チ刑法上罪ト認メタル所爲ヲ指シト雖モ申告上ノ事實ニシテ犯罪タランニハ必スシモ刑罰ニ處セラル可キモノト否トナ間ハス。故ニ無能力者ノ犯罪又ハ既ニ期滿免除ヲ得タル犯罪ニ就キ誣告スルモ仍ホ此罪ヲ構成スルニ足ル可シ』(現行刑法原論一六〇頁)ト。

懲戒處分

(乙)

懲戒處分ヲ受ク可キ申告タルコトヲ要スルカ故ニ行爲者カ被申告者ニ職務上ノ義務ニ違反シタル事實ヲ申告スルモ之ト同時ニ懲戒處分ヲ爲ス可カラサル事實例ヘハ長官ノ許可ニ出テタル事實ヲ附シタル場合ノ如キハ誣告罪ヲ構成セス。茲ニ懲戒處分トハ公務員及ヒ公務員ニ準ス可キ職務ヲ有スル者例ヘハ辯護士又ハ公證人ニ對スル懲戒處分ヲ指稱スト雖モ一般人ニ對スル過料ノ制裁ノ如キハ之ヲ懲戒處

分ト解ス可キモノニ非ス。何トナレハ懲戒處分ハ一定ノ意義ヲ有シ行政官署若クハ懲戒裁判所ニ於テ公務員若クハ法律ニ依リ之ニ準ス可キ者ニ對シ爲サル、處分ニシテ何等特別ナル職責ヲ有セサル一般人ニ加フ可キ處分ニ非サレハナリ(註九)。

(註九) (一) 同題旨 泉二氏曰ク『茲ニ所謂懲戒ノ處分トハ一定ノ業務ニ従事スル者ヲシテ規律ヲ格守セシムル爲メ其規律違反ニ對スル制裁ヲ科スル處分ヲ謂フモノナルカ故ニ法令上特ニ懲戒處分ト稱スルモノ、ミナラス又懲戒裁判若クハ懲戒處分ト稱スルモノヲ包含ス(中略)。辯護士又ハ公證人ニ對シテハ過料モ亦懲戒罰ノ一種ナリ。然レトモ總テノ過料ヲ懲戒罰ナリト解スル勿レ。例ヘハ身分又ハ月籍ニ關スル届出ノ期間ヲ怠リタル者ニ科ス可キ過料ノ如キ是ナリ。故ニ他人カ期間經過後ニ出生届ヲ爲シタリト誣告シテ過料罪ヲ受クシメントスルカ如キハ本罪ヲ構成セサル可シ』(日本刑法論六〇七、六〇八頁)ト。

(二) 異說 牧野氏曰ク『懲戒ノ處分トハ刑事上ノ處分ヲ除クノ外一般ニ實質上ノ刑罰(前上第四項參照)ヲ指稱スルモノト解シ官吏及ヒ官吏ノ待遇ヲ受クル者ノ懲戒、辯護士ノ懲戒、公證人ノ懲罰ハ勿論民法、商法ニ定メタル過料(民法第八四條、第一一〇條、商法第一八條第二項、第二六一條、第二六二條、第五三六條)ノ處分モ亦懲戒ニ入ルモノト解ス』(刑法通義三〇九頁)ト。

公務員又ハ法律ニ定メタル一定ノ職務ヲ有スル者ハ獨リ其職務上ノ

義務ニ背反シタル場合ノミナラス其私行上ニ於テ其職務ヲ有スル者ノ體面ヲ損傷スルカ如キ行爲アリタル場合ニ於テモ尙ホ懲戒ノ處分ヲ受ク可キモノナレハ其孰レナルヲ問ハス苟モ懲戒處分ヲ受ク可キ虛僞ノ申告ヲ爲シタルトキハ誣告罪ヲ構成スルモノトス。

(丙) 申告ニ依リ刑事又ハ懲戒ノ處分ヲ受ケ又ハ受ケル虞アルコト。法律

カ虛僞ノ申告ヲ誣告罪トシテ罰ス可キ場合ハ被申告者カ其申告ニ依リ刑事若クハ懲戒ノ處分ヲ受クルカ又ハ之ヲ受ク可キ虞アル場合ニ限ル。故ニ虛僞ノ申告ニ依リ被申告者カ刑事又ハ懲戒ノ處分ヲ受ケスシテ他ノ不利益例ヘハ或營業者ニ對スル營業停止若クハ營業認可ノ取消ヲ受クル事實ノ申告ノ如キ又前例示ノ如ク通常人カ過科ノ制裁ヲ受ク可キ事實ノ申告ノ如キハ之ヲ包含セス。尤モ斯ル場合ニ於テハ情狀ニ依リ僞計ニ依ル營業妨害ノ罪ヲ構成スルコトアル可キナリ(三)。(三)。

(三) 申告ハ客觀的虛僞ナル一定ノ所爲タルコト。故ニ不特定ノ所爲例ヘハ

申告ニ依  
リ刑事又  
ハ懲戒ノ  
處分ヲ受  
ケルカ又  
ハ之ヲ受  
ク可キ虞  
アル場合  
ニ限ル

申告ハ客  
觀的虛僞  
ナル一定  
ノ所爲タ  
ルコト

ナル一定  
ノ所爲タ  
ルコト

彼レハ一般ニ竊盜ヲ營業トスル者ナリト申告スルカ如キハ誣告罪ヲ構成セス。尤モ斯ル場合ニ於テハ情狀ニ依リ名譽毀損又ハ侮辱罪ヲ構成スルコトアル可キナリ。又行爲者ニシテ虛僞ナリト信シテ申告シタルモ實際ニ於テ被申告者ニ其申告シタルト同一ナル所爲アリタルトキハ行爲者ニハ誣告スルノ意思ヲ以テ申告シタルニ拘ラス誣告ノ責任ナキモノトス(註一〇)。斯ル場合ニ於テ行爲者ノ申告ハ主觀的虛僞ナルニモセヨ客觀的眞實ナレハ法文ノ所謂虛僞ノ申告ナリト謂フ能ハサレハ誣告罪ヲ構成セス。

(註一〇) 同說 フォン、ビルクマイヤー、フォン、リスト、フランクノ諸氏(V. Birkeneyer, S. 11; v. Irsch, § 182; Frank, II, 4. ju § 164.)。我邦ノ學者モ亦同趣旨ニ出ツ。江木氏現行刑法原論一六〇、一六一頁、勝本氏刑法析義下卷二四六頁、岡田氏刑法講義二七二頁、小崎氏日本刑法論各論七三四頁、牧野氏刑法通義三一〇頁參照。

虛僞ノ事實トハ或ハ事實ノ虛構ニ基クコトアリ又重要ナル事實ノ隱蔽ニ基クコトアリ。例ヘハ竊盜ノ事實ナキニ恰モ之アル如ク申告スル如キハ前者ノ例ニシテ又例ヘハ親族相盜ノ場合ニ於テ親族關係アル事實ヲ隱

蔽シ竊盜ノ點ノミニ對シ告訴スルカ如キハ後者ノ例ナリ(註一一)。

(註一一) 同趣旨 江木氏現行刑法原論一六〇、一六一頁、泉二氏日本刑法論六〇四、六〇五頁、小崎氏日本刑法論各論七三六頁參照。

官廳ニ對  
スル申告  
タルコト

當該官廳  
吏若クハ官

(四) 官廳ニ對スル申告タルコト。法文ニ所謂申告ヲ爲ストハ當該官廳若クハ官吏ニ對スル申告ヲ爲スヲ謂フ。仍テ當該官廳若クハ官吏トハ如何ナル意義ヲ有スルヤ又申告トハ如何ナル意義ヲ有スルヤヲ明カニセサル可カラス。

(甲) 當該官廳若クハ官吏。茲ニ當該官廳トハ刑事處分ノ手續ノ開始ヲ爲ス職權ヲ有スル官廳若クハ官吏及ヒ懲戒處分ノ手續開始ノ上申ヲ爲シ又ハ自ら懲戒處分ヲ爲シ得キ職權アル當該官廳若クハ官吏ヲ指稱ス。刑事處分ノ手續ノ開始ヲ爲ス職權アル官廳若シクハ官吏トハ犯罪ノ搜查、起訴ヲ爲ス職權アル官廳若クハ官吏例ヘハ檢事及ヒ司法警察官(刑訴七條以下)ノ如キ又現行犯事件ニ付テハ豫審判事モ亦然リ(刑訴一、四二條)。懲戒處分

ノ手續開始ノ上申ヲ爲ス職權アル官吏トハ例ヘハ本屬長官(文官懲戒令二九條)又ハ懲戒ヲ加フル職權アル官吏例ヘハ陸軍ノ長官、軍團長、師團長、旅團長、衛戍司令官及ヒ各軍隊ノ隊長(陸軍懲戒令二、三條)又例ヘハ海軍ノ長官、艦團隊長及ヒ各廳長(海軍懲戒令)ノ如キハ當該官吏ナリ。然レトモ行為者ノ爲ス申告ハ必スシモ斯ル官吏ノ屬スル官廳ニ對シ直接ニ之ヲ爲スヲ要セス。苟モ管轄官廳ヲシテ刑事又ハ懲戒ノ處分ヲ爲サシムル爲メ申告ヲ爲ス以上ハ管轄官廳ヲ代表スル權限ナキ吏員其他ノ者ニ對シ之ヲ爲スト又他ノ官廳ニ對シ之ヲ爲ストヲ問ハス其申告カ結局當該官廳ニ到達シタルトキハ其爲シタル申告ハ誣告罪ノ條件ニ適合スル申告即チ有效ナル申告タルヲ失ハサルモノトス。尤モ當該官廳若クハ當該官廳ヲ代表スル權限アル官吏以外ノ者ニ對シテ爲シタル申告ハ當該官廳若クハ官吏ニ其申告カ到達スルニ至リテ始メテ申告ヲ完成スルモノトス。故ニ例ヘハ檢事若クハ司法警察官ニ爲ス告訴、告發ヲ巡查、憲兵卒其他刑事巡查ノ

手先タル密偵等ニ對シテ爲シタル場合ニ於テハ其ノ申告カ巡查又ハ憲兵卒等ノ手ヲ經テ檢事若クハ司法警察官ニ到達シタル時ヲ以テ誣告罪ハ完成スルモノニシテ又例ヘハ刑事事件ニ付キ搜查又ハ起訴ノ權限ナキ官廳ニ爲シタル告訴、告發ト雖モ其官廳カ之ヲ當該官廳ニ移牒シ依テ申告カ當該官廳ニ到達シタルトキハ本罪ヲ完成ス可キカ如シ。蓋シ官廳ノ事務ハ等シク國家ノ事務ニ外ナラサレハ申告ニ付キ管轄權ナキ官廳カ申告ヲ受理シタル場合ニ於テハ之ヲ當該官廳ニ移牒スルヲ常トスルカ故ニ斯ル手續ニ依リ申告カ當該官廳ニ到達シタル場合ニ於テ其申告ハ之ヲ有效ナリトシテ行爲者ニ刑責ヲ負ハシムルハ事實ト法理トニ符合スル最モ適當ナル見解ナリトス可キナリ。然ルニ學者或ハ管轄官廳若クハ官吏以外ノ者ニ對シ爲シタル申告ハ其效ナシト爲シ行爲者ノ刑責ヲ免セシメントスルカ如キハ何等ノ根據ナキモノト謂ハサルヲ得ス(註一二)。尤モ當該官廳ヲ代表スル權限ナキ吏員其他ノ者若クハ當該官

廳以外ノ官廳ニ對シ爲シタル申告ハ當該官廳ニ到達スル前ニ於テハ之ヲ取消スコトヲ得ルモノトス(註一三)。

(註一二) (一) 大體ニ於テ同趣旨ナルカ如キモ同意スル能ハサル點アリ。特ニ圈點ヲ付シタル部分ハ本書ト反對ニ出ツ。小崎、泉二兩氏。

小崎氏曰ク「官ニ申告スルコト。官トハ犯罪捜査ノ職權アル者ヲ意味ス。例ヘハ檢事、警視總監、地方廳長官、司法警察官ノ如キ是ナリ。而シテ此等ノ官吏ニ申告スルニハ直接タルト間接タルトヲ問ハサルカ故ニ例ヘハ巡查、憲兵卒ノ如キ犯罪捜査ノ職責ナキ官吏ニ申告スルモ是等ノ官吏ヲ介シ檢事又ハ司法警察官ニ申告ノ事項ヲ覺知セシメタルトキハ誣告ト謂フコトヲ得可ク其他ノ官吏又ハ普通人ヲ利用シテ犯罪捜査ノ職責アル官吏ニ申告スルトキ亦同シ。明治三十二年第七七五號同年七月七日宣旨大審院判決ニ依レハ誣告罪ハ不實ノ告訴ヲ受ク可キ管轄官廳ニ爲スニ非サレハ成立セスト解セルハ正當ナリ。但シ事件カ管轄官廳ニ移送セラレタルトキハ既達ト爲ル日本刑法論各論七三三頁)ト。泉二氏曰ク「誣告ハ當該官廳ニ對シテ之ヲ爲スコトヲ要ス。而シテ刑事ノ處分ヲ受ケシムル目的ニ出テタル誣告ハ之ヲ犯罪ノ捜査權アル者即チ檢事又ハ司法警察官ニ爲スヲ以テ通例トスルモ檢事カ犯罪ナキコトヲ知リツ、犯罪アリトシテ或者起訴シタルトキハ尙ホ本罪ヲ構成ス。巡查ニ爲シタル虛偽ノ犯罪事實ノ申告ハ司法警察官ニ到達シタル場合ニ限リ本罪ヲ構成ス。懲戒處分ヲ受ケシムル目的ニ出テタル誣告ハ被誣告者ニ對シテ抽象的ニ懲戒權ヲ有スル長官ニ向テ爲シタルコトヲ要ス。然レトモ權限ナキ官署ニ爲シタル誣告カ長官ニ送致セラレタルトキハ本罪ヲ構成ス可シ」(日本刑法論六〇五、六〇六頁)ト。

(二) 異議 申告ハ管轄公務所ニ對シテ爲スニ非サレハ誣告罪ヲ成立セス。大審院判例及ヒ江木、勝本、岡田、牧野ノ諸氏。

判例ニ曰ク『誣告罪ハ不實ノ告訴ヲ受ク可キ管轄官廳ニ爲スニ非サレハ成立セズ』(三二年大審院判決録七卷一七頁)ト。江木氏曰ク『申告ハ相當官署ニ對シテ告訴、告發ヲ爲スヲ謂フ』(現行刑法原論一六二頁)ト。勝本氏曰ク『告訴、告發ヲ受ク可キ官署ニ對シテ之ヲ爲シタルコト。告訴、告發ヲ受ク可キ官署ハ刑事訴訟法第四十九條ニ規定スル所ニシテ檢事及ヒ司法警察官トス。檢事及ヒ司法警察官ニ之ヲ爲スコトヲ要スルカ故ニ此等ノ官署以外ノ者ニ爲シタルモノハ告訴、告發トシテ有效ナラス』(刑法新義下卷二四七頁)ト。岡田氏曰ク『告訴、告發ノ形式トシテ相當ノ官署又ハ官吏ニ之ヲ爲スコトヲ必要トス』(刑法講義二七一、二七二頁)ト。牧野氏曰ク『相當官署ニ對スル申告ナラサル可カラズ。犯罪事實ニ就テハ搜查權アル者即チ檢事、司法警察官ニ對セサル可カラズ(巡查ハ司法警察官ノ補助機關ナルカ故ニ之ニ對スル誣告モ亦誣告罪ナリト解ス)。懲戒ニ該當ス可キ不法行爲ニ就テハ懲戒手續ヲ開始シ得可キ者ニ向テ爲シタル行爲ナラサル可カラズ』(刑法通義三一〇頁)ト。

(註一三) 同説 フランク氏曰ク『若シ申告官廳ニ到達スル前ニ取消サレタルモノトセハ官廳ノ認識ハ申告者ノ意思ニ基キタルモノト謂フ能ハサル可シ』(Frank, II. 2. zn § 161)ト。

申告

(乙) 申告。本罪ニ於ケル申告ハ必スシモ自ラ進テ之ヲ爲スコトヲ必要トセス。故ニ行爲者カ自ラ進テ申告ヲ爲スト又當該公務員ヨリ訊問ヲ受クルニ當リ他人ニ刑事又ハ懲戒處分ヲ受ク可キ行爲アリト陳述シタ

ルトヲ問ハス苟モ行爲者カ申告シタル事實ニシテ被申告者ヲシテ刑事又ハ懲戒ノ處分ヲ受ケシム可キモノナル以上ハ誣告罪ハ成立スルモノトス(註一四)。法文ノ上ヨリスルモ人ヲシテ刑事又ハ懲戒ノ處分ヲ受ケシム可キモノナルコトヲ認識シ之ヲ當該官廳ニ申告シタルトキハ本罪ノ要件ヲ具備スルノミナラス法理ノ上ヨリスルモ單ニ行爲者カ自ラ進テ申告セサリシノ故ヲ以テ之ヲ無罪トスルカ如キハ全然根據ナキモノトス。故ニ學者或ハ本罪ヲ成立スルニハ自ラ進テ申告スル行爲アルコトヲ必要トスト主張スルカ如キハ(註一五)法文上、法理上何等ノ根據ナキモノナリ。

(註一四) ドンチンク、ハイルホルン、マイヤー、アルフェルト等ノ諸氏ハ同題旨ノ説明ヲ爲ス(Binding, Titul. II. 528; Heilmann, vergl. Darstellung, S. 107; Meyer-Alfeld, S. 518.)

(註一五) 異説 フランク、フォン・リスト等ノ諸氏(Frank, zu § 164; List, zu § 182.)

而シテ本邦ノ學者ハ概ネフランク、リスト氏ノ所説ニ賛成ス。勝本、岡田、小崎、泉ニ諸氏。

勝本氏曰ク『進テ犯罪事實ヲ申告スルコトヲ要スルカ故ニ官廳ヨリ召喚ヲ受ケ又ハ官吏ノ訊問ニ應シテ或事實ヲ申

告スルカ如キニ非スシテ進ンテ犯罪事實アリト申告シタル場合ニ非スハ本罪ヲ構成スルコトナシ(刑法析義下卷二四六頁)ト。岡田氏曰ク「告訴、告發ノ條件トシテ本人自ラ進ンテ告知シタルコトヲ必要トス。官吏ノ推問ニ應シ臨時虛偽ノ陳述ヲ爲スハ誣告ニ非ラス」(刑法講義二七三頁)ト。小崎氏曰ク「申告トハ自ラ發意シタル報告ヲ意味ス。從テ證人、參考人又ハ被告人トシテ官署ノ訊問ヲ受クルニ際シ他人ニ關スル不實ノ陳述ヲ爲スモ誣告ト謂フコトヲ得ス。然レトモ司法警察官又ハ檢事ノ取調ヲ受クルニ當リ其取調ヲ受クル事實ト全然關係ナキ事項ニ付テ不實ノ陳述ヲ爲ストキハ誣告タルコトヲ得可シ」(日本刑法論各論七三二頁)ト。泉二氏曰ク「申告トハ自ラ進ンテ事實ヲ告知スルコトヲ謂フ。訊問ニ應シテ答フルハ進ンテ告知スルノ意思ナキヲ以テ申告ニ非ス」(日本刑法論六〇四頁)ト。

(丙) 申告ノ方法。申告ハ行爲者カ自己ノ名ヲ稱シテ當該官廳ニ爲スヲ普通ト爲ス可キモ或ハ匿名若クハ變名ヲ以テシ或ハ直接當該官廳若クハ其機關ニ爲サス密偵又ハ之ニ類スル者ニ爲スコトアル可シト雖モ申告タル效力ニ於テハ毫モ影響ナシ。而シテ申告ノ方式ニ付キテモ法律ハ何等ノ規定ヲ設ケサルカ故ニ如何ナル方法ニ依ルモ之ヲ問フ所ニ非ス。故ニ正式ノ告訴、告發ニ依ルヲ要セサルハ勿論苟モ申告ノ趣旨ヲ認メ得可キモノナルニ於テハ書面ニ依ルト又ハ口頭ニ依ルト又明カニ事實ヲ

申告ノ方法

申告スルト又暗黙ニ事實ヲ申告ストハ之ヲ問フ所ニ非ス(註一六)。

(註一六) 同趣旨 大審院判例、勝本、岡田、小崎、牧野諸氏。

判例ニ曰ク「苟モ他人ニ犯罪アリトシテ不實ノ事實ヲ構造シ或方法ニ依リ之ヲ當該官吏ニ申告スルニ於テハ誣告罪ハ完全ニ成立ス。而シテ其中申告ハ告訴ノ形式ヲ以テスルト否ト又自己ノ名義ヲ以テスルト否トハ犯罪ノ成立ニ何等ノ關係ナラズ」(三八年大審院判決錄二九二頁)ト。同主旨(三〇年七卷三二頁、三七年五一頁)。又曰ク「入テ誣告スル爲メニ提出シタル告訴狀カ法律上ノ條件ヲ具備スルト否トハ誣告罪ノ成立ニ何等ノ關係ナシ」(四〇年五七頁)ト。同主旨(三五年一卷一七五頁)。勝本氏刑法析義下卷二四八頁、岡田氏刑法講義二七二頁、小崎氏日本刑法論各論七三一、七三二頁、牧野氏刑法通義三〇九、三一〇頁參照。

### 第三 故意

行爲者ハ其申告シタル事實ハ虛偽ナルコトヲ知ルコトヲ要ス。即チ行爲者カ其申告スル事實カ全然不實ナルコトヲ確信スルコトヲ必要トス。故ニ行爲者ニシテ多分事實ナル可キモ或ハ不實ナルコトアル可シトノ疑念ヲ抱ケル場合ニ於テ行爲者カ之ニ基キ申告ヲ爲スモ本罪ヲ構成スルコトナシ。之ヲ要スルニ本罪ノ成立ニハ不確定ノ故意アルヲ以テ充分ナリト爲サス確

犯罪事實  
不實ナルコトヲ知ルコトヲ要ス  
故意

定ノ故意アルヲ必要トス(註一七)。

(註一七) (一) 同註 フォン・ビルクマイヤー、フランク等ノ諸氏(v. Birkmeyer, S. 1195; Frank, III, 1. zu 2

Text)。小嶋氏日本刑法論各論七三六頁、泉二氏日本刑法論六〇六頁參照。

(二) 異説 マイヤー氏ハ不確定ノ故意アルヲ以テ充分ナリト爲ス(Meyer, S. 221)。江木氏現行刑法原論一六一、一六二頁參照。

元來當該官廳ハ刑事又ハ懲戒處分ヲ受ク可キ行爲アリト確信スルトキハ刑事又ハ懲戒處分ノ手續ヲ開始シ又ハ直ニ斯ル處分ヲ爲ス可キ職權ヲ有スルモノナレハ人ヲシテ刑事又ハ懲戒ノ處分ヲ受ケシメントスルニハ斯ル職權アル官廳ニ對シ被申告者ニ斯ル行爲アル旨ノ申告ヲ爲スニ如クハナシ。故ニ行爲者カ當該官廳ニ對シ被申告者ニ刑事又ハ懲戒ノ處分ヲ受ク可キ行爲アル旨ノ虛偽ノ申告ヲ爲スカ如キハ裁判ヲシテ不適正ノ進行ヲ爲サシム可キ行爲ナリ。而シテ行爲者カ其申告シタル被申告者ノ所爲ハ法律上刑事又ハ懲戒ノ處分ヲ受ク可キモノタルコトヲ確信シ而シテ被申告人ニ斯ノ如キ所爲ナキコトヲ確信シナカラ其確信スル所ニ反シ斯ノ如キ所爲アル旨ノ

申告ヲ爲シタルトキハ其行爲ハ裁判ノ不適正ナル進行ヲ爲サシム可キ行爲ナルコトヲ確的ニ認識シテ之ニ應スル行爲ヲ爲スモノナレハ法文ノ所謂人ヲシテ刑事又ハ懲戒ノ處分ヲ受ケシムル目的ヲ以テ虛偽ノ申告ヲ爲シタルモノト解ス可キナリ。之ニ反シテ行爲者ニシテ被申告者ノ所爲ナリトシテ申告シタル所爲カ元來法律上刑事又ハ懲戒ノ處分ヲ受ク可キモノニ非スト誤信シタルコト明カナル場合若クハ被申告者ニ其申告シタル如キ所爲アリタルモノト疑フ可キ理由アリタルトキハ行爲者ニ人ヲシテ刑事又ハ懲戒ノ處分ヲ受ケシムル目的ヲ以テ虛偽ノ申告ヲ爲シタル行爲アルモノト謂フ能ハス。何トナレハ斯ノ如キ行爲ハ裁判ノ不適正ナル進行ヲ爲サシム可キ行爲ナルコトヲ認識シテ之ニ應スル行爲ヲ爲シタルモノト謂フ能ハサレハナリ。之ヲ要スルニ行爲者カ其申告シタル行爲ハ法律上刑事又ハ懲戒ノ處分ヲ受ク可キモノニシテ且ツ虛偽ナルコトヲ確的ニ認識シテ申告シタルトキハ人ヲシテ刑事又ハ懲戒ノ處分ヲ受ケシムル目的ヲ以テ虛偽ノ申告ヲ爲シ

タルモノト解スルノ外他ニ途アルコトナシ。斯ノ如ク行爲ノ結果ヲ認識シテ之ニ應スル行爲ヲ爲ストキハ誣告罪構成ノ要素ヲ具備スルモノニシテ行爲者カ更ニ進テ被申告者ヲシテ刑事又ハ懲戒ノ處分ヲ受ケシム可キコトヲ希望スルコトヲ要セス。故ニ例ヘハ行爲者カ其犯シタル罪ヲ免レンカ爲メ又ハ逃走ノ便ヲ得ンカ爲メ若クハ其知人ヲシテ其犯シタル罪ヲ免レシメ又ハ逃走ノ便ヲ得セシムル爲メ當該官廳ニ對シ第三者ニ同一ノ犯罪行爲アリタルモノトシテ虚偽ノ申告ヲ爲ス場合ニ於テモ尙ホ誣告罪ヲ構成ス可キナリ(註一八)。然ルニ學者或ハ被申告者カ其虚偽ノ申告ニ依リ刑事又ハ懲戒ノ處分ヲ受ク可キコトノ認識アルヲ以テ足レリト爲サス。更ニ進テ刑事又ハ懲戒ノ處分ヲ受クルコトヲ希望スルコトヲ要スト説明スルカ如キハ相當ナラス。

(註一八) (一) 同說 フランク氏及ヒ獨逸帝國裁判所判例 (Frank, III, 3, zu 164; R. 4, 432; E. 10, 371.)

(二) 異說 行爲者ノ誣告ニ依リ被申告者カ刑事又ハ行政ノ處分ヲ受クルコトヲ認識スルヲ以テ足レリト爲サス更

ニ進テ斯ル處分ヲ受クルコトヲ希望スルヲ要ス。泉二氏。

氏曰ク「本罪ノ成立ニハ上叙ノ認識ノ外他人ヲシテ刑事又ハ懲戒ノ處分ヲ受ケシムル目的アルコトヲ要ス。換言スハ自己ハ誣告ニ困リ其被誣告者カ刑事又ハ懲戒ノ處分ヲ受クルコトヲ希望スルコトヲ要ス。然レトモ其目的カ主タルモノ又ハ唯一ノモノタルコトヲ要セス。例ヘハ自ら犯罪ヲ犯シタル者カ其罪跡ヲ隠蔽スル目的ヲ以テ他人ニ其罪ヲ嫁セント欲シ誣告ヲ爲シタルカ如キ場合ニ於テモ本罪ヲ構成ス可シ。然レトモ例ヘハ犯罪ノ嫌疑ニ因リ進現行犯人トシテ逮捕引致セラレタル者カ他人ヲシテ處罰ヲ受ケシムルノ意思アルニ非スシテ一時司法警察官ヲ欺キ逃遁センカ爲メ嫌疑ニ係ル犯罪ヲ犯シタル者ハ自己ニ非スシテ何某ナリト申立テタル場合ノ如キハ本罪ニ必要ナル目的アリト謂フコトヲ得ス」(日本刑法論六〇七頁)ト。

#### 第四 主體

誣告罪ハ何人ト雖モ之ヲ犯シ得可キモノトス。唯タ之カ例外トシテ刑事又ハ懲戒ノ手續ヲ開始ス可キヤ否ヤニ付キ終局ノ職權ヲ行使スル者ハ此罪ヲ犯スコトヲ得ス。誣告トハ虚偽ノ申告ヲ爲スニ依リ職權アル當該公務員ヲ錯誤ニ陷レ以テ刑事又ハ懲戒ノ手續ノ不當ナル開始ヲ爲サシムルコトヲ以テ性質トスルモノナルカ故ニ刑事事件ニ關シテ起訴ノ職權ヲ有スル檢事カ虚偽ノ事實ニ基キ公訴ヲ提起シ又ハ懲戒申立ニ付キ職權アル本屬長官カ

主體



虚偽ノ事實ニ基キ懲戒委員會ノ審査ヲ要求スルカ如キハ法文ノ所謂虚偽ノ申告ニ該當セス。斯ノ如キ檢察又ハ本屬長官ノ所爲ハ恰モ判事カ事實ニ反シテ無辜ナル人ニ對シ刑ノ言渡ヲ爲スト同シク又懲戒ヲ爲スノ職權ヲ有スル者カ事實ニ反シテ懲戒ヲ爲スノ所爲ト同シク職權濫用ニ外ナラズシテ別罪(例ハハ)ヲ構成スルハ格別誣告罪ヲ構成スルモノニ非ス(註一九)。

(註一九) 異説 泉二氏。(註二) 中泉二氏ノ所説參照。

茲ニ疑問トス可キハ數人共謀シテ誣告ヲ爲シタル場合ニ於テ共謀者中一人ノ誣告行爲ノ實行ハ共謀者全體ノ行爲ト看做ス可キヤ否ヤノ點ニ在リ。元來誣告ハ前既ニ之ヲ説明シタルカ如ク申告ノ方法ニ何等制限ナク匿名變名ニ依ルト又直接ニ當該官廳ニ對シ之ヲ爲スト間接ニ之ヲ爲ストハ犯罪構成ニ影響ナキモノナレハ共謀者ニ於テ誣告ニ共謀シタル以上ハ告訴狀若クハ告發狀ニ其内一人カ署名シタル場合ナルト何人モ署名セサル場合ナルトヲ問ハス現ニ虚偽ノ申告カ當該官廳ニ到達シタル以上ハ各共謀者ハ實行正

共謀者中一人ノ誣告行爲全體ノ實行爲ト看做ス可キ

犯ナリト謂ハサルヲ得ス。若シ夫レ告訴人ノ外實行正犯タル者ナシト謂ハ、無記名投書ヲ以テスル虚偽ノ申告ハ實行正犯者ナク從テ誣告罪ヲ構成セスト言ハサル可カラサルニ至ラン(註二〇)。

(註二〇) (一) 同説 大審院判例(新)、小崎氏。

判例ニ曰ク『數人共謀シテ誣告ヲ爲ス場合ニ在テハ共謀者中一人ノ犯罪行爲ノ實行ハ共謀者全體ノ行爲ト看做ス可キモノトス』(三五年大審院判決錄六卷六六頁)ト。同主旨(三〇年五卷四八頁)。小崎氏曰ク『明治三十年第五九八號同年七月二日宣告大審院判決ニ依レハ誣告罪ハ告訴人ノ外他ニ實行正犯アルコトナシ。而シテ告訴人ト共謀シテ其代人ト爲リ告訴狀ヲ檢事ニ提出シタル所爲ハ從犯ナリト解セルハ誤見ナリ。同判旨ニ依レハ無記名投書ノ場合ニハ誣告罪ハ成立スルコトヲ得ス』(日本刑法論各論七三四頁)ト。

(二) 異説 大審院判例(舊)、泉二氏。

判例ニ曰ク『誣告罪ハ告訴人ノ外他ニ實行正犯アルコトナシ。而シテ告訴人ト共謀シ其代人ト爲リ告訴狀ヲ檢事ニ提出シタル所爲ハ從犯ナリ』(三〇年七卷一頁)ト。同主旨(三〇年四卷五一頁、二七年三一九頁)。泉二氏曰ク『從來ノ判決例ニ於テ(明治三〇年判決錄第七卷第二頁參照)誣告罪ハ告訴人ノ外他ニ實行正犯アルコトナシ。而シテ告訴人ト共謀シテ其代人ト爲リ告訴狀ヲ作製シ之ヲ檢事ニ提出シタル所爲ハ從犯ナリト認メタルモ若シ其代人ニモ本罪ニ必要ナル目的アリタル以上ハ之ヲ以テ誣告ノ正犯ト爲ス可ク所謂告訴人ト認メタルハ誣告ノ教唆犯ト認ムルヲ可トス。之ニ反シ其後(明治三五年中)同院カ數人共謀者中一人ノ犯罪行爲ノ實行ハ共謀者全體ノ行爲ト見做ス

可キコトヲ認メタルハ是レ亦疑フ可シ。實行其モノヲ分擔セサル者ハ寧ロ從犯ヲ以テ問フ可キナラン(日本刑法論 六〇九頁)ト。

### 第五 誣告罪ト他ノ犯罪トノ競合

行爲者カ人ヲ殺ス目的ヲ以テ若クハ人ノ自由ヲ剝奪スル目的ヲ以テ他人ニ關シ死刑又ハ自由刑ヲ受ク可キ犯罪行爲アリトノ虛偽ノ事實ヲ當該官廳ニ申告シタル場合ニ於テ被誣告者ニ對スル刑事事件カ開始セラレ行爲者豫期ノ如ク被誣告者ハ死刑ニ處セラレ又ハ自由ヲ剝奪セラレタル場合ニ於テハ誣告罪ト殺人若クハ逮捕、監禁ノ罪トノ想像上ノ二罪アルモノトス(註二)。

然レトモ多數ノ場合ニ於テハ死刑又ハ拘留若クハ拘留ト誣告トノ間ニ原因結果ノ連絡ヲ缺クコト尠カラサル可シ。斯ル場合ニ於テハ容易ニ行爲者ニ殺人又ハ逮捕、監禁ノ責アリト謂フ能ハス。

(註二) 同說 マイヤー氏 Meyer, S. 621。

### 第六 誣告事實ノ自白

誣告事實ノ自白

誣告罪ハ誣告ト同時ニ完成スルモノニシテ誣告アリタル後ニ之ヲ取消スモ誣告罪ヲ消滅スルニ足ラス。然レトモ法律ハ誣告ニ依リ開始シタル裁判確定前又ハ懲戒處分前ニ誣告事實ヲ自白シタルトキハ刑ヲ輕減又ハ免除スルコトヲ得可キ旨ヲ定メタリ。而シテ其刑ヲ輕減又ハ免除スルト又之ヲ爲サ、ルトハ裁判官ノ自由裁量ニ一任セリ。蓋シ行爲者カ誣告ヲ自白スルノ情狀ニ至リテハ千差萬別ニシテ或ハ法定刑ヲ以テ罰セサル可カラサルモノアリ。或ハ其刑ヲ輕減スルヲ必要トスルモノアリ。又其刑ヲ免除スルヲ必要トス可キモノアル可ク豫メ之ヲ一定スル能ハサルモノト認メタルモノナラム。

### 第二節 偽證罪

偽證罪ノ概念

偽證罪ニ關スル我刑法ノ説明ヲ爲スニ先チ一言セサル可カラサルコトアリ。其ハ歐洲各國ニ於ケル偽證罪ト我刑法ノ偽證罪トノ差異ナリ。歐洲各國ニ於ケル偽證罪ハ證人カ宣誓ノ上虛偽ナル事實ヲ陳述スルハ神ヲ冒瀆ス

ル所爲ナリトシテ之ヲ處罰ス可キモノニシテ其本質ハ裁判所ニ於テ爲シタル神ニ對スル宣誓ニ背ク罪ナリ。故ニ歐洲各國ニ於ケル偽證罪ハ之ヲ偽誓罪若クハ違誓罪 (Mein eid) ト稱ス可キモノトス。之ニ反シテ我國ニ於ケル偽證罪ハ裁判所ニ對シ繫争事件ニ付キ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ黙秘セス又何事ヲモ附加セサルコトヲ宣誓シタル證人カ虛僞ノ陳述ヲ爲ス行爲ヲ處罰スルモノニシテ本罪ノ本質ハ單ニ宣誓ニ背ク罪ニ非スシテ證人カ虛僞ノ陳述ヲ爲スノ罪ナリトス。以上述フルカ如ク歐洲各國ニ於ケル偽證罪ト我國刑法ノ偽證罪トハ本質ニ於テ全然相同シカラサルカ故ニ其當然ノ結果トシテ以下述フルカ如キ差異ヲ生スルモノトス。(一) 歐洲各國ニ於テハ宣誓ニ背ク所爲ヲ處罰スルモノナルカ故ニ眞實ヲ述フ可キコトヲ宣誓シタル者カ單ニ黙秘シテ何事ヲモ陳述セサル場合ニ於テモ尙ホ偽誓罪ヲ構成ス可キモ我刑法ニ於テハ虛僞ノ陳述ヲ爲ス行爲ヲ處罰スルモノナルカ故ニ眞實ヲ述フ可キコトヲ宣誓シタルニ拘ラス單ニ黙秘シテ答ヘサルカ如キハ證言ヲ拒ムノ罪ヲ

證人カ虛僞ノ陳述ヲ爲ス罪

構成スルコトアルハ格別決シテ偽證罪ト爲ルコトナシ。(二) 歐洲各國ニ於テハ宣誓其モノニ背ク罪ニシテ苟モ宣誓ニシテ虛僞ナルトキハ偽誓罪ヲ構成ス可キカ故ニ宣誓ヲ以テ其既ニ爲シタル虛僞ノ陳述ノ眞正ナルコトヲ保證シタルトキハ直ニ偽誓罪ヲ構成ス可キモ我刑法ニ於テハ宣誓ノ上虛僞ノ陳述ヲ爲スコトヲ必要トシタルカ故ニ宣誓ヲ以テ其既ニ爲シタル虛僞ノ陳述ノ眞正ナルコトヲ保證スルカ如キハ未タ偽證罪ト爲スニ足ラサルナリ。偽證罪ハ之ヲ分テ(一) 證人カ虛僞ノ陳述ヲ爲ス罪及ヒ(二) 鑑定人及ヒ通事カ虛僞ノ鑑定又ハ通譯ヲ爲ス罪ノ二ト爲ス可キコト既ニ説明シタルカ如シ。

第一款 證人カ虛僞ノ陳述ヲ爲ス罪(狹義ノ偽證罪)

第六十九條 法律ニ依リ宣誓シタル證人虛僞ノ陳述ヲ爲シタルトキハ三月以上十年以下ノ懲役ニ處ス。  
第七十條 前條ノ罪ヲ犯シタル者證言シタル事件ノ裁判確定前又ハ懲戒處分前自白シタルトキハ其刑ヲ減輕又ハ免除スルコトヲ得。

證人カ虛僞ノ陳述ヲ爲スノ罪ハ通常之ヲ單ニ偽證罪ト爲ス。偽證罪ハ法

律ニ依リ當該官廳ニ於テ宣誓シタル證人カ當該官廳ニ對シ虛偽ノ陳述ヲ爲スニ依リ成立スルモノトス。左ニ第一行爲、第二主體、第三犯罪完成ノ時期、第四僞證罪ノ自白ノ四ニ區別シテ之ヲ説明ス可シ。

第一項 所爲

僞證罪ハ宣誓ヲ爲シタル證人カ虛偽ノ陳述ヲ爲スニ依リテ成立スルコト既ニ述ヘタルカ如シ。左レハ本罪ノ行爲ハ之ヲ(一)宣誓、(二)虛偽ノ陳述ノ二ニ分テ説明スルヲ便トス。

第一 宣誓

本罪ノ要件タル可キ宣誓ハ法律ニ定メタル場合ニ於テ當該官廳ニ對シテ爲シタル宣誓ヲ指稱ス。故ニ(一)若シ宣誓カ法律ニ依リ定メタル場合ニ非サルカ又ハ(二)法律ニ依リ定メタル場合ナルモ當該官廳ニ對シテ爲シタル場合ニ非サレハ僞證罪ニ必要ナル宣誓アリト謂フヲ得サルモノトス。以下此二點ニ付キ梗概ヲ説明ス可シ。

宣誓ハ法律ニ定メタル場合ニ限ルコト

宣誓ハ當該官廳ニ對シ之ヲ爲スコト

(一) 宣誓ハ法律ニ定メタル場合ニ限ルコト。前既ニ述ヘタルカ如ク本罪ノ要件タル可キ宣誓ハ法律ニ定メタル場合ニ限ル可キモノトス。法律上宣誓ヲ爲ス可カラサル場合ニ於テハ假令宣誓ヲ爲シタリトスルモ法律ノ所謂法律ニ依リ宣誓シタルモノト爲スニ足ラス。而シテ法律ニ定メタル場合トハ例ヘハ刑事訴訟法第二百二十二條、第三百二十七條、第四百一一條、第三項、民事訴訟法第三百七條、第三百二十九條、行政裁判法第三十八條第二項、刑事懲戒法第二十三條、辯護士法第三十四條、特許法第四十四條、海員懲戒法第四十七條等ノ如ク法律ニ於テ宣誓ヲ爲ス可キコトヲ定メタル場合ニ限ル可キモノトス。

(二) 宣誓ハ當該官廳ニ對シ之ヲ爲スコト。茲ニ當該官廳ニ對シテ宣誓ヲ爲ストハ當該官廳ノ職務ヲ行使ス可キ當該公務員ニ對シ宣誓ヲ爲スヲ謂フ。故ニ例ヘハ裁判所内ニ於テ裁判所ニ對シ宣誓ヲ爲シタル如キ場合ハ勿論出張先ノ判事ニ對シ宣誓ヲ爲スカ如キ總テ當該官廳ニ對シテ爲シタル宣

誓ナリト謂フヲ得可シ。尙ホ茲ニ注意ス可キハ宣誓ヲ爲サシメタル當該官廳ハ一般的ニ宣誓ヲ爲サシム可キ權限アルヲ以テ充分ナリトシ具體的ニ其事件ニ付キ權限ヲ有スルコトヲ必要トセサルナリ。故ニ事件カ管轄違ニ歸シ又起訴ノ無效其他ノ事由ニ依リ公訴不受理ノ言渡ヲ爲ス可キ場合ト雖モ當該官廳カ一般的ニ宣誓ヲ爲サシム可キ權限ヲ有シ其命令ニ基キ宣誓ヲ爲シタル以上ハ法文ニ所謂法律ニ依リ宣誓ヲ爲シタルモノト解セサルヲ得ス(註二二)。

斯ル場合ニ於ケル證人調書ト雖モ必スシモ無効ナルモノニ非ス且ツ又宣誓ノ上虛偽ノ陳述ヲ爲シタル行爲ヲ無罪トスル必要ヲ認ム可キモノナシ。

(註二二) 同題旨 フランク氏及ヒ獨逸帝國裁判所判例(Frank I. v. M. S. 154; E. 7. 275; R. 6. 151)。

我邦ニ於ケル判例及ヒ學說ヲ見ルニ

(一) 同題旨 大審院判例(舊)、小崎、泉二、牧野諸氏

判例ニ曰ク『證人トシテ訊問セラレタル被告事件ノ起訴ニシテ不法ノ點アリトスルモ苟モ證人トシテ裁判所ニ呼出サレ訊問ヲ受クルニ際シ人ヲ曲庇スル爲メ不實ノ陳述ヲ爲シタルトキハ偽證罪ヲ構成ス』(三三年大審院判決録五卷

九頁)ト。

小崎氏曰ク『明治三十三年五月一日宣告大審院判決ニ依レハ證人トシテ訊問セラレタル被告事件ノ起訴ニシテ不法ノ點アリトスルモ苟モ證人トシテ裁判所ニ呼出サレ訊問ヲ受クルニ際シ人ヲ曲庇スル爲メ不實ノ陳述ヲ爲シタルトキハ偽證罪ヲ構成スト解セルハ正當ナリ。明治三十四年一月二十四日宣告大審院判決ニ依レハ起訴ノ無効ニ歸スル以上ハ之ニ基キタル豫審處分モ無効ナリ從テ證人ニシテ豫審處分ノ訊問ニ對シ虛偽ノ陳述ヲ爲スモ偽證罪ヲ構成セスト解セルハ誤見ナリ。何トナレハ此場合ニ於テモ司法(裁判)ヲ誤ラシムルノ危險ナシト謂フヲ得サレハナリ』(日本刑法論各論四八頁)ト。泉二氏曰ク『又當該事件ノ訴追カ不法ノ點アリトスルモ本罪ノ成立ニ影響ナキモノト解セサル可カラズ』(日本刑法論五九九頁)ト。尙ホ牧野氏刑法通義三〇七、三〇八頁參照。

(二) 異説、判例(新)ニ曰ク『起訴ノ無効ニ歸スル以上ハ之ニ基キタル豫審處分モ亦無効ナリ從テ證人ニシテ豫審處分ノ審問ニ對シ虛偽ノ陳述ヲ爲シタルトスルモ偽證罪ヲ構成セス』(三四年大審院判決録一巻一八頁)ト。

## 第二 虛偽ノ陳述

虛偽ノ陳述ハ宣誓シタル證人カ事實ニ關スル虛偽ノ陳述ヲ爲スコトヲ必要トス。即チ(一)虛偽ノ陳述ハ法律ニ從ヒ宣誓シタル後ナラサル可カラズ又(二)虛偽ノ陳述ハ事實ニ關スル陳述ナラサル可カラズ。左ニ之カ梗概ヲ説明ス可シ。

虛偽ノ陳述

宣誓後ノ  
陳述タルノ  
コト

(一) 宣誓後ノ陳述タルコト。我刑法ハ第六十九條ノ法律ニ依リ宣誓シタル證人虛偽ノ陳述ヲ爲シタルトキハ云々ト規定シタルヲ以テ法文ノ解釋ヨリスレハ證人カ宣誓シタル後虛偽ノ陳述ヲ爲シタル場合ニ限リ偽證罪ヲ構成スルモノト爲シ宣誓シタル後何等ノ陳述ヲモ爲サ、リシ場合ニハ同罪ヲ構成セサルモノト解セサルヲ得ス。

法律ニ定メタル宣誓ニ二種アリ。其一ヲ前宣誓 (Voreid) ト謂ヒ其二ヲ後宣誓 (Nachaid) ト爲ス。前宣誓ハ我國ニ於ケル普通ノ宣誓ニシテ後宣誓ハ例外ナル宣誓ナリトス。例ヘハ刑事訴訟法第二百二十二條、民事訴訟法第三百七條第一項ノ如キ證人訊問前ニ於テ宣誓ヲ爲サシムルカ如キ場合ハ前宣誓ニシテ又例ヘハ民事訴訟法第三百七條第二項ノ如ク證人ノ訊問後ニ於テ宣誓ヲ爲サシムルカ如キ場合ハ後宣誓ナリ。而シテ我刑法ニ於テハ證人カ訊問前宣誓ヲ爲シタル後虛偽ノ陳述ヲ爲スニ非サレハ之ヲ偽證罪トシテ處罰スル能ハサルカ故ニ後宣誓ノ場合即チ民事訴訟法第三百七條

第二項ノ如ク訊問後ニ於テ證人カ良心ニ誓ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ默秘セス又何事ヲモ附加セザリシ旨ノ宣誓ヲ爲シタル場合ニ於テハ其先ニ爲シタル陳述カ虛偽ナリシ場合ニ於テモ本罪ヲ構成スルコトナシ。是レ既ニ述ヘタルカ如ク我刑法規定ノ偽證罪ハ歐洲各國ニ於ケル偽證罪ト大ニ異ル所ニシテ即チ歐洲各國ニ在リテハ宣誓ニ背ク所爲ヲ處罰スルモノニシテ本質ヲ違誓罪又ハ偽誓罪ト稱ス可キモノナルカ故ニ斯ノ如キ後宣誓ノ場合ヲモ之ヲ處罰シ得可キモ我邦ノ如ク宣誓ニ違フヤ否ヤニ重キヲ置クコトナクシテ其爲シタル陳述ノ虛偽ナルヤ否ヤヲ以テ罪ノ有無ヲ定ムル法典ノ下ニ於テハ之ヲ有罪ナリト爲スコトヲ得サルナリ。故ニ裁判事務實行ノ任ニ當レル者陳述後ニ宣誓ヲ爲サシム可キ場合ニ於テハ尙ホ前宣誓ノ方式ニ則リ宣誓ヲ爲サシメタル後先ニ陳述シタル事實ノ相違ナキヤ否ヤヲ再訊問シ以テ偽證罪ノ制裁ヲ全ウスルノ外ナキモノトス(註二三)。

(註二三) 同題言、泉二氏曰ク『法律カ偽誓 (Mensid) ナ罰スルモノトモハ宣誓ト陳述トノ前後ヲ問フ可キニ非

スト雖モ宣誓シタル證人カ虛偽ノ陳述ヲ爲スニ因リ成立スル偽證罪ニ付テハ宣誓カ陳述前ニ在ルコトヲ要スルモノト解スルヲ至當トス。反對說ハ己ムヲ得サルノ精神解釋論タルノミ(日本刑法論五九四、五九五頁)ト。

虛偽ノ陳述ハ事實ニ關スルコト

(二) 虛偽ノ陳述ハ事實ニ關スルコト。偽證罪ヲ構成スルニハ證人カ一定ノ事實ニ關スル虛偽ノ陳述ヲ爲スコトヲ要ス。元來證人ハ曾テ自己ノ實驗シタル事實ニ關シ自己ノ實驗其モノ、陳述ヲ爲スコキモノニシテ其實驗ニ基キ或判斷ヲ爲シ其判斷ノ結果即チ意見ノ陳述ヲ爲スコキモノニ非ス。故ニ證人ノ陳述ニシテ假令意見ノ點ニ涉ルモ其意見ハ證言タルノ效力ヲ有セス。又斯ノ如キハ證人タル宣誓ヲ爲サシメタル者ヲシテ供述セシム可キ事項ニ屬セサルカ故ニ其陳述カ虛偽ニ涉ルモ偽證罪ヲ構成スルコトナシ。尙ホ此點ハ本罪ト鑑定人ノ偽證罪トヲ區別ス可キ主要ナル點ナルカ故ニ次款鑑定人ノ偽證罪ノ說明ヲ參照ス可シ(八一八頁參照)。

證人ノ陳述カ果シテ虛偽ナルヤ否ヤヲ區別スルハ頗ル困難ナル問題ナリ。余ハ證人ノ事實ニ關スル陳述カ虛偽ナルヤ否ヤヲ判別セントスルニ

陳述カ客觀的事實ニ關スル場合ニ

ハ其陳述ノ客體カ(甲)客觀的事實ニ關係スルヤ又ハ(乙)客觀的事實關係ニ對スル證人ノ知識ニ關スルヤノ二ニ區別シテ之カ結論ヲ異ニセサル可カラサルモノト信スル者ナリ。

(甲) 陳述ノ客體カ客觀的事實ニ關スル場合。陳述ノ客體カ客觀的事實ニ關スル場合ニ在リテハ證人ノ陳述カ客觀的事實ニ一致セサル場合ニ限リ虛偽ノ陳述アルモノトス故ニ證人ノ陳述カ客觀的事實ト一致スル場合ニ在リテハ證人カ其信スル所ニ反スル陳述ヲ爲シタル場合ニ在リテモ之ヲ偽證ナリト謂フ能ハス。例ヘハ證人カ金時計一個ヲ紛失シタル事實アルヤ否ヤノ事實ヲ知ラサルニ拘ラス判事ノ問ニ對シ金時計一個ヲ紛失シタリト答ヘタル場合ニ於テ其實際ニ於テ眞ニ金時計一個ヲ紛失シタル事實アリタルトキハ其陳述ハ主觀的ニ虛偽ナレトモ客觀的虛偽ニ非サルヲ以テ偽證罪アリト謂フ能ハサルカ如シ。之ニ反シテ其陳述カ客觀的事實ニ反スルトキハ其一部カ虛偽ナルト全部カ虛偽ナルト

ハ之ヲ問フ所ニ非ス。故ニ銀時計ヲ紛失シタル事實ニ對シ金時計ヲ紛失シタリト陳述スルカ如キ衣類雜品十點ヲ紛失シタル事實ニ對シ衣類雜品二十點ヲ紛失シタリト陳述スルカ如キハ共ニ偽證ナリトス(註二四)。(註二四) 同説、フランク氏 (Frank, II. 1. a. zu § 154.)。異説 オルスハウゼン氏 (Olshausen, Lehrb. II S. 142.)。

我邦ノ學者ノ此點ニ關スル説明ハ要テ得ルニ苦ムモ大體ニ派ニ岐ル、モノ、如シ。

(一) 同説ナルカ如シ。勝木氏曰ク「若シ夫レ陳述、鑑定、通譯シタルコトカ眞實ニ反セサラシカ假令犯人ハ不實ト信シテ供述、鑑定、通譯スルモ無罪ナリ」(刑法新義上卷六〇〇頁)ト。

(二) 異説ナルカ如シ。江木氏曰ク「此犯罪ノ所爲タル陳述ハ誠實ナラサルコト即チ虚言ナルコトヲ要スレトモ其陳述スル所ノ事實ハ必スシモ虚偽ナルコトヲ要セス。事實ハ現ニ眞正ナルモ其陳述ハ尙ホ虚偽ナルコトヲ得可シ。偽證ノ罪ハ詐欺ノ陳述ヲ爲スノ罪ニシテ虚妄不正ノ事實ヲ陳述スルノ罪ニ非ス。例ヘハ判官證人ニ向ヒ原告、被告ハ某月某日云々ノ契約ヲ成セシヤ否ヤヲ訊問スルニ當リ證人ハ全ク其事實ノ有無ヲ知ラサルニ尙ホ其契約ヲ爲シタル旨ヲ確答シタルトキハ設例實際ニ於テハ此契約アリ偶然陳述ト其事實相符合スルモ此證人ハ偽證ノ罪ヲ犯シタルモノトセサルヲ得ス。何トナレハ其事實ハ虚妄ナラサルモ證據トシテハ詐欺タルヲ免レサルナリ」(現行刑法原論一五五、一五六頁)ト。

陳述ノ客

(乙)

陳述ノ客體カ客觀的事實關係ニ對スル證人ノ知識ニ關スル場合。此

體カ客觀的事實關係ニ對スル證人ノ知識ニ關スル場合

場合ニ於テハ(甲)ノ場合ニ於ケルト全然反對ナル斷定ヲ爲サ、ルヲ得ス即チ證人カ其知ル所ニ反シ陳述ヲ爲シタルトキハ假令其陳述カ客觀的事實即チ現ニ在リタル事實ニ符合スルモ偽證罪アリト爲サ、ルヲ得ス。證人ノ知識ニ關スル偽證ハ虚構ニ基キ行ハル、コトアリ又ハ隱秘即チ不知ノ陳述ニ依リ行ハル、コトアリ。例ヘハ證人ハ被告人ハ甲ヨリ金時計一個ヲ盜ミタルヲ見タルコトナキニ拘ラス之ヲ見タリト陳述スルカ如キハ虚構ニ基キ證人ノ知識ニ反スル陳述ヲ爲スモノナレハ假令被告人カ甲ヨリ金時計一個ヲ盜ミタル事實アリタリトスルモ證人ニ偽證罪アリト爲サ、ルヲ得ス。何トナレハ證人カ被告人ノ金時計ヲ盜ミタル行爲ヲ見タルコトナキニ之ヲ見タリト陳述スルカ如キハ法文ノ所謂虚偽ノ陳述ヲ爲シタルモノト認メサルヲ得サレハナリ(註二五)。之ト同一理ニ依リ證人カ一定ノ事實ヲ見聞シタルコトアリテ其事實ニ付キ之ヲ知り居ルニ拘ラス之ヲ知ラスト答フルカ如キハ證人ノ知識ニ反シ隱



秘即チ不知ノ陳述ニ依リ偽證シタルモノト謂ハサルヲ得ス。

(註二五)

同題旨

判例ニ曰ク

「事實ヲ見聞セサル證人カ現ニ之ヲ見聞シタリト稱シ虛偽ノ陳述ヲ爲スニ於テハ偽證罪ヲ完成スルモノトス。而シテ其現ニ見聞シタリト供述シタル事實カ實際ノ事實ニ符合スルト否トハ犯罪ノ成立ニ何等ノ影響ヲ及ホサス」(四二年大審院判決錄七三五頁)ト。同旨旨(三五年八卷二七頁)。

尚ホ茲ニ注意ヲ要ス可キハ苟モ證人ニシテ宣誓ノ上虛偽ノ陳述ヲ爲スト

キハ直ニ本罪ヲ構成スルモノニシテ其陳述カ裁判ニ影響ヲ及ホス可キ重要ナル事實關係ニ對スルモノナルコトヲ必要トセス。又其陳述自體カ裁判ニ影響ヲ及ホス可キモノナルコトヲ必要トセサルモノトス。何トナレハ法律ハ宣誓シタル證人虛偽ノ陳述ヲ爲シタルトキハ本罪ヲ構成スルモノトシ何等ノ制限ヲ設クルコトナケレハナリ。故ニ苟モ證人カ宣誓ノ上虛偽ノ陳述ヲ爲シタルトキハ其陳述カ事件ニ影響ヲ及ホスモノナルト否トヲ問ハス本罪ヲ構成ス可キモノナリト解スルヲ正當トス(註二六)。

(註二六)

(一) 同題旨

大審院判例、小崎氏。

判例ニ曰ク「證人カ訊問事項ニ付キ事實ニ反スルコトヲ知リナカラ虚偽ノ供述ヲ爲シタル以上ハ縱令其證言カ裁判

ノ結果ニ何等ノ影響ヲ有セサル場合ト雖モ偽證罪ノ責罰ヲ免ル、コトヲ得ス」(四〇年大審院判決錄一九頁)ト。同旨旨(三三年八卷二頁、三二年六卷四二頁、二八年四八四頁)。尙ホ小崎氏日本刑法論各論四四九頁參照。

(二) 異説

江木、牧野諸氏。

江木氏曰ク「偽證罪ハ立證ノ基本ヲ紊亂スルモノナリ。故ニ其詐欺ノ陳述ハ訴訟ノ争點若クハ訊問ノ要點ニ關スルコトヲ要ス。語ヲ換ヘテ之ヲ謂ハ、證據ト名クル事實ニ屬スルコトヲ要スルモノニシテ證人若クハ鑑定人等ノ陳述ニ係ルモノハ盡ク此犯罪ノ物體タル可キ事實ニ非サルナリ。學者往々此意ヲ誤解シ害ヲ生シ得可キコトタルヲ以テ偽證罪ノ一要件トスレトモ苟モ證據タル範圍ニ屬スル事實タル以上ハ必スシモ害ヲ生シ得可キモノタルヲ要セサルナリ」(現行刑法原論一五四、一五五頁)ト。牧野氏曰ク「不實ノ陳述ハ裁判ニ影響ヲ及ホス可キモノタルコトヲ要ス。裁判ニ何等ノ影響ヲ與フ可カラサル性質ノモノタルトキハ實害ノ危險ナキモノナルカ故ニ罪ト爲ラス。但シ陳述カ到底裁判所ノ心證ヲ動カス能ハサルモノナルトキト雖モ其陳述ノ内容カ裁判ヲ誤ラシム可キ性質ノ事實ニ關スルトキハ偽證罪ヲ成立セシムルニ足ルモノト解ス」(刑法通義三〇六頁)ト。

### 第二項 主體

主體  
證人タル  
資格ノ有  
無ヲ問ハ  
ス本罪ノ  
主體タル  
コトヲ得

偽證罪ハ苟モ犯罪ニ付キ責任能力アル以上ハ何人ト雖モ之ヲ犯スコトヲ得。第一刑事訴訟法第二百三十三條ニ依リ證人ノ資格ナキ者(第一民事原告人、及ヒ被告人ノ親族但シ姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ、第三民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ此等ノ者ノ後見ヲ受クル者、第四民事原告人及ヒ被告人ノ同居人)第二同法第二百二十四條ニ依リ證人ノ資格ナキ者(第一十六歲

第二章 國家ノ裁判ニ對スル罪 第二節 偽證罪

ニ知覺精神不充分ナル者第三重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付キ公判ニ止セ  
 ラレタル者第五重罪事件又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付キ公判ニ止セ  
 セラレタル者第六重罪事件ニ付キ免訴ノ旨波チ受ケタル者第三民事訴訟法第  
 三百十條ニ依リ宣誓ヲ爲サシメシテ參考ノ爲メ之ヲ訊問シ得可キ者(第一  
 ノ時發達十六歲ニ達セサル者第三刑事第二宣誓ノ何物タルヤチ了解スルニ必要ナル精神  
 者第四同法第九十七條及第七百九十八條第三號並ニ第四號ノ規定ニ依  
 リ證言ヲ拒絕スル權利アリテ之ヲ行使セサル者第五訴訟ノ成績ニ直接利害ノ  
 關係ヲ有)ト雖モ既ニ十四歲ニ達シ且ツ心神喪失者ニ非サルトキハ此罪ノ主  
 體タルコトヲ得可キモノトス。尤モ證人タル資格ナキ者ニ對シテハ裁判所  
 ニ於テ通常其關係ヲ取調ヘ之ヲ證人トシテ宣誓ヲ爲サシメ之ヲ訊問スルコ  
 トナカル可キカ故ニ此等ノ者カ僞證罪ヲ犯シ得可キヤ否ヤノ問題ヲ生スル  
 コト少ナカル可シ。然レトモ證人タル資格ナキ者ニシテ其資格ヲ詐リタル  
 カ又ハ裁判所ニ於ケル此點ノ取調粗ニ失シタルカ爲メ斯ノ如キ者モ往々ニ  
 シテ適式ノ宣誓ヲ爲シタル上虚偽ノ陳述ヲ爲ス場合ニ於テハ行爲者ニ僞證  
 罪ノ責任アルモノトス。法律カ僞證罪ノ條件トシテ要求スル所ハ證人トシ

テノ法律ニ依ル適式ノ宣誓ト虚偽ノ陳述トノ二者ニ在リ。之ヲ法文ニ求ム  
 ルモ此二者以外ノ他ノ條件例ヘハ證人タル資格アルコトヲ必要トシタルモ  
 ノト認ム可キモノナシ。又實際ノ必要ヨリスルモ證人タル資格ナキ者カ證  
 人トシテ宣誓シタル上虚偽ノ陳述ヲ爲スカ如キハ裁判所ノ威信ヲ傷ケ裁判  
 所ノ判斷ヲ誤ラシムルモノナシト爲サ、レハ之ヲ處罰スルノ必要アルコト  
 證人ノ資格アル者カ宣誓ノ上虚偽ノ陳述ヲ爲シタル場合ト擇ム所ナシ。唯  
 タ證人資格ナキ者ニシテ十四歲未滿ナルカ又ハ心神喪失者ナルカ如ク行爲  
 者ニ刑事上ノ責任能力アリト謂フ能ハサル場合ニ限り本罪ヲ構成スルコト  
 ナキハ勿論ナリ(註二七)。然ルニ學者或ハ證人タル資格ナキ者ハ僞證罪ヲ犯ス  
 コトヲ得スト論スルカ如キハ法文ト實際ノ必要トヲ眼中ニ置カサル論ト謂  
 ハサルヲ得ス。又學者或ハ證人タル資格ナキ者ヲ二分シ刑事訴訟法第二百  
 十三條、第二百二十四條、第四、五、六號ニ因ル無資格ト同第二百二十四條第一、二、三、號  
 ニ因ル無資格トヲ區別シ前者ハ僞證罪ノ主體タルコトヲ得ルモ後者ハ僞證

罪ノ主體タルコト能ハサルカ如ク論スルハ法文上ハ勿論法理上ニモ根據ヲ有セサル一種ノ議論トシテ聞クノ外ナシ。

(註二七) 本邦ニ於ケル判例及ヒ學說ハ多岐ニ出ツ。最近ノ判例ハ總テ本文ト同趣旨ニ出ツ。

(一) 同趣旨 大審院判例(新)。判例ニ曰ク『荷モ證人トシテ適法ニ宣誓シタル後虛偽ノ陳述ヲ爲スニ於テハ資格審査ノ瑕疵若クハ無資格者タル隱密ニ依リ證人タル資格ナキ者ヲシテ宣誓ヲ爲サシメタル場合ト雖モ偽證罪ノ成立ヲ妨クス(四二年大審院判決一五七三頁)ト。同趣旨(四二年一四〇九頁、同年八〇八頁、三二年六卷九一頁、三一年九卷七九頁、二九年八卷二二頁)。

(二) 異說 大審院判例(舊)、法曹會決議、勝本氏。

判例ニ曰ク『證人タル資格ナキ者ニシテ宣誓ノ上虛偽ノ陳述ヲ爲スモ偽證罪ヲ構成セス(三一年大審院判決七卷二五頁)ト。法曹會決議ニ曰ク『刑事訴訟法上證人タル資格ナキ者故意若クハ錯誤ニ因リ宣誓ノ上偽證シタル場合ニ於テハ偽證罪ヲ以テ處分スルコトヲ得ス』(法曹記事七八號一頁)ト。勝本氏曰ク『幼者、公權剝奪者又ハ停止者ハ法律力眞實ヲ陳述スルコト能ハサルモノ隨テ信用ヲ置クコト能ハサル者ト推測シ證人、鑑定人、通事タルコトヲ禁シタルモノナルカ故ニ假令宣誓スルモ之ヲ以テ宣誓ヲ有セザリシ能力ヲ獲得シ責任ヲ負フ可キモノト爲ルノ理ナシ。隨テ無罪ナリト謂ハサルヲ得ス』(刑法新義上卷五九四、五九五頁)ト。

(三) 一種ノ折衷說 此說ハ證人タル資格ナキ者ヲ第一刑事訴訟法第二百三條第四百、五、六號ニ因リ無資格者即チ當事者若クハ事件トノ關係又ハ犯罪嫌疑トノ關係ヨリ證人タル資格ナキ者ト、第二同法第二百二十四條第一、二、三號ニ因リ無資格者即チ十六歳未満ナルカ知覺精神不充ナルカ若クハ措置者ナルカ爲メ證人

タル資格ナキ者ノ二者ニ區別シ第一ニ屬スル者ハ偽證罪ノ主體タルコトヲ得ルモ第二ニ屬スル者ハ偽證罪ノ主體タルコト能ハサルモノト爲ス。小崎、牧野、泉二ノ諸氏。

小崎氏曰ク『荷モ刑事裁判ニ關シ宣誓ヲ命スル權限ヲ有スル官吏ノ命令ニ基キ刑事裁判ニ關シ證人タル資格アル者トシテ宣誓ノ上不實ノ陳述ヲ爲シタルトキハ假令各個ノ場合ニ於テ實際證人タル資格ヲ有セサル場合ト雖モ本罪ヲ構成スルモノトス。蓋シ法律カ本罪ヲ認メテ保護スル利益(法益)ハ宣誓ト謂フ形式ニ依ル證言ノ眞實ヲ請求スルニ在リ。即チ法律ハ此宣誓ト謂フ形式ニ重キヲ措クモノニシテ各個ノ場合ニ於テ證人トシテ宣誓ヲ爲ス可キ資格ヲ有スルモノナリヤ否ヤハ權限アル官吏ノ判斷ニ任ス可キノミ。但シ十六歳未満ノ幼者、知覺精神ノ不充ナル者又ハ措置者ノ如キ法律カ宣誓ノ何モノタルカヲ理解スル智能ナク又ハ不完全ナル者トシテ證人タル資格ヲ除斥シタル者ナレハ此等ノ者ハ假令宣誓ノ上不實ノ陳述ヲ爲スモ本罪ヲ構成セサルモノトス』(日本刑法論各論四四七、四四八頁)ト。牧野氏曰ク『證人無能力ナル者カ其無能力ナルコトヲ隱蔽シテ證人タルコトノ宣誓ヲ爲シタル場合ニ於テハ之ニ對シ偽證罪ノ成立アリヤ否ヤノ問題アリ。判例ハ其成立アリト爲ス(明治三十二年十月二十四日判決)。余輩ハ場合ナ別チテ論セサル可カラスト信ス。蓋シ證人無能力カ當事者トノ一定ノ關係ニ由來スルトキハ判例ヲ以テ妥當ト信スルモ宣誓ノ何タルカヲ解スル能ハサル精神不完全ニ由來スルトキハ縱令誤テ宣誓ヲ爲スモ偽證罪ノ成立ナシト解ス』(刑法通義三〇四頁)ト。泉二氏日本刑法論五九二、五九三頁參照。

### 第三項 犯罪ノ完成時期

偽證罪ハ訊問及ヒ答辯ノ終結ヲ以テ完成ス可キモノトス。法律カ偽證罪

ヲ罰スル所以ハ之ニ依リ證據方法カ事實ニ反スルコト、爲リ其結果トシテ裁判ノ適當正確ヲ缺クニ至ルノ虞アルヲ以テナリ。而シテ裁判上證言ヲ證據ト爲ス可キ場合ニ於テハ其爲シタル證言ヲ一括シ之ニ對シ判斷ヲ下ス可キモノナレハ其訊問及ヒ答辯カ終結セサル場合ニ於テハ未タ證據方法トシテ使用シ得可キ證言アリト謂フコトヲ得ス。又實質上ヨリスルモ證人ノ供述ハ相牽連スルモノニシテ其個々ナル部分ヲ分離獨立セシメテ之ヲ觀察ス可キモノニ非ス。又證人ニ於テ訊問ノ趣旨ヲ誤解スルコトアル可ク或ハ誤テ眞意ニ非サルコトヲ陳述スルコトアル可シ。故ニ法律ハ證人ヲシテ訊問中ニ在リテハ何時ニテモ其陳述ヲ變更若クハ取消スコトヲ得セシムルモノナリ(刑訴一三一條民訴一)。左レハ證人ニ對スル訊問及ヒ答辯ノ未タ終結セサル間ハ假令陳述中往々虛偽ニ涉ルモノアルモ未タ僞證罪ヲ完成セサルモノト解釋スルヲ以テ相當トス可キナリ。然レトモ一旦訊問及ヒ答辯カ終結シタルトキハ之ト同時ニ僞證罪ヲ完成ス可キモノナルカ故ニ其以後ニ至リ

供述ノ取消ヲ申立ツルモ一旦完成シタル犯罪ヲ消滅スル能ハサルモノトス(註二八)。

(註二八) 此說ハ獨逸ニ於ケル通說ニシテ獨逸帝國裁判例及ヒフランク兵等ノ主張スル所ナリ (Z. 25. 26; Frank, VI. 2. zu § 154.)

本邦ノ判例ハ學說ハ左ノ如ク較ル。

(一) 同趣旨 大審院判例、勝本、岡田、泉二、牧野諸氏。

判例ニ曰ク『僞證罪ハ其證人ニ對スル訊問ヲ全ク終リタルトキ成立ス』(二七年大審院判決錄三四一頁)ト。又曰ク『證人カ數回訊問ヲ受ケタル場合ト雖モ一回毎ニ調書ヲ讀聞シ受ケ其供述ヲ變更増減セサル意思ヲ表示シタルトキハ證人ノ供述ハ一回毎ニ確定シ其確定ト共ニ僞證罪ハ成立ス。從テ證人カ前回ニ爲シタル供述ヲ取消スモ之カ爲メニ既ニ成立シタル犯罪ヲ消滅セシムルモノニ非ス』(三五年大審院判決錄九卷七五頁)ト。勝本氏曰ク『陳述カ時ヲ以テ繼續スル間即チ通俗ノ觀念ニ於テ一回ノ陳述ト看做ス可キ間ニ於テ爲サレタル取消ハ前ノ陳述ト一體ヲ成シ罪ヲ構成セサルモノト謂ハント欲ス。例ヘハ豫審ニ於テ一ノ陳述ニ付キ署名捺印ヲ了ル迄公判ニ於テハ一回ノ陳述ヲ了ル迄ハ一回ノ陳述ニシテ其間ニ爲サレタル取消ハ罪ヲ構成セサルモノトス』(刑法析義上卷六〇一乃至六〇四頁)ト。岡田氏曰ク『證人ハ之ヲ各別ニ訊問シ(刑訴、一二七條民訴、三一一條)且ツ其供述ノ變更ヲ許可ス(刑訴、一三二條民訴、三一七條)故ニ一旦僞言ヲ吐クモ此カ變更ヲ爲スコトヲ得ル時期ニ於テ變更シタルトキハ犯罪不成立ナリ。前ニモ述フル如ク證人ノ訊問ナルモノハ其調書ヲ讀聞カセテ署名捺印スルニ至ルマテ一個ノ訴訟手續トシ訊問ノ一

言一旬毎ニ獨立シタル證據ヲ爲スモノニ非ス。若シ訊問ノ途中ニ於テ故意ニ或偽言ヲ述ブレハ既ニ偽證ノ着手ノ程度ニ在ルモノト謂ハサル可カラス。然レトモ訊問ノ終結前ニ其虛偽ノ點ヲ變更スレハ自ラ中止シタルモノニシテ犯罪ハ不成立ナリ。而シテ既ニ訊問ヲ終結スレハ犯罪カ既遂ト爲リタルモノナリ(刑法講義一一四頁)ト。尙ホ泉二氏、日本刑法論五九五、五九六頁、牧野氏、刑法通義三〇六頁參照。

(二) 異説 小崎氏曰ク『大審院判決ニ依レハ偽證罪ハ其證人ニ對スル訊問ノ全ク終リタルトキニ於テ初メテ成立ス、而シテ訊問ノ全部ヲ終リタルトキトハ豫審ニ在テハ豫審判事カ訊問ヲ止メ圖書ヲ讀聞ケタル上證人ニ於テ其供述ヲ變更増減セサル意思ヲ表示シタルトキヲ謂フ、而シテ證人カ數回訊問ヲ受ケタル場合ト雖モ一回毎ニ確定シ其確定ト共ニ偽證罪成立ス、從テ證人カ前回ニ爲シタル供述ヲ取消スモ之カ爲メ既ニ成立セル犯罪ヲ消滅セシムルモノニ非ス(以上ハ前掲三五年大審院判例九卷七五頁ノ判決ヲ指スモノ、如シト下解セルハ誤見ナリ。何トナレハ同一宣誓ノ下ニ訊問ヲ重テタル場合ハ訊問ノ繼續ニシテ前後ノ訊問ニ對スル陳述ハ繼續綜合シタル一個ノ證言ナリト謂フ可キナリ)』(日本刑法論各論四四九、四五〇頁)ト。

前既ニ述ヘタルカ如ク我刑法ニ於テハ虛偽ノ陳述ヲ爲ス罪ヲ罰スルモ宣誓ニ背ク罪ヲ認メサルヲ以テ民事訴訟法第三百七條第二項ノ如キ證人カ既ニ爲シタル虛偽ノ陳述ヲ以テ眞實ナリト宣誓スルモ罪ト爲ル可キモノニ非ス。故ニ學者或ハ訊問後宣誓ヲ爲ス場合ニ於テハ宣誓時期ヲ以テ偽證罪成

立スト説明スルカ如キハ外國法ノ解釋トシテハ兎モ角我刑法ノ上ニ於テハ相當ナリト謂フ能ハス。

偽證罪ノ  
自白

#### 第四項 偽證罪ノ自白

偽證罪ヲ犯シタル者其證言シタル事件ノ裁判確定前又ハ懲戒處分前偽證シタル事實ヲ當該官署ニ自白シタルトキハ裁判所ハ或ハ普通ノ如ク刑ヲ量定シ或ハ其刑ヲ減輕又ハ免除スルコトヲ得ルモノトス。其理由ハ誣告罪ニ付キ説明シタル所ト異ル所ナシ(七九五頁參照)。

#### 第二欸 鑑定人又ハ通事カ虛偽ノ鑑定又ハ通譯ヲ爲ス罪

鑑定人又ハ通事カ  
虛偽ノ鑑定  
又ハ通譯ヲ爲ス  
罪

第七十一條 法律ニ依リ宣誓シタル鑑定人又ハ通事虛偽ノ鑑定又ハ通譯ヲ爲シタルトキハ前二條ノ例ニ同シ。(第六十九條、三月以上十年以下ノ懲役。第七十條、裁判確定前自白シタルトキハ其刑ヲ減輕又ハ免除スルコトヲ得)。

虛偽ノ鑑定及ヒ通譯ヲ爲ス罪ハ偽證罪ト相同シキ點甚タ多シ。偽證罪ニ

付キ前既ニ述ヘタル所ニシテ鑑定人及ヒ通事ノ偽證罪ニ採用シ得キモノハ之ヲ再說セス。故ニ本款ニ於テハ單ニ其異ナル點ノミヲ説明スルニ止ム可シ。

### 第一 虚偽ノ鑑定ヲ爲ス罪

此罪ハ鑑定人トシテ適式ノ宣誓ヲ爲シタル者カ虚偽ノ鑑定ヲ爲スニ依リテ成立ス。而シテ偽證罪ト虚偽ノ鑑定ヲ爲ス罪ト異ナル點ハ證言ト鑑定トノ性質上ノ差異ニ基クモノトス。

虚偽ノ鑑定ヲ爲ス罪  
鑑定ノ意

(一) 鑑定ノ意義。鑑定トハ學術、職業又ハ經驗等ニ依リ特別ナル智識ヲ有スル者カ現ニ裁判所又ハ當該官廳ヨリ實驗ヲ命セラレタル事物ニ付キ實驗ヲ爲シ因リテ得タル心證確信ヲ供述スルヲ謂フ。鑑定人ノ心證確信ハ多クハ單ニ事實ノ實驗其モノニ非スシテ學術、職業又ハ經驗等ニ依リ特別ナル智識ヲ有スル者カ其智識ヲ以テ實驗シタル事物ニ對シ判斷ヲ爲シ因テ得タル結果即チ意見ナリトス。從テ鑑定人ノ供述ハ多クハ意見ナリト謂

鑑定人トノ區別

フヲ得可シ。是レ單ニ事實ノ實驗其モノヲ陳述スル證人ト異ナル點ニシテ證言ト鑑定トヲ區別ス可キ大體ノ標準ハ意見ノ陳述ナルヤ將タ實驗シタル事實ノ陳述ナルヤニ在リト謂フコトヲ得可シ。然レトモ鑑定ノ場合ニ於テモ單ニ鑑定人ノ特別ナル智識ニ基キ命セラレタル實驗ノ結果トシテ得タル事實ノ陳述ノミヲ爲ス場合ナキニ非ス。例ヘハ或略啖中ニ結核菌ノ存在スルヤ否ヤノ鑑定ヲ託セラレタル顯微鏡ニ精通セル醫師カ顯微鏡ニテ検査シタル結果即チ結核菌ノ有無ノ事實ニ付キ陳述ヲ爲スカ如キハ事實ノ陳述ニシテ意見ノ陳述ニ非ス。

(二) 鑑定人ト證人トノ區別。鑑定人モ亦事實ヲ陳述スルコトアル可シトノ一事ヲ以テ證人ト鑑定人トノ區別ナシト思料スルカ如キハ大ナル誤謬ナリ。上述シタル所ニ基キ兩者ノ區別ヲ摘示スレハ

(甲) 證人ハ過去ニ於テ實驗シタル事實ヲ陳述スルモノナレトモ鑑定人ハ現ニ當該官廳ヨリ實驗ヲ命セラレタル事物ニ付キ現在ノ實驗ニ依リ得

タル心證(確信)ヲ陳述スルモノナリ。

(乙) 證人カ爲シタル過去ニ於ケル事物ノ實驗ハ學術、職業又ハ經驗等特別ノ智識ニ基キ得タルモノタルコトヲ要セサレトモ鑑定人ノ事物ノ實驗ハ學術、職業又ハ經驗等特別ノ智識ニ依リ爲サル、モノナリ。

(丙) 證人ハ過去ニ於テ實驗シタル事實ヲ陳述スルモノナレトモ鑑定人ハ命セラレタル事物ニ付キ實驗ニ依リ現ニ得タル心證(確信)ヲ陳述スルモノニシテ其心證ハ或ハ事物ニ關スル過去、現在又ハ未來ニ對スル意見ナルコトヲ常トスルモ亦現在ニ對スル事實ナルコトアリ。

茲ニ注意ス可キハ偽證罪ヲ構成スルニハ證人トシテノ適式ノ宣誓アルコトヲ條件トス可ク虛偽ノ鑑定ヲ爲ス罪ヲ構成スルニハ鑑定人トシテ適式ノ宣誓アルコトヲ條件トス。故ニ證人ト鑑定人トノ區別ヲ明カニスル實益ノ大ナルヲ知ル可キナリ。

(三) 鑑定の證人。鑑定人ト證人ト兩者ヲ兼ヌルカ如キ證人アリ。過去ノ事

入  
鑑定の證

實又ハ事情ニ付キ嘗テ之ニ關シ學術、職業又ハ經驗等特別ナル知識ヲ以テ實驗シタル者ヲシテ陳述セシムルコトヲ必要トスル場合アリ。宣誓ノ上斯ノ如キ事項ニ付キ特別ノ知識ヲ要セシ實驗ヲ陳述スル者ヲ鑑定の證人ト謂フ。例ヘハ嘗テ別件ニ於テ鑑定人タリシ者ヲ呼出シ其當時實驗シタル事項ニ付キ供述ヲ爲サシムルカ如キ又ハ嘗テ患者ノ診療ヲ爲シタル醫師ヲ呼出シ其當時ノ患者ノ容體及ヒ疾病ノ經過及ヒ原因等ニ付キ供述セシムル如キハ鑑定の證人トシテ陳述ヲ爲サシム可キ場合ナリトス。斯ノ如ク鑑定の證人ハ鑑定人ト證人トノ中間ニ位スルモノナレトモ其性質鑑定人ニ屬スルモノニ非スシテ寧ロ證人ニ屬スルモノトス。何トナレハ鑑定の證人ノ供述ハ現ニ當該官廳ヨリ實驗ヲ命セラレタル事物ニ付キ現在ノ實驗ニ依リ得タル心證ヲ陳述スルニ非スシテ過去ニ於テ實驗シタル事實(嘗テ得タル心證トキハ一種ノ事實ナリ)ヲ陳述スルモノナレハナリ。民事訴訟法第三百三十三條ニ特別ノ知識ヲ要セシ過去ノ事實又ハ事情ニシテ其

實驗アル者ノ訊問ニ依リ確定ス可キトキハ證人ニ付テノ規定ヲ適用ス可キ旨規定アルヲ以テ民事訴訟法ニ於テハ鑑定の證人カ證人タルコト疑ナキ所ナリ。刑事訴訟法ニ於テハ此點ニ關スル規定ヲ缺如スト雖モ鑑定の證人ノ性質ト民事訴訟法ノ規定トヲ參酌シ鑑定の證人ハ之ヲ證人ナリト解釋スルヲ相當トス。此點ヲ明カニスル實益ハ鑑定の證人ヲ以テ證人ナリト解釋ス可キモノトセハ之ヲ訊問スルニ當リ證人トシテノ宣誓ヲ爲サシム可ク之ヲ鑑定人トシテ宣誓セシム可カラス。若シ之ニ反シテ鑑定の證人ヲ以テ鑑定人ナリト解釋ス可キモノトセハ鑑定人トシテ宣誓セシム可ク證人トシテ宣誓セシム可カラス。證人トシテ宣誓ヲ爲サシム可キヲ以テ相當トス可キニ拘ラス鑑定人トシテ宣誓セシメタルトキハ其陳述虛偽ニ涉ルコトアルモ之ヲ偽證罪トシテ處罰スル能ハサルコト前既ニ之ヲ述ヘタルカ如シ。

### 第二 虚偽ノ通譯ヲ爲ス罪

虚偽ノ通譯ヲ爲ス罪

通事ハ裁判所又ハ當該官廳ニ對シ邦語ニ通セサル者又ハ瘖啞者ノ意思表示ヲ正確ニ通譯スルニ在リ。此罪ハ通事トシテ適式ノ宣誓ヲ爲シタル者カ邦語ニ通セサル者又ハ瘖啞者ノ爲シタル意思表示ヲ通譯スルニ當リ故意ヲ以テ偽譯スルニ依リ成立スルモノトス。而シテ通事ハ單ニ意思ノ媒介ヲ爲スニ止マルカ如キモ裁判上使用スル能ハサル者ノ意思表示ヲシテ通事ノ特別ノ知識ニ依リ之ヲ使用シ得キ證據方法タラシムル點ニ於テ鑑定ト酷似スル所アリ。是レ法律カ通事ヲ以テ鑑定人ト同様視シ同一ノ法條ニ之ヲ規定シタル所以ナラン。

### 第三 虚偽ノ鑑定又ハ通譯ヲ爲ス罪ノ自白

虚偽ノ鑑定又ハ通事ヲ爲ス罪ヲ犯シタル者其鑑定又ハ通譯ヲ爲シタル事件ノ裁判確定前又ハ懲戒處分前其鑑定又ハ通譯ノ虚偽タル事實ヲ當該官廳ニ自白シタルトキハ裁判所ハ其刑期範圍内ニ於テ普通ノ如ク刑ヲ量定シ或ハ其刑ヲ減輕シ或ハ其刑ヲ免除スルコトヲ得可キコト偽證罪ノ場合ニ異ナ

虚偽ノ鑑定又ハ通譯ヲ爲ス罪ノ自白



ラス。

### 第三節 犯人又ハ拘禁中逃走シタル者ヲ 藏匿シ又ハ隠避セシムル罪

第三百三條 罰金以上ノ刑ニ該ル罪ヲ犯シタル者又ハ拘禁中逃走シタル者ヲ藏匿シ又ハ隠避セシメタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス。  
第三百五條 本章ノ罪ハ犯人又ハ逃走者ノ親族ニシテ犯人又ハ逃走者ノ利益ノ爲メニ犯シタルトキハ之ヲ罰セス。

犯人又ハ  
拘禁中逃  
走シタル  
者ヲ藏匿  
シ又ハ隠  
避セシム  
ル罪

本罪ハ罰金以上ノ刑ニ該ル罪ヲ犯シタル者又ハ拘禁中逃走シタル者ヲ藏匿シ又ハ隠避セシムル行爲アルニ依リテ成立スルモノトス。我刑法カ本罪ノ規定ニ依リ禁止スル所ハ罰金以上ノ刑ニ該ル罪ヲ犯シタル者ノ呼出若クハ逮捕ヲ免レシメ又ハ逃走者ノ拘禁ヲ妨害スル行爲ナリ。故ニ我刑法ニ規定スル本罪ハ歐米各國ニ於ケルカ如ク犯罪其モノヲ免レシムル爲メ犯罪者

ヲ幫助スルモノト同一視スル能ハス。

### 第一項 客體

本罪ハ罰金以上ノ刑ニ該ル罪ヲ犯シタル者又ハ拘禁中逃走シタル者ヲ藏匿シ又ハ隠避セシメタル者ヲ罰スルモノナルカ故ニ本罪ノ客體タル可キ者ハ第一罰金以上ノ刑ニ該ル罪ヲ犯シタル者及ヒ第二拘禁中逃走シタル者ノ二者ナリトス。左ニ之カ梗概ヲ説明セン。

客體

#### 第一 罰金以上ノ刑ニ該ル罪ヲ犯シタル者

罰金以上ノ刑ニ該ル罪ヲ犯シタル者トハ其辭句極メテ簡單ニシテ一見何等ノ説明ヲ要セサルカ如キモ更ニ一考ヲ費ストキハ種々ノ疑問ヲ包含ス。左ニ本罪ノ客體ト爲ルヤ否ヤニ付キ疑問ト爲ル可キ重要ナル數點ニ付キ梗概ヲ説明ス可シ。

(一) 特別法ヲ犯シタル特別ノ身分ヲ有スル者。茲ニ罰金以上ノ刑ニ該ル罪

特別法ヲ  
犯シタル  
特別ノ身  
分ヲ有ス  
ル者

第二章 國家ノ裁判ニ對スル罪 第三節 犯人又ハ拘禁中逃走シタル者ヲ  
藏匿シ又隠避セシムル罪

ヲ犯シタル者トハ刑法ノ規定ニ違反シタル罰金刑以上ニ該ル罪ヲ犯シタル者若クハ特別法ニ違反シタル罰金以上ノ刑ニ該ル罪ヲ犯シタル者ハ勿論陸海軍々人ノ如キ特別ノ身分關係ヲ有スル者カ陸海軍刑法ノ如キ特別法規定ノ罰金以上ノ刑ニ該ル罪ヲ犯シタル者モ亦包含スルモノト解釋スルヲ相當トス。特別ノ身分關係ヲ有スル者カ特別法規定ノ罪ヲ犯スカ如キハ勿論普通刑法ノ支配スル所ニ非サルモ普通人カ特別ノ身分關係ヲ有スル者カ特別法ノ罪ヲ犯シタル者ヲ藏匿若クハ隱避セシムルカ如キ行為ハ實際ニ於テ之ヲ處罰スル必要アルモノニシテ且ツ斯ル行為ヲ爲シタル者ハ法文ノ所謂罰金以上ノ刑ニ該ル罪ヲ犯シタル者ヲ藏匿若クハ隱避セシメタル者トアルニ該當スルモノト解釋スルコトヲ得可シ。

(二) 當該官廳ノ搜索ニ係ラサル犯罪者。罰金刑以上ノ罪ヲ犯シタル者ナル以上ハ其罪カ當該官廳ニ發覺シタル者ナルト又ハ當該官廳ニ於テ搜索中ノ者ニ係ルト否トハ問フ所ニ非ス。故ニ例ヘハ犯罪カ當該官廳ニ發覺前

當該官廳ノ搜索ニ係ラサル犯罪者

外國ニ隱避セシメ當該官廳ヲシテ公訴權ノ實行ヲ困難若クハ不能ナラシムル行為ノ如キハ本罪ニ該當スルモノトシテ處罰シ得可キナリ(註二九)。然ルニ學者或ハ本罪ノ客體ハ當該官廳ノ搜索中ノ犯罪者ニ限ルカ如ク論スルハ番ニ法文ニ矛盾スルノミナラス實際ノ必要ニ應スル能ハサル不都合ナシト爲サス。

(註二九) 異説 岡田氏曰ク『法文ノ精神ヨリ之ヲ謂ヘハ藏匿ト謂ヒ隱避ト謂ヒ其入ノ發見ヲ不能ナラシムルカ或ハ著シク困難ナラシムルヲ謂ヒ而シテ搜索ニ著手セサル間ニハ未タ發見ノ不能者クハ困難ト謂フ事實ハ起リ得サルヲ以テ精神ノ解釋トシテ搜索中ノ者ノミヲ包含スト解釋セサル可カラズ(刑法講義六五頁)ト。

(三) 罰金刑ニ該ル罪ヲ犯シタル者。法律ニ罰金以上ノ刑ニ該ル罪ト規定シタル場合ニ於テハ罰金ニ該ル罪モ亦之ヲ包含スルモノト解釋ス可キヲ原則トス。恰モ禁錮以上ニ該ル罪ノ中ニ禁錮刑ニ該ル罪ヲモ包含スルモノト解釋ス可キヲ原則トスト其例ヲ等ウス。本罪ハ當該官廳カ犯罪ニ對スル呼出又ハ逮捕ヲ障礙スル行為ヲ罰スルノ精神ヨリスレハ罰金刑ニ該ル

罰金刑ニ該ル罪ヲ犯シタル者

第二章 國家ノ裁判ニ對スル罪 第三節 犯人又ハ拘禁中逃走シタル者ヲ藏匿シ又ハ隱避セシムル罪

罪ヲ犯シタル者ヲ以テ本罪ノ客體トスル必要ナキカ如シ。何トナレハ罰金刑ニ在リテハ罰金刑ニ該ル罪ヲ犯シタル者ニ付テハ裁判所ハ其呼出ヲ強制スル權ナク又如何ナル場合ナルヲ問ハス裁判所ハ罰金刑ニ該ル被告人ヲ逮捕スル權ナケレハナリ。然レトモ法文ニ罰金以上ノ刑ニ該ル罪ヲ犯シタル者トアルカ故ニ其解釋上罰金刑ニ該ル罪ヲ犯シタル者ヲモ本罪ノ客體ト爲サ、ルヲ得ス。

罪ヲ犯シタルコトナキ犯罪ノ嫌疑者

(四) 罪ヲ犯シタルコトナキ犯罪ノ嫌疑者。法文ニ所謂罪ヲ犯シタル者トハ眞ニ罪ヲ犯シタル者ヲ指稱ス。即チ犯罪者トハ主觀的及ヒ客觀的犯罪ノ構成要件ヲ具備シタル者ナラサル可カラス。故ニ犯罪ト爲ル可キ行爲アリタルモ行爲者カ責任無能力者タル場合ノ如キハ法文ノ所謂罪ヲ犯シタル者ト謂フヲ得ス(註三〇)。故ニ行爲者カ眞ニ罪ヲ犯シタル者ナリト思料シ之ヲ隱避セシムルモ被隱避者カ其實犯罪ヲ犯シタル者ニ非サルトキ又ハ其爲シタル行爲ハ犯罪ヲ構成セサルトキモ亦本罪ヲ構成セス(註三一)。故ニ

當該官廳ニ於テ犯人トシテ搜索中ニ係ル者ト雖モ其實被嫌疑者カ何等犯罪ヲ犯シタル者ニ非サルトキ又ハ嫌疑ニ係ル行爲ヲ爲シタルコトアルモ其行爲ハ罪ト爲ラサルトキハ之ヲ藏匿シ若クハ隱避セシムルモ犯罪ヲ構成セス。然ルニ學者或ハ犯罪嫌疑者ヲ藏匿若クハ隱避セシムルトキハ現ニ被嫌疑者カ何等犯罪ヲ犯シタルコトナク又其爲シタル行爲ハ犯罪ヲ構成セサルトキト雖モ本罪ヲ構成スルカ如ク論スルモ斯ノ如キハ法文ヲ無視シタル見解ト謂フ可キナリ(註三二)。

(註三〇) 同趣旨 フランク氏 (Frank, II, 1. zu § 159.)。

(註三一) 同趣旨 ベリク、フランク氏等 (Reising, Verfl. Darst. II, 1. a. a. O.)。

(註三二) (一) 同趣旨 江木、泉二諸氏。

江木氏曰ク『法文中特ニ犯罪(罰金以上ノ刑ニ該ル罪ヲ犯シタル者)ト明言シタル以上ハ法律ニ於テ之ヲ犯罪ト認ムルモノニ非サレハ此罪ノ物體タルコトヲ得サル可シ。然レトモ此罪ヲ處罰スルニハ必スシモ本罪ノ物體タル犯罪人ニシテ確定ノ判決ヲ經タルコトヲ要セス。判官ハ犯人藏匿ノ罪ヲ判決スルノ當時ニ於テ單ニ此罪ヲ處斷スルノ目的ニ於テノミ藏匿セラレタル犯罪人ノ果シテ法律上ノ犯罪人タルヤ否ヤヲ定メ以テ其裁判ノ言渡ヲ爲ス可キモノトス』(現行刑法原論五九、六〇頁)ト。泉二氏曰ク『罪ヲ犯シタル者トハ事實上罪ヲ犯シタル者ニ限ルヤ將タ犯罪ノ

第二章 國家ノ裁判ニ對スル罪 第三節 犯人又ハ拘禁中逃走シタル者ヲ

嫌疑ヲ受ケタル者ヲモ包含スルヤハ疑問ナリト雖モ法律ハ罪ヲ犯シタル者ト規定スルヲ以テ其者カ罪ヲ犯シタリト謂フ事實ノ認定セラル、コトカ處罰條件タル可シ』(日本刑法論五八三頁)ト。

(二) 異説 現ニ罪ヲ犯シタル者ノミナラス犯罪嫌疑者ヲモ包含ス。勝本、岡田、牧野諸氏。

勝木氏曰ク『犯罪人ト謂フトキハ罪ヲ犯シタル者ニシテ現ニ有罪ノ者タルヲ要スルカ如シト雖モ本條規定ノ趣旨ハ司法權ノ實行ヲ妨害スル者ヲ罰スルニアルト草案(舊法)ノ逮捕ヲ要ス可キ刑事被告人トアルニ依テ之ヲ觀レハ茲ニ所謂犯罪人トハ必スシモ有罪ノ者ト謂フニ非サルハ勿論犯罪ノ嫌疑アル者ノ中ニ付テモ法律上特ニ逮捕ヲ要ス可キモノ即チ體刑ヲ受ク可キ罪ヲ犯シタル嫌疑アル者ノミヲ謂フモノト信セラル』(刑法新義上卷二九四頁)ト。岡田氏曰ク『條文ノ犯罪人トアルハ事實罪ヲ犯シタルコトアルト否ト後ニ有罪ノ判決ヲ受ケタルト否トニ論ナク有罪ノ嫌疑ノ爲メ官ノ捜索中ノ總テノ者ヲ謂フト解セサル可カラス』(刑法講義六四頁)ト。牧野氏曰ク『所謂犯罪人トハ實際犯罪ヲ犯シタル者ヲ指スハ勿論單ニ有罪ノ嫌疑ノ爲メ官ノ捜索中ニ屬スル者ヲモ包含ス』(刑法通義二〇八頁)ト。

(五) 公訴權消滅シタル犯罪者。 犯罪行為アリタルモ之ニ對スル公訴ノ時効

完成スルカ又ハ刑ノ廢止ニ因リ公訴權消滅シタル場合ニ於テハ其犯罪行為アリタル者ヲ藏匿シ又ハ隱避セシムルモ本罪ヲ構成セス(註三三)〇。然レトモ行為者カ藏匿シ又ハ隱避セシメタル當時ニ於テ公訴權消滅セサリシトキハ犯罪構成ニ付キ缺クル所ナシトス。故ニ時効ノ未タ完成セサル犯罪

公訴權ノ消滅シタル犯罪者

者ヲ藏匿シ又ハ隱避セシメ以テ公訴權ノ實行ヲ妨ケ公訴ノ時効ヲ完成セシムルカ如キハ本罪ヲ構成ス。

(註三三) 同説 オルスハウゼン、フランク氏等(Oalszweig, 2. 32; Frank, a. a. O.)

(六) 親告罪ヲ犯シタル者。 苟モ罰金以上ノ刑ニ該ル以上ハ告訴ヲ待テ受理

ス可キ罪ヲ犯シタル者ヲ藏匿シ又ハ隱避セシメタル場合ニ於テモ本罪ヲ構成スルモノト解ス可キナリ。然レトモ斯ル場合ニ於テハ本罪ノ公訴ノ提起ハ原犯(親告罪即チ告訴者)ニ付キ公訴ノ提起アリタル場合ニ限ルモノトス。何トナレハ本罪ハ原犯ノ存在ヲ條件トスルモノニシテ原犯存在セサルニ於テハ本罪ハ之ヲ存在セサルモノト爲サ、ルヲ得ス。之ト同一理ニ依リ原犯ニ對シ公訴權發生セサルトキハ本罪ニ付キ亦公訴ヲ提起ス可カラサルモノト解釋セサル可カラス。從テ原犯ニ對スル公訴權ノ消滅ハ本罪ニ對スル公訴權ノ消滅ノ效力アリト爲サ、ルヲ得ス(註三四)〇。

(註三四) (一) 同説 オルスハウゼン、ピンギング、フランク氏等(Oalszweig, 51; Binding, Lehrb. II. 648;

親告罪ヲ犯シタル者

Frank, II. 1. III. zn 257.)

(11) 異訊 小崎、泉二、牧野三氏。但シ三氏共ニ趣旨及ヒ結論ヲ同ウセス。

小崎氏曰ク『親告罪ノ訴訟條件タル告訴ノ有無ハ問フ所ニ非ス』(日本刑法論各論一七一頁)ト。泉二氏曰ク『親告罪ノ告訴ナキ前ニ其犯人ヲ藏匿シ又ハ隠避セシムルトキハ本罪ヲ構成スルヤ否ヤニ付キテハ學者間ニ議論アリ。一説ニヨレハ本犯タル親告罪ニ付キテ告訴アリタル後ニ非サレハ本罪ヲ構成セストシ他ノ一説ニ依レハ告訴ノ有無ハ犯罪ニ關係ナキヲ以テ本罪ヲ構成スルヲ妨ケスト爲ス。後説ヲ採用ス可キナリ。然レトモ告訴ノ拋棄アリタルトキハ其事件ノ犯人ニ付テ本罪ヲ構成スルコトナキモノト解スルヲ至當トス』(日本刑法論五八四頁)ト。牧野氏曰ク『本條ハ犯罪ニ對スル官ノ搜查權ヲ妨害スルヲ罰スルノ主旨ニ出ツルヲ以テ告訴又ハ刑ノ時效ヲ經タル者ニハ適用ナシ親告罪ニ就テ告訴ナキ場合モ亦同シ』(刑法通義二〇九頁)ト。

### 第二 拘禁中逃走シタル者

拘禁中逃走シタル者トハ既決ノ囚人、未決ノ囚人、拘引狀ノ執行ヲ受ケタル者及ヒ其他法令ニ因リ拘禁セラレタル者ヲ總稱ス。而シテ此等ノ者ノ意義ニ付テハ前既ニ説明シタル所ナレハ之ヲ再説セス(七三七頁以下)。

#### 第二項 所爲

本罪ハ犯罪者又ハ逃走シタル者ヲシテ當該官廳ニ發見セサラシムルノ行

拘禁中逃走者

所爲

爲ヲ爲スニ依リ構成スルモノトス。換言スレハ犯罪者ヲシテ其事件審理ノ爲メニスル當該官廳ノ呼出又ハ逮捕ニ障礙ヲ與ヘ又ハ逃走者ニ對スル當該官廳ノ再逮捕ニ對シ障礙ヲ加フルニ依リ成立スルモノナリ。而シテ犯罪者ニ對スル事件審理ノ爲メニスル當該官廳ノ呼出又ハ逮捕ニ障礙ヲ與フル行爲ハ裁判事務ヲ妨害スルノ性質ヲ有シ逃走者ニ對スル當該官廳ノ再逮捕ニ對シ障礙ヲ加フルノ行爲ハ逃走者ニ對スル當該官廳ノ實力支配ノ回復ヲ困難ナラシムル性質ヲ有ス。故ニ二者同一法條ニ規定スルモ其性質ハ相異ナルモノアリ。然レトモ當該官廳ヲシテ一定ノ人ヲ發見スル能ハサラシムル所爲ヲ爲スノ點ニ於テハ二者全然同一ナリトス。

犯罪者又ハ逃走者ヲシテ當該官廳ニ發見スル能ハサラシムル行爲ハ之ヲ分テ(一)犯罪者又ハ逃走者ヲ藏匿スル行爲及ヒ(二)犯罪者又ハ逃走者ヲ隠避セシムル行爲ノ二ト爲ス。

(一) 犯罪者又ハ逃走者ヲ藏匿スル行爲。藏匿トハ行爲者カ當該官廳ヲシテ

犯罪者又ハ逃走者又ハ藏匿スル行爲

第二章 國家ノ裁判ニ對スル罪 第三節 犯人又ハ拘禁中逃走シタル者ヲ藏匿シ又ハ隠避セシムル罪

犯罪者又ハ逃走者ヲ發見スル能ハサラシムル行爲ヲ爲スヲ謂フ。苟モ行爲者ノ行爲ヲ以テ藏匿スル以上ハ犯罪者又ハ逃走者ヲ自己ノ支配内ニ在ル場所又ハ物ノ内ニ藏匿スルト又ハ自己ノ支配外ニ在ル場所又ハ物ノ内ニ藏匿スルト又ハ搜索ノ任ニ在ル當該公務員ヲ欺キ以テ犯罪者又ハ逃走者ノ發見ヲ妨害スル行爲ニ出ツルトヲ問ハス犯罪者又ハ逃走者ヲシテ當該官廳ニ發見スル能ハサラシムル行爲即チ當該公務員ノ搜索ヲ妨害スル行爲アリタルトキハ之ヲ法文ノ所謂藏匿ナリト解釋スルヲ相當ナリトス。故ニ例ヘハ犯罪者又ハ逃走者ヲ自己ノ家屋内ニ潛伏セシメ若クハ當該公務員ニ對シ犯罪者又ハ逃走者カ自己ノ家屋内ニ在留スルニ拘ラス他地方ニ滞留スル如ク虚偽ノ陳述ヲ爲ス如キ又例ヘハ行爲者自身カ犯罪者又ハ逃走者ノ被服容貌ニ變更ヲ加ヘ以テ當該公務員ノ搜索ヲ妨クル行爲ヲ爲ス如キハ總テ之ヲ犯罪者又ハ逃走者ヲ藏匿スル行爲アリタルモノト解釋ス可キナリ(尚ホ此點ニ關シ後段犯罪者又ハ逃走者ノ例ヲ參照ス可シ)。故ニ學者或ハ自己ノ

犯罪者又ハ逃走者  
シテハ  
隠避セシムル  
行爲

(二)

管守内ニ於テ犯人ヲシテ官ノ發覺ヲ避ケシムル行爲ノミヲ指シテ藏匿ナリト解スル如キ(江木氏說)或ハ犯人ニ對シ隠匿ノ場所ヲ給與スル行爲ノミヲ指シテ藏匿ナリト解スルカ如キ(勝本、小崎、泉二氏、牧野諸氏ノ說)ハ正當ナラス。

犯罪者又ハ逃走者ヲ隠避セシムル行爲。隠避トハ犯罪者又ハ逃走者カ當該官廳ノ發見搜索ヲ免ル、カ爲メニ爲ス行爲ヲ謂フ。而シテ隠避セシムルトハ犯罪者若クハ逃走者ヲシテ隠避セシムル行爲即チ行爲者カ犯罪者又ハ逃走者ヲシテ隠避ノ意ヲ決セシム可キ行爲又ハ之ヲ幫助スル行爲ヲ爲シ以テ犯罪者又ハ逃走者ヲシテ隠避ノ實行ヲ爲サシメ又ハ之ヲ容易ナラシムル行爲ヲ謂フ。若シ行爲者ニシテ犯罪者又ハ逃走者ノ隠避ノ行爲ヲ引受ケ之ヲ實行スルトキハ隠避セシムル行爲ニ非スシテ藏匿スル行爲ナリ。例ヘハ所在ヲ晦マサントスル犯罪者又ハ逃走者ニ旅費ヲ給與シ以テ遠方ニ旅行スルノ便ヲ與フルカ如キ又例ヘハ犯罪者又ハ逃走者カ東方ニ向テ逃走シタル事實アルヲ知ルニ拘ラス搜索ニ當ル當該公務員ニ對

シ西方ニ同テ逃走シタリト欺罔シ以テ犯罪者又ハ逃走者ノ隱避ヲ容易ナラシムルカ如キ又例ヘハ被服容貌ヲ更ヘ當該公務員ノ發見ヲ免レントスル犯罪者又ハ逃走者ニ費用ヲ與ヘ被服又ハ容貌ノ變更ヲ實行スル便ヲ得セシムルカ如キ場合ニ在リテハ犯罪者又ハ逃走者ヲ隱避セシムル行爲アリタルモノト解スルヲ得可シ(註三五)。之ヲ要スルニ藏匿ハ行爲者ノ行爲ニシテ隱避ハ原犯者ノ行爲ナリ。而シテ隱避セシムトハ原犯者ノ隱避ヲ教唆シ又ハ之ヲ幫助スル行爲ヲ爲スヲ謂フ。故ニ學者或ハ藏匿ト隱避トヲ混同スルカ如キハ正當ナラス。

(註三五) 藏匿ト隱避トノ區別ニ關スル本邦學者ノ所説ハ左ノ如ク較ル。

(一) 第一義説 隱避ノ場所ヲ與フルハ藏匿ニシテ藏匿以外ノ方法ニ依リ被告人ノ發見逮捕ヲ妨クルハ隱避ナリ。小崎、泉二、牧野諸氏。

小崎氏曰ク「藏匿トハ佛文章案第百八十五條(舊法ノ)ニ所謂隠レ場所ヲ與フルトアルニ相當シ、犯人ニ對シテ隱避即チ發見ヲ避クル場所ヲ給與スルノ義ナリ。而シテ場所ノ如何ニ付テハ法律ハ何等ノ制限ヲ設ケサルヲ以テ家屋、倉庫又ハ船、馬車等總テ之ヲ包含スルモノトス。然レトモ場所ヲ給與スルヲ要スルカ故ニ其服裝ヲ變セシムル爲メ衣服ヲ給與スルノミニテハ藏匿ト謂フコトヲ得ス。隱避セシムルトハ藏匿以外ノ方法ニ依リ犯人ノ發見逮捕ヲ妨害スル行爲ヲ謂フ。而シテ其妨害ノ方法ニ就テハ法律ハ何等ノ制限ヲ設ケサルヲ以テ犯人ニ潛伏ス可キ場所又ハ方法ヲ教示シ或ハ潛伏ニ要スル費用又ハ發見ヲ避クルニ必要ナル衣服ヲ給與スルカ如キ總テ之ヲ包含スルモノトス。犯罪人ニ逃走ヲ煽動シ、或ハ逮捕ヲ解クカ如キ(刑訴、六一條參照)又同シ。犯人ノ發見又ハ逮捕ヲ妨クル目的ヲ以テ告訴、告發ヲ妨害シ又ハ官廳ヲ欺罔シ又ハ犯人ニ代テ自ラ體刑ヲ負擔スルカ如キ行爲ハ所謂隱避セシムルモノト謂フコトヲ得ルヤ否ヤニ付テハ解釋上爭ナキニ非スト雖モ余輩ハ以上ノ行爲モ亦之ヲ包含スルモノト信ス」日本刑法論各論一六八、一六九頁ト。泉二氏曰ク「藏匿トハ隱匿即チ發見逮捕ヲ避クル場所ヲ供給スルコトヲ謂ヒ隱避セシムトハ藏匿以外ノ方法ヲ以テ發見逮捕ヲ免レシムルコトヲ謂フ。例ヘハ潛伏ノ場所又ハ方法ヲ指示誘導シ旅費ヲ給シ發見ヲ妨ク可キ衣服ヲ給シ或ハ現行犯人ヲ逮捕シタル一人ニ對シ禁行、著追ヲ加ヘ若クハ之ヲ欺罔シテ犯人ヲ逃走セシメ或ハ自ラ犯人又ハ逃走者ノ氏名ヲ詳稱シテ拘禁セシメ以テ犯人又ハ逃走者ノ隱避スルヲ助ケルカ如キ何レモ隱避セシムル行爲ナリ」日本刑法論五八一、五八二頁ト。牧野氏曰ク「藏匿トハ官ノ發見ヲ妨ク可キ場所ヲ供給スルヲ謂フ。隱避トハ被搜索者ノ發見ヲ妨ク可キ其他ノ一切ノ行爲ヲ謂フ。故ニ服裝ヲ變セシムル爲メ衣服ヲ供給シ旅行ヲ爲サシムル爲メ費用ヲ給スルカ如キハ勿論告訴、告發ヲ妨害シテ官ニ通達セサラシムル所爲及ヒ官ヲ欺罔スル行爲例ヘハ犯人ニ代テ裁判ヲ受ケ且ツ刑ヲ受ケルカ如キモ亦隱避ノ語ニ包含セラル、モノト解ス」刑法通義二〇九頁ト。

(二) 第二義説 江木氏曰ク「藏匿トハ自己ハ管守内、隱避トハ自己ハ管守外ニ於テ犯人ヲシテ官ノ發見ヲ避ケシムル所爲ヲ謂フ」(現行刑法原論六二頁)ト。

(三) 第三異説 勝木氏曰ク「藏匿トハ犯人ニ對シ隠避ノ場所ヲ給與スルコト俗ニ所謂「カクマフ」ノ義ニシテ例ヘハ犯人ナ自己ノ家屋内ニ潛伏セシメ又ハ衣服、容貌ヲ變セシメ以テ其發見ヲ妨クルカ如キ所爲ヲ謂ヒ、隠避トハ犯人ノ潛伏セントスル行爲ヲ援助スルノ義ニシテ例ヘハ旅費ヲ與ヘテ逃走セシメ若クハ隠避スル適當ナル場所又ハ方法ヲ教示スルカ如キ所爲ヲ謂フ」(刑法析義二九二、二九三頁)ト。

(四) 第四異説 岡田氏曰ク「搜索ヲ告スルハ一ハ自ら被搜索者ノ發見ヲ妨クル(藏匿)ト一ハ之ヲシテ他ニ逃ケ發見ヲ逃レシムル(隠避)トノ二法アリ」(刑法講義六四、六五頁)ト。

犯罪者又ハ逃走者ヲ搜索又ハ逮捕スル任務ヲ有スル者ニ在リテハ之ヲ發見シタルニ拘ラス其義務ヲ怠リ犯罪者又ハ拘禁者ヲシテ自由ニ隠避スルヲ見遁スノ所爲(不行爲)アリタルトキハ行爲者ニ隠避ノ所爲アリタルモノト爲スコトヲ得可シ。

### 第三項 主體

何人ト雖モ犯罪者又ハ逃走者ヲ藏匿シ又ハ隠避スル罪ヲ罪スコトヲ得可シ。唯タ犯罪者及ヒ逃走者ノ親族ハ犯罪者若クハ逃走者ノ利益ノ爲メ之ヲ藏匿シ又ハ隠避セシムル行爲ヲ爲スモ本罪ヲ構成セス。故ニ大多數ノ場合

主體

犯罪者又ハ逃走者  
ハ犯罪者又ハ逃走者  
カハ犯罪者又ハ逃走者  
ヲ教唆シ又ハ誘引シ  
自己ヲ藏匿シ又ハ隠避シ  
隠避シ又ハ隠避シ  
タル場合  
ノ責任

ニ於テ犯罪者又ハ逃走者ノ親族ハ本罪ヲ犯ス能ハサルモノト解セサルヲ得ス。尙ホ茲ニ説明ヲ要ス可キハ犯罪者又ハ逃走者カ第三者ヲ教唆シ自己ヲ藏匿又ハ隠避セシメタルトキハ第三者ハ本罪ヲ犯シタル者ナルコト疑ナシト雖モ犯罪者又ハ逃走者ヲ以テ本罪ノ教唆者ナリト謂フヲ得ルヤ否ヤ即チ犯罪者又ハ逃走者ヲ本罪ノ教唆者トシテ本罪ノ主體ト爲スヲ得ル否ヤノ點ニ在リ。此點ニ關シテハ犯罪者又ハ逃走者ハ本罪ノ教唆者タル能ハサルモノト解スルヲ相當ナリトス。元來犯罪者若クハ逃走者カ自ら隠避スル行爲ハ罪ト爲ル可キモノニ非ス。此趣旨ヨリスレハ犯罪者又ハ逃走者カ其隠避ニ關シ他人ヲシテ自己ヲ幫助セシメタルトキ若クハ他人ノ行爲ニ依リ隠避ヲ全ウスルヲ得タル場合ニ於テ本罪ノ教唆者ナリトシテ之ヲ有罪ナリト解スル能ハス。又犯罪者若クハ逃走者ノ親族カ犯罪者又ハ逃走者ノ利益ノ爲メ之ヲ藏匿シ又ハ隠避セシムル場合ニ於テ之ヲ罰セサルノ趣旨ヨリスルトキハ犯罪者若クハ逃走者自身カ第三者ヲシテ自己ヲ藏匿シ又ハ隠避セシム



可キ行爲ヲ爲スモ之ヲ罰セサル精神ナリト解セサルヲ得ス(註三六)。

(註三六) (一) 同趣旨 大審院判例、小崎、勝本兩氏。

判例ニ曰ク「教唆者カ教唆ニ因テ犯シタル罪ノ要件タラサルヲ要スルヤ勿論トス從テ刑ノ執行ヲ免レン爲メ他人ニ囑託シ自己ニ代ハリ受刑セシメ自己ヲ隠避セシメタル所爲ハ隠避罪ヲ教唆シタルモノト云フヲ得ス」(三五年大審院判決第一卷一七九頁)ト。小崎氏曰ク「本罪ハ他人ノ犯罪ヲ庇護スル罪ニシテ犯人自ラ自己ヲ庇護スルモ刑罰ヲ科セラル、コトナシ。故ニ犯人カ他人ヲ教唆シテ自己ヲ庇護又ハ隠避セシムルモ本罪ノ教唆ヲ以テ論スルコトヲ得サルナリ。幫助スル場合亦同シ」(日本刑法論各論一七二、一七三頁)ト。尙ホ勝本氏法政新誌三九年一〇卷四號一頁以下参照。

(二) 異議 江木氏。氏曰ク「本罪ノ手段ニ就テハ法律上特ニ明定スルコトナキヲ以テ苟モ其手段ニ一般犯罪ノ能力アル以上ハ如何ナル方法ヲ用フルモ不可ナル所ナシ。設例ヘト甲ナル者自ラ犯シタル罪ヲ隠避セシメカ爲メ贈與、契約、威力、強迫等ニ依リ乙者ナル他人ヲシテ自首等ヲ爲サシメ代テ其刑ヲ受ケシタルトキハ乙者ハ犯罪隠避罪アル可ク甲者ハ先ニ犯シタル罪ノ外仍ホ犯人隠避罪即チ乙者ノ教唆者トシテ處斷セラル可シ」(現行刑法原論六二頁)ト。

### 第四節 刑事々件ノ證據湮滅ノ罪

第四百條 他人ノ刑事被告事件ニ關スル證據ヲ湮滅シ又ハ偽造、變造シ若クハ偽造、變造ノ證據ヲ使用シタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス。

第四百五條 本罪ノ罪ハ犯人(又ハ逃走者)ノ親族ニシテ犯人(又ハ逃走者)ノ利益ノ爲メ

他人ノ刑事被告事件

ニ犯シタルトキハ之ヲ罰セス。

本罪ハ他人ノ刑事被告事件ニ關スル有罪、加重情狀、減輕情狀、若クハ無罪ノ證據ヲ湮滅シ又ハ偽造、變造シ若クハ偽造、變造ノ證據ヲ使用スル行爲ヲ爲スニ依リ成立スルモノトス。

### 第一項 客體

(一) 他人ノ刑事被告事件。他人ノ刑事被告事件トハ現ニ捜査機關又ハ裁判所ニ繫屬スル他人ニ對スル刑事被告事件ヲ謂フ。既ニ事件ニシテ繫屬スル以上ハ其事件ノ被告人ハ元來罪ヲ犯シタルコトアルト否ト又其訴追セラレ又ハ訴追セラレントスル行爲カ元來罪ト爲ラサルト否トハ何等ノ關係ナキモノトス。然レトモ繫屬セサル刑事々件ノ如キハ之ヲ法文ノ所謂他人ノ刑事被告事件ト解スルヲ得サル可シ。何トナレハ被告事件ナルモノハ犯罪事實カ捜査若クハ審理ノ爲メ捜査機關若クハ裁判所ニ繫屬シタル状態ニ在ル刑事々件ヲ謂フモニシテ未タ犯罪事實ニ對シ捜査又ハ審理

ヲ始メサル以前ニ於テハ被告人テフ者アリト謂フ能ハス從テ被告事件アリト謂フ能ハサレハナリ。若シ反對ノ解釋ヲ採リ將來ノ被告事件ヲ豫想シ之ニ關スル證據ヲ湮滅シ又ハ之ヲ偽造、變造スル行爲アリタルトキハ本罪ヲ構成スルモノト爲ストキハ其事件カ豫想ニ反シテ刑事被告事件トシテ繫屬スルニ至ラザリシ場合ニ於テモ之ヲ有罪ナリト爲サ、ルヲ得ス。果シテ然ラハ其當然ノ結果トシテ行爲者カ元來罪ヲ犯シタルコトナキ者又罪ト爲ラサル行爲ヲ爲シタル者ノ爲メニ被告事件發生ス可シト豫想シ如上ノ行爲アリタル場合ニ於テモ亦之ヲ有罪ト爲サ、ルヲ得ス。斯ノ如キハ必要ナキニ處罰ヲ加ヘサル可カラサル場合ヲ生スルノ不都合ヲ生スルノミナラス法律ノ明文ニ符合セサル見解ナリト謂ハサルヲ得ス。論シテ斯ノ如キニ至ラハ反對論者ハ謂ハン現ニ被告事件トシテ裁判所ニ繫屬スルニ至リテ之ヲ處罰ス可シト。斯ノ如キハ何等ノ根據ナキノミナラス甚シキ不都合ノ結果ヲ生セン。例ヘハ前例示ノ場合ノ如ク行爲者カ元來

罪ヲ犯シタルコトナキ者又ハ罪ト爲ラサル行爲ヲ爲シタル者ノ爲メ證據ヲ湮滅シタル場合ニ於テ司法警察官カ搜查ヲ爲シ又ハ檢事カ起訴ヲ爲シタルトキハ犯罪ヲ構成シ然ラサルトキハ罪ト爲ラサルカ如キ奇異ノ結果ヲ生セン(註三七)。然レトモ現ニ罪ヲ犯シタル者ノ爲メ犯罪ノ證據ヲ湮滅シ又ハ之ヲ偽造、變造スル如キハ之ヲ嚴禁スル必要アリ。更ニ極論スレハ眞ニ罪ヲ犯シタル者ノ爲メ證據ヲ湮滅シ又ハ之ヲ偽造、變造スル如キハ原犯罪者ニ對スル事件カ被告事件トシテ繫屬スルト永久繫屬スルニ至ラサルトヲ問ハス之ヲ處罰スル必要アリ。余ハ何故ニ立法者カ刑事被告事件ナル不適當ナル文字ヲ擇ミタルカ又何故ニ第三百三條(前)ノ例ニ倣ヒ罪ヲ犯シタル者ニ對スル證據ヲ湮滅シ云々ト規定セザリシヤヲ解スル能ハス。之ヲ要スルニ法文ノ解釋トシテハ未タ繫屬セサル事件ニ關スル證據ヲ湮滅スルカ如キ行爲ハ第四百四條ノ法文ニ該當セストセサルヲ得ス。

(註三七) 異ニ、泉二、牧野兩氏。

●●●●● 泉二氏曰ク「被告事件中ニハ現ニ裁判所ニ繫屬中ノ事件ハ勿論將來ニ於テ繫屬ス可キ事件ヲモ包含ス。然レトモ將來ニ係ル場合ハ將來其事件カ裁判所ニ繫屬スルコトカ處罰條件ナリ」(日本刑法論五八六頁)ト。牧野氏曰ク「刑事被告事件ハ既ニ裁判所ニ繫屬シタルモノナルコトヲ必要トスルヤ。余輩ハ之ヲ必要ナラスト解ス。即チ被告事件ヲ豫想シテ本條ノ行為ヲ爲ストキモ亦本條ノ罪ト爲ル。但シ實際ニ事件カ裁判所ニ繫屬シタル時ヲ以テ其既遂ト爲ス」(刑法通義二二〇頁)ト。

他人ノ刑事被告事件ニ關スル證憑

(二) 他人ノ刑事被告事件ニ關スル證憑。他人ノ刑事被告事件ニ關スル證憑トハ被告人ノ有罪、無罪、加重情狀、減輕情狀ノ四者ヲ證明ス可キ諸般ノ物ヲ包含ス。即チ被告事件ニ關スル被告人ニ對シ利益及ヒ不利益ナル諸般ノ物證ハ本罪ノ客體タル可キモノトス。之ニ反シ證人、鑑定人ノ如キ人證ハ法文ノ所謂證憑中ニ包含セス。蓋シ法文ノ所謂證憑ハ之ヲ湮滅シ又ハ偽造若クハ變造シ得可キ物ニ限ルコトハ法文ノ當然ノ解釋ナリトス。

第二項 所爲

本罪ハ他人ノ刑事々々件ニ關スル證憑ヲ(一)湮滅シ、(二)偽造シ若クハ、(三)變造シ又ハ(四)偽造、變造シタル證憑ヲ使用スル行為ヲ爲スニ依リ成立ス。左ニ其

所爲

證憑ノ湮滅

梗概ヲ説明ス可シ。

(一) 證憑ノ湮滅。證憑ノ湮滅トハ刑事被告事件ニ關スル被告人ニ對スル利益又ハ不利益ナル物證ノ滅失、隱匿、其他證憑タル效力ヲ失ハシムルヲ謂フ。必スシモ現實ニ滅却スルコトヲ要セス。例ヘハ證憑タル物件ヲ燒盡シ又ハ證憑タル證書ヲ墨抹シ又ハ血痕、足跡等ヲ拂拭シテ其跡ヲ消滅セシムル等ノ行為ノ如シ。證憑湮滅ハ多クハ刑事被告事件ニ付キ被告人ニ對シ不利益ナル物證ニ就テ行ハル、ヲ常トスルモ又利益ナル物證ニ就テモ行ハル、コトナシト爲サス。

證憑ノ偽造

(二) 證憑ノ偽造。證憑ノ偽造トハ存在セサリシ證憑ヲ存存セシ如ク作為スルヲ謂フ。例ヘハ出齒庖丁ニ血痕ヲ附着セシメテ犯罪供用ノ物件タル如ク作為シ又ハ日附ノ當時授受シタル如キ形式ニテ後日ニ至リ文書ヲ作成スル如シ。證憑ノ偽造ハ或ハ刑事被告事件ニ付キ被告人ニ對スル利益ノ證憑ヲ作ラン爲メ或ハ不利益ノ證憑ヲ作ラン爲メニ行ハル、コトアリ。

證憑ノ變

第五編 國家ノ立法及行政ニ對スル罪

八四六

(三) 證憑ノ變造。證憑ノ變造トハ存在スル證憑ニ變更ヲ加フルコトヲ謂フ。

例ヘハ殺人事件ノ證憑物件タル血痕ノ附着スル刀劔ヨリ其血痕ヲ拭ヒ去リ更ニ動物例ヘハ犬ノ血ヲ附着セシムルカ如キ又嘗テ眞ニ授受アリタル證憑タル文書ニ變更ヲ加フル行爲ノ如シ。

偽造若クハ變造シタル證憑ノ使用

(四) 偽造若クハ變造シタル證憑ノ使用。偽造若クハ變造シタル證憑ノ使用トハ偽造又ハ變造シタル證憑ヲ眞正ナル證憑トシテ裁判所又ハ捜査機關ヲシテ刑事被告事件ニ付キ被告人ニ對スル利益又ハ不利益ナル證憑トシテ使用スルヲ得セシムル行爲ヲ謂フ。例ヘハ偽造又ハ變造シタル物證ヲ裁判所又ハ檢事局ニ提出スルカ如キ又例ヘハ判事又ハ檢事ノ臨檢ス可シト思料スル場所ニ偽造又ハ變造ニ係ル證憑物件ヲ差置ギ之カ差押ヲ爲サシムル行爲ノ如シ。

### 第三項 主體

主體

刑事被告事件ノ被告人ノ外何人ト雖モ證憑ノ湮滅、偽造、變造若クハ偽造、變

造シタル證憑ヲ使用スル罪ヲ犯シ得可キモノトス。之カ例外ヲ爲ス者ハ當該刑事被告事件ノ被告人ノ親族ニシテ被告人ノ利益ノ爲メニスル場合ニ於テハ本罪ノ主體タルコトヲ得ス。被告人ハ他人ヲ教唆シテ自己ニ對スル證憑ヲ湮滅、偽造、變造セシメ又ハ偽造若クハ變造シタル證憑ヲ使用セシメタルトキハ被告人ハ其教唆者トシテ處罰セラル可キモノニ非ス(註三八)。其理由ハ前節犯罪者又ハ逃走者ヲ藏匿又ハ隱避セシメタル罪ノ主體ニ付キ説明シタル處ヲ準用シテ之ヲ類推ス可シ(八三八頁以下参照)。

(註三八) 異訊 大審院判例ニ曰ク「人ヲ教唆シ自己ノ犯罪ノ證ト爲ル可キ物件ヲ隠蔽セシメタル所爲ハ刑法第百五十二條(舊)ノ罪證隱蔽罪ノ教唆罪ヲ構成ス(三五年大審院判決七卷八三頁)ト。

### 第五節 裁判事務ニ關シ義務ヲ怠ル罪

裁判事務ハ國家ノ事務ニ外ナラサレトモ之カ適當正確ナル實行ヲ望マント欲セハ當該公務員ヲシテ勵精事ニ當ラシムルコトヲ以テ充分ナリト爲サス。一般人民ニ對シ一定ノ義務ヲ命スルノ必要アリ。過去ニ於ケル實驗ヲ

裁判事務ニ關シ義務ヲ怠ル罪

第二章 國家ノ裁判ニ對スル罪 第五節 裁判事務ニ關シ義務ヲ怠ル罪

八四七

主體

陳述セシメンカ爲メ個人ニ命スルニ證人タル義務ヲ以テスルカ如キ又ハ特別ノ知識又ハ經驗ニ基キ實驗ヲ爲サシメ其心證ヲ陳述セシムル爲メ鑑定人タル義務ヲ以テスルカ如キ是ナリ。

(一) 主體。本罪ノ主體タルヲ得ルモノハ證人、鑑定人トシテ適式ニ呼出ヲ受ケタル者ニ限ル。故ニ裁判所ニ於テ一定ノ人ヲ證人、鑑定人トシテ喚問スルコトニ決定シタルモ未タ適式ノ呼出ナキカ又適式ノ呼出アリタルモ其本人ニ到達セサルトキハ本罪ノ主體タル能ハサルモノトス。

所爲

(二) 所爲。本罪ヲ構成ス可キ所爲ニニアリ。其一ハ適式ノ呼出ヲ受ケタルモ病氣其他相當ノ事故アルニ非スシテ出頭セサル所爲ナリ(刑訴一〇一八、二二三、二八條)。其二ハ出頭シタルモ宣誓ヲ肯セス若クハ宣誓シタルモ供述若クハ鑑定ヲ肯セサル所爲ナリ(刑訴一〇二六條、刑施四一條、刑訴一三〇、三二二、三二八條)。

第六節 刑罰

刑罰

誣告及ヒ偽證ノ罪ハ共ニ三月以上十年以下ノ懲役ヲ以テ處斷ス可ク若シ

誣告、偽證ノ罪ヲ犯シタル者ニシテ其事件ノ確定前又ハ懲戒處分前ニ自白シタルトキハ其刑ヲ減輕又ハ免除スルコトヲ得可シ。

犯人又ハ拘禁中逃走シタル者ヲ藏匿シ又ハ隱避セシムル罪及ヒ刑事々件ノ證據湮滅ハ共ニ二年以下ノ懲役又ハ二百圓以下ノ罰金ヲ以テ處斷ス可ク若シ行爲者カ犯人又ハ逃走者ノ親族ニシテ犯人又ハ逃走者ノ利益ノ爲メ犯シタルトキハ之ヲ處罰セサルモノトス。

裁判事務ニ關シ義務ヲ怠ル罪ハ(一)適式ノ呼出ヲ受ケタルニ病氣其他相當ノ事故ナクシテ出頭セサル所爲ハ其費用賠償ノ外二十圓以下ノ罰金ヲ以テ處斷ス可ク、若シ再度ノ呼出ニ係ルトキハ費用賠償ノ外倍額ノ罰金ヲ以テ處斷ス可ク、(二)出頭シタル者カ宣誓ヲ肯セス若クハ宣誓シタルモ供述ヲ肯セサル所爲ハ刑事々件ノ證人、鑑定人ノ所爲ナルトキハ四十圓以下ノ罰金又ハ科料ヲ以テ處斷ス可ク、民事々件ノ證人、鑑定人ノ所爲ナルトキハ四十圓以下ノ罰金ヲ以テ處斷ス可キモノトス。

### 第三章 特別法ニ規定スル國家ノ立法

#### 及ヒ行政ニ對スル罪

國家ノ立法若クハ行政ニ對スル罪ニシテ特別法ニ定ムルモノ少カラサルコトハ前既ニ之ヲ述ヘタルカ如シ。其中立法ニ對スル罪ハ其數比較的少ナシト雖モ行政ニ對スル罪ニ至リテハ其數甚タ多シ。左ニ之カ綱目ヲ指示ス可シ。

#### 第一 國家ノ立法ニ對スル罪

方今文明諸國ハ國民ノ參政權ヲ認メ議會ヲ設ケ之ニ立法ニ參與スル權限ヲ附與シ國民ヲシテ之カ議員ヲ選舉スルヲ得セシム。是ニ於テカ國民ヲシテ誠意ノ判斷ニ基キ選舉權ヲ實行セシムル必要アリ。又其選舉セラレタル議員ヲシテ誠意ノ判斷ニ基キ其任務ヲ遂行セシメ以テ議會ヲシテ適當ニ其

國家ノ立法ニ對スル罪

任務ヲ盡サシメサル可カラス。然ルニ議員ノ選舉カ賄賂ニ依リテ行ハレ議員ハ權勢ニ媚ヒ黃白ノ爲メニ行動スルコトアラシメンカ國民ノ參政權及ヒ議會ノ立法權ヲ認メタル根本理由ハ全然破壞セラレ僅ニ無用ノ長物否寧ロ社會腐敗ノ源泉トシテ其形骸ヲ存スルニ過キサルニ至ル可シ。苟モ國家ヲシテ圓滿ナル發達ヲ遂ケシメ國家萬年ノ繁盛ヲ望マハ此間ニ於ケル規律ヲ嚴肅ナラシメ國民ノ參政權ノ行使ヲ妥當ニシ議員並ニ議會ノ行動ヲ公明正大ナラシメサル可カラス。茲ニ於テ一面議會並ニ議員ニ對スル誹毀及ヒ侮辱罪ニ對スル刑罰ヲ普通ノ誹毀及ヒ侮辱罪ニ對スル其レヨリ重クシ以テ議會並ニ議員ノ名譽ヲ特ニ厚ク保護シ又他ノ一面ニ於テハ選舉ニ關スル規律ヲ確守セシムル爲メ精細ナル刑罰ヲ設クル必要アリ。茲ニ於テ(一)議會並ニ議員保護制(明治二二年號)ニ規定スル議會及ヒ議員ニ對スル誹毀侮辱ニ關スル罪(二)衆議院議員選舉法(明治三三年號)第八十六條乃至第百條ニ規定スル選舉ニ關スル罰則(三)府縣制(明治三二年號)ニ規定スル府縣會議員ノ選舉ニ付テ衆議院

議員選舉ニ關スル罰則ヲ準用スル旨ノ規定(四〇條制)(四)市町村會議員選舉罰則(明治三九年)ニ規定スル刑罰規定(五)郡制(明治三二年)第二十八條ニ郡會議員ノ選舉ニ付テ市町村會議員選舉ニ關スル罰則ヲ準用スル旨ノ規定等ノ存スル所以ナリ。

### 第二一 國家ノ行政ニ對スル罪

特別法ニ對スル國家ノ行政ニ對スル罪

行政ニ對スル犯罪中刑法ニ規定アルモノハ國家ノ裁判(司法)ニ對スル罪ニシテ其他ノ行政ニ對スル罪ハ之ヲ特別法ニ讓リタルコトハ前既ニ述ヘタルカ如シ。特別法ニ定ムル行政ニ對スル罪ハ之ヲ分テ(一)內務行政ニ對スル罪、(二)外務行政ニ對スル罪、(三)財務行政ニ對スル罪、(四)軍務行政ニ對スル罪、(五)產業行政ニ對スル罪、(六)交通行政ニ對スル罪ノ六ト爲スコトヲ得。

內務行政ニ對スル罪

(一) 內務行政ニ對スル罪トハ主トシテ行政警察ニ關スル罪ヲ指稱スルモノニシテ之ヲ分テ(甲)治安及ヒ風俗警察ニ對スル罪、(乙)衛生警察ニ對スル罪、(丙)出版警察ニ對スル罪ノ三ト爲スコトヲ得。

外務行政ニ對スル罪

(甲) 治安及ヒ風俗ニ對スル罪トハ主トシテ一、治安警察法、二、豫戒令、三、古物商取締法、四、質屋取締法、五、銃砲火藥類取締法、六、行政執行法、七、娼妓取締規則等ノ法律之ヲ定ム。  
(乙) 衛生警察ニ對スル罪トハ一、醫師法、二、齒科醫師法、三、產婆規則、四、藥品營業並ニ藥品取締規則、五、阿片法、六、傳染病豫防法、七、海港檢疫法、八、種痘規則、九、獸疫豫防法、十、汚物掃除法、十一、飲食物其他衛生上危險ノ物品取締制等ニ於テ之ヲ定ム。  
(丙) 出版警察ニ對スル罪トハ一、出版法、二、新聞紙法、三、通貨、證券模造取締法、四、紙幣類似證券取締等ニ於テ之ヲ規定ス。  
(二) 外務行政ニ對スル罪トハ前既ニ之ヲ説明シタルカ如ク主トシテ刑法第二編第四章、國交ニ關スル罪ノ中ニ規定ス。尙ホ特別法中ニ此罪ニ關シ規定スルモノヲ求ムレハ一、外國旅券規則第十六條、二、移民法第二十一條以下等ハ之ニ相當スルモノナル可シ。

財務行政  
ニ對スル  
罪

(三) 財務行政ニ對スル罪ハ各種ノ税法特ニ一、關稅徵收法第三十二條、二、地租條例第二十五條以下、三、所得税法第四十六條、第四十七條、四、營業税法第三十條、第三十五條其他五、酒造税法、六、自家用酒税法、七、酒精營業税法、八、醬油税法、九、自家用醬油税法、十、葉煙草專賣法、十一、印紙税法、十二、取引所税法、十三、頓税法、十四、關稅法等ニ於テ之ヲ定ム。

軍務行政  
ニ對スル  
罪

(四) 軍務行政ニ對スル罪ハ主トシテ一、軍規保護法、二、徵兵令、三、陸軍服役條例、四、陸軍召集條例、五、海軍下士卒服役條例、六、海軍召集條例、七、要塞地帶法等ニ於テ之ヲ定ム。

産業行政  
ニ對スル  
罪

(五) 産業行政ニ對スル罪ハ一、取引所法、二、特許法、三、意匠法、四、商標法、五、種牡馬検査法、六、蹄鐵工免許規則、七、肥料取締法、八、害蟲驅除豫防法、九、遠洋漁業奨勵法、十、生糸直輸出奨勵法、十一、蠶糸検査法、十二、度量衡法、十三、鑛業法、十四、砂鑛採取法、十五、森林法、十六、國有林野部分林規則等ニ於テ之ヲ定ム。

交通行政

(六) 交通行政ニ對スル罪ハ主トシテ一、郵便法、二、電信法、三、私設鐵道法、四、鐵道

ニ對スル  
罪

營業法、五、船舶法、六、造船奨勵法、七、船舶検査法、八、船員法、九、水先法、十、海上衝突豫防法、十一、航海奨勵法等ニ於テ之ヲ定ム。

# 刑法各論下卷

終



# 索引

## 注意

- 一、條文トハ刑法ノ條文ナリ
- 二、罪名トハ本書ニ於テ採用シタル罪名ナリ
- 三、上トハ上卷、下トハ下卷ノ略語ナリ
- 四、數字ヲ以テ示セルハ解説シタル頁數若クハ其頁數以下ナリ。例ヘハ上、二五、トアルハ上卷二十五頁若クハ上卷二十五頁以下ノ略語ナリ
- 五、第一解説頁數ハ條文ヲ直接ニ解説シタル頁數ニシテ第二、第三解説頁數ハ汎博ニ各記載ノ罪ニ付キ解説シタル頁數ナリ

條文	罪名	第一解説頁數	第二解説頁數	第三解説頁數
第七十三條	第一章 皇室ニ對スル罪 危害罪 <small>(天皇及ヒ天皇ニ準スヘキ皇族ニ對スル)</small> ……………	下、五四	下、五四	下、五四
第七十四條	不敬罪 <small>(天皇、天皇ニ準スル皇族ニ對スル)</small> ……………	下、五四	下、五四	下、五四
第七十五條	危害罪 <small>(天皇、天皇ニ準スル皇族ニ對スル)</small> ……………	下、五四	下、五四	下、五四
第七十六條	不敬罪 <small>(同上)</small> ……………	下、五四	下、五四	下、五四
	第二章 内亂ニ關スル罪			

索引

條文	罪名	第一解 設頁數	第二解 設頁數	第三解 設頁數
第七十七條	内亂罪	下、五三二	下、五六一	下、五四一
第七十八條	内亂ノ豫備若クハ陰謀罪	下、五三八	下、五六一	下、五四一
第七十九條	内亂ノ幫助罪	下、五八一	下、五六一	下、五四一
第八十條	内亂ノ豫備若クハ陰謀罪及ヒ内亂ノ幫助罪	下、五八八	下、五六一	下、五四一
第八十一條	第三章 外患ニ關スル罪	下、五八七	下、五八四	下、五八二
第八十二條	叛逆的通謀罪及ヒ叛逆的抗敵罪	下、五九〇	下、五八四	下、五八二
第八十三條	叛逆的援助罪	同上	同上	同上
第八十四條	同上	同上	同上	同上
第八十五條	同上	同上	同上	同上
第八十六條	同上	同上	同上	同上
第八十七條	外患ノ未遂、豫備若クハ陰謀罪	下、五九五	下、五八四	下、五八二
第八十八條	同上	同上	同上	同上
第八十九條	戰時同盟國ニ對スル罪	下、五九七	下、五八四	下、五八二
	第四章 國交ニ關スル罪			

第九十條	外國ノ代表者ニ對シテ暴行又ハ脅迫ヲ加ヘ若クハ侮辱ヲ加フル罪	下、六〇四	下、六〇一	
第九十一條	同上	同上	同上	
第九十二條	外國ノ國章ヲ損壞、除去又ハ汚穢スル罪	下、六〇三	下、六〇一	
第九十三條	外國ニ對シ私ニ戰爭ヲ爲ス罪	下、六〇六	下、六〇一	
第九十四條	局外中立ニ關スル命令ニ違反スル罪	下、六〇八	下、六〇一	
第九十五條	第五章 公務ノ執行ヲ妨害スル罪	下、六〇三	下、六〇一	
第九十六條	公務執行中ノ公務員ニ對シ暴行又ハ脅迫ヲ加フル罪及ヒ公務員ヲシテ或處分ヲ爲サシメ若クハ爲サシムル爲メ又ハ其職ヲ辭セシムル爲メ暴行又ハ脅迫ヲ加フル罪	下、六〇三	下、六〇一	
第九十七條	封印又ハ差押ノ標示ヲ損壞シ又ハ其他ノ方法ヲ以テ之ヲ無効ナラシムル罪	下、七〇九	下、六六一	
第九十八條	第六章 逃走ノ罪	下、七〇九	下、六六一	
第九十九條	單純ナル逃走罪	下、七三六	下、七三四	下、六六一
第一百條	重キ逃走罪	下、七四四	下、七三四	下、六六一
第一百一條	被拘禁者ヲ奪取スル罪	下、七四九	下、七三四	下、六六一
第一百二條	被拘禁者ノ逃走ヲ幫助スル罪	下、七五二	下、七三四	下、六六一
第一百三條	看守又ハ護送スル者カ被拘禁者ヲ逃走セシムル罪	下、七五四	下、七三四	下、六六一
第一百四條	被拘禁者ノ逃走罪及ヒ被拘禁者ヲ逃走セシムル罪ノ未遂罪	下、七五九	下、七三六	下、六六一
第一百五條	第七章 犯人藏匿及ヒ證憑湮滅ノ罪	下、八二四	下、七三三	
第一百六條	犯人又ハ拘禁中逃走シタル者ヲ藏匿シ又ハ隠避セシムル罪	同上	同上	

條文	罪名	第一解 頁數	第二解 頁數	第三解 頁數
第四百四條	刑事々件ノ證據湮滅ノ罪	下、八〇	下、七三	
第四百五條	前二罪ヲ親族カ犯シタル場合ニ於ケル免除規定	下、八三、四〇		
第八章 騷擾ノ罪				
第一百六條	正當ノ意義ニ於ケル騷擾罪	下、一四	下、九	
第一百七條	騷擾罪ヲ犯ス爲メニスル聚合ヲ解散セサル罪	下、三六	下、九	
第一百八條	第九章 放火及ヒ失火ノ罪			
第一百九條	人ノ住居シ又ハ現在スル建造物、汽車、電車、艦 船若クハ鐵坑(即チ第一種物)ヲ燒燬スル罪 人ノ住居セシ又ハ現在セサル建造物、艦船 若クハ鐵坑(即チ第二種物)ヲ燒燬スル罪 第三種物(第一種物及ヒ第二種物以外ノ物)ヲ燒燬スル罪	下、七一	下、六六	下、六六
第一百十條	犯人所有ノ第二種、第三種物ヲ燒燬シ因テ第一種又ハ他人所有ノ 第二種物ニ延燒及ヒ犯人所有ノ第三種物ヲ燒燬シ因テ他人所有ノ 第三種物ニ延燒	下、一〇四	下、六六	下、六六
第一百十一條	放火未遂罪	下、一五		
第一百十二條	放火豫備罪	下、二六		
第一百十三條	鎮火妨害罪	下、一九		
第一百十四條	自己ノ所有ニ屬スル差押チ受ケ、物權ヲ負擔シ、貸貸シ又ハ保險ニ 付シタル第二種及ヒ第三種物ヲ燒燬スル罪	下、一〇六		

第一百十六條	失火罪	下、二六		
第一百十七條	準放火及ヒ準失火罪	下、三一		
第一百十八條	瓦斯、電氣、蒸氣ノ漏出、流出又ハ遮斷ニ因ル危險ニ關スル罪	下、三三、下、三一		
第一百十九條	第十章 溢水及ヒ水利ニ關スル罪			
第一百二十條	溢水ニ因リ人ノ住居シ又ハ現在スル建造物、汽車、電車若クハ鐵 坑(第一種物)ヲ浸害スル罪 溢水ニ因ル第一種物以外ノ物(即チ第二種物)ヲ浸害スル罪	下、三六、下、三七	下、三七	下、三六
第一百二十一條	水防妨害罪	下、四二	下、三六	
第一百二十二條	過失溢水罪	下、四三	下、三六	
第一百二十三條	水利妨害ト爲リ又ハ溢水セシム可キ行爲ヲ爲ス罪	下、四七、 五一	下、三六	
第十一章 往來ヲ妨害スル罪				
第一百二十四條	一般ノ往來妨害及ヒ之ニ因ル致死傷	下、四九、下、六一		
第一百二十五條	汽車、電車又ハ艦船ノ往來妨害	下、五〇、下、六一		
第一百二十六條	故意及ヒ之ニ因ル致死傷 汽車、電車又ハ艦船ノ往來ニ危險ヲ生セシムルニ因ル其顛覆、覆 没又ハ破壞	下、五二、 下、六一		
第一百二十七條	往來妨害ノ未遂罪	下、五三、 下、六一		
第一百二十八條	過失ニ因ル往來妨害	下、五三、 下、六一		
第一百二十九條	第十二章 住居ヲ侵スル罪			

條文

罪

名

第一解 第二解 第三解  
説頁數 説頁數 説頁數

第三百三十條	住居侵害罪	上、二七五	上、二七三
第三百三十一條	皇居、禁苑、離宮、行在所、神宮又ハ皇陵ニ侵入スル罪	上、二八八	
第三百三十二條	住居侵害ノ未遂罪	上、二九一	
第三百三十三條	第十三章 秘密ヲ侵ス罪	上、二九三	上、二九一
第三百三十四條	信書ノ秘密ヲ侵ス罪	上、二九七	上、二九一
第三百三十五條	陰私漏告罪	上、三〇四	
第三百三十六條	秘密ヲ侵ス罪ノ告訴		
第三百三十七條	第十四章 阿片煙ニ關スル罪		
第三百三十八條	阿片煙ヲ輸入、製造又ハ販賣シ若クハ販賣ノ目的ヲ以テ之ヲ所持スル罪	下、五二九	下、五二五
第三百三十九條	阿片煙ヲ吸食スル器具ヲ輸入、製造又ハ販賣シ若クハ販賣ノ目的ヲ以テ之ヲ所持スル罪	下、五三〇	下、五二五
第三百四十條	阿片煙吸食ノ罪及ヒ阿片煙吸食ノ爲メ房屋ヲ給與シテ利ヲ圖ル罪	下、五三三	下、五二五
第三百四十一條	阿片煙又ハ阿片煙吸食ノ器具ヲ所持スル罪	下、五三三	下、五二五
	阿片煙ニ關スル罪ノ未遂罪	下、五三〇	下、五二五

第四百十二條	第十五章 飲料水ニ關スル罪		
第四百十三條	飲料淨水ノ汚穢	下、一九一	下、一八七
第四百十四條	飲料淨水ニ有害物混入	下、一九三	下、一八七
第四百十五條	飲料水ニ關スル罪ヲ犯スニ因ル致死傷	下、一九二	下、一八九
第四百十六條	水道ニ由リ公衆ニ供給スル飲料淨水又ハ其水源ニ有害物混入及ヒ之ニ因ル致死傷	下、一九三	下、一八七
第四百十七條	公衆ノ飲料ニ供スル淨水ノ水道ノ損壞又ハ壅塞	下、一九六	下、一八八
第四百十八條	第十六章 通貨偽造ノ罪		
第四百十九條	内國通貨ノ偽造、變造ノ罪及ヒ偽造、變造ノ内國通貨ノ行使、交付若クハ輸入ノ罪	下、二一九	下、二一五
第四百二十條	内國ニ流通スル外國通貨ノ偽造、變造又ハ偽造若クハ變造シタル外國ニ流通スル外國通貨ノ行使、交付若クハ輸入ノ罪	下、二五〇	下、二二五
第四百二十一條	偽造、變造ノ通貨收得ノ罪	下、二五九	下、二〇四
第四百二十二條	通貨ノ偽造、變造又ハ偽貨ノ行使、交付若クハ輸入ノ未遂罪	下、二六二	
第四百二十三條	收得後偽貨ノ知情行使若クハ知情交付ノ罪	下、二六三	
第四百二十四條	通貨ノ偽造、變造ノ準備ノ罪	下、二六五	
第四百二十五條	第十七章 文書偽造ノ罪		
第四百二十六條	詔書其他天皇ノ文書偽造罪	下、四〇三	下、三三六
第四百二十七條	公文書偽造罪	下、四〇七	下、三三六

條文

罪

名

第一解  
説頁數

第二解  
説頁數

第三解  
説頁數

第一百五十六條  
 第一百五十七條  
 第一百五十八條  
 第一百五十九條  
 第一百六十條  
 第一百六十一條  
 第一百六十二條  
 第一百六十三條  
 第一百六十四條  
 第一百六十五條  
 第一百六十六條  
 第一百六十七條  
 第一百六十八條

公務員其職務ヲ濫用シ公文書ヲ作製シ又ハ之ヲ變造スル罪……  
 公務員ヲシテ公文書ニ不實ノ記載ヲ爲サシムル罪……  
 偽造ニ係ル詔書其他天皇ノ文書、及ヒ偽造、變造ニ係ル公文書ヲ  
 行使スル罪及ヒ其未遂罪……  
 私文書偽造ノ罪……  
 診斷書、檢案書又ハ死亡證書ヲ偽作スル罪……  
 偽造ニ係ル私文書及ヒ偽作ニ係ル診斷書、檢案書又ハ死亡證書行  
 使ノ罪及ヒ其未遂罪……  
 第十八章 有價證券偽造ノ罪……  
 有價證券ヲ偽造、變造シ又ハ之ニ虚偽ノ記入ヲ爲ス罪……  
 偽造ノ有價證券ヲ行使、交付若クハ輸入スル罪、及ヒ其未遂罪……  
 第十九章 印章偽造ノ罪……  
 御璽、國璽、御名偽造ノ罪……  
 公務所又ハ公務員ノ印章若クハ署名偽造ノ罪……  
 公務所ノ記號ノ偽造罪……  
 私印、私署偽造ノ罪……  
 偽造ノ印章、署名、記號ノ使用又ハ印章、署名、記號ノ不正使用  
 ノ未遂罪……

下、四二〇	下、三三六
下、四二六	下、三三六
下、四〇六	下、三三六
下、四〇九	下、三三六
下、四〇〇	下、三三六
下、四〇五	下、三三六
下、四〇五	下、三三六
下、四四二	下、四四一
下、四四八	下、四四一
下、三〇二	下、二六六
下、三〇六	下、二六六
下、三四	下、二六六
下、三〇	下、二六六
下、三〇	下、二六六
下、三〇	下、二六六
下、三〇	下、二六六

第一百六十九條  
 第一百七十條  
 第一百七十一條  
 第一百七十二條  
 第一百七十三條  
 第一百七十四條  
 第一百七十五條  
 第一百七十六條  
 第一百七十七條  
 第一百七十八條  
 第一百七十九條  
 第一百八十條  
 第一百八十一條  
 第一百八十二條

第二十章 偽證ノ罪  
 證人カ虚偽ノ陳述ヲ爲ス罪……  
 偽證罪ノ自白……  
 鑑定人又ハ通事カ虚偽ノ鑑定又ハ通譯ヲ爲ス罪……  
 第二十一章 誣告ノ罪  
 誣告罪……  
 誣告罪ノ自白……  
 第二十二章 猥褻、姦淫及ヒ重婚ノ罪  
 公然猥褻ノ行爲ヲ爲ス罪……  
 猥褻ノ文書、圖畫其他ノ物ヲ頒布、販賣シ又ハ販賣ノ目的ヲ以テ  
 之ヲ所持シ又ハ公然之ヲ陳列スル罪……  
 狹義ノ強制猥褻罪及ヒ幼者ニ對スル猥褻罪……  
 強姦罪及ヒ少女ニ對スル姦淫罪……  
 強姦罪、心神喪失者ニ對スル姦淫罪及ヒ強制猥褻罪……  
 強姦、強制猥褻、心神喪失者若クハ幼者ニ對スル姦淫若クハ猥褻  
 行爲ノ未遂罪……  
 性交ノ自由ヲ害スル罪ノ告訴……  
 強姦又ハ強制猥褻ニ因ル致死傷罪……  
 營利ノ目的ヲ以テ淫行ノ常習ナキ婦女ヲシテ姦淫セシムル罪……

下、七九七	下、七九五	下、七六三
下、七九七	下、七九五	下、七六三
下、八二七	下、七九五	下、七六三
下、七九	下、七六三	
下、七九	下、七六三	
下、四六四	下、四六一	下、四五五
下、四六六	下、四六一	下、四五五
下、三三〇	上、三三五	
上、三三六	上、三三五	
上、三三八	上、三三五	
上、三三八	上、三三五	
上、二五五		
上、二五七		
上、二五八		
下、四七〇	下、四六一	下、四五五

條文

罪

名

第百八十三條	姦通罪及ヒ姦通罪ノ告訴	下、四七三	第一解 說頁數
第百八十四條	重婚罪	下、四七九	第二解 說頁數
第百八十五條	第二十三章 賭博及ヒ富籤ニ關スル罪	下、四八一	第三解 說頁數
第百八十六條	單純賭博罪	下、四八八	
第百八十七條	常習賭博罪及ヒ賭博場ヲ開帳シ又ハ博徒ヲ結合スル罪	下、四九〇	
第百八十八條	富籤發賣罪、富籤發賣ノ取次ヲ爲ス罪及ヒ富籤ノ授受ヲ爲ス罪	下、四九三	
第百八十九條	第二十四章 禮拜所及ヒ墳墓ニ關スル罪	下、五〇〇	
第百九十條	禮拜所ニ對シ不敬ノ行爲ヲ爲ス罪及ヒ説教、禮拜又ハ葬式ヲ妨害スル罪	下、五〇九	
第百九十一條	墳墓發掘ノ罪	下、五一八	
第百九十二條	墳墓發掘以外ノ方法ニ依ル死體、遺骨、遺髮又ハ棺内ニ藏置シタル物ヲ損壞、遺棄又ハ領得スル罪	下、五二九	
第百九十三條	墳墓發掘ニ依ル同上ノ罪	下、五二九	
第百九十四條	檢視ヲ經スシテ變死者ヲ葬ムル罪	下、五三三	
	第二十五章 瀆職ノ罪		
	職權濫用ニ依ル強要罪	下、六六九	
	職權濫用ニ依ル逮捕、監禁罪	下、六七三	

第百九十五條	職權濫用ニ依ル暴行又ハ凌虐ヲ爲ス罪	下、六七五	下、六二五
第百九十六條	職權濫用ニ依ル逮捕監禁又ハ暴行凌虐ニ因ル致死傷	下、六七八	下、六二五
第百九十七條	收賄罪	下、六八三	下、六三一
第百九十八條	贈賄罪	下、六八七	下、六三一
第百九十九條	第二十六章 殺人ノ罪	上、四四	上、二六
第二百一〇條	一般殺人罪	上、四六	
第二百一一條	殺尊屬親罪	上、六二	
第二百一二條	殺人豫備罪	上、七三	上、六六
第二百一三條	自殺教唆若クハ幫助又ハ被殺者ノ囑託ヲ受ケ若クハ其承諾ヲ得テ之ヲ殺ス罪	上、七三	上、六六
第二百一四條	殺人未遂罪	上、七三	上、六六
第二百一五條	第二十七章 傷害ノ罪		
第二百一六條	傷害罪	上、一六	上、一四
第二百一七條	傷害致死罪	上、一七	上、一五
第二百一八條	傷害罪及ヒ傷害致死罪ヲ助勢スル罪	上、一七	上、一五
第二百一九條	傷害罪及ヒ傷害致死罪ニ干與スル罪	上、一七	上、一五
第二百二〇條	傷害ニ至ラサル暴行ヲ加ヘタル罪	上、一八	
第二十八章	過失傷害ノ罪		

條文

罪

名

第一解 第二解 第三解 頁數

第二百九條	過失ニ基ク傷害罪及其告訴	上、二八〇	上、二八〇	上、二八〇
第二百十條	一般ノ過失致死罪	上、一〇七		
第二百十一條	業務上ノ不注意ニ因ル過失致死傷罪	上、一〇八		
第二百十二條	第二十九章 墮胎ノ罪			
第二百十三條	妊婦自身ノ墮胎	上、八九	上、八九	上、八九
第二百十四條	妊婦ノ囑託又ハ承諾ニ基ク他人ノ行為ニ係ル墮胎及ヒ之ニ因ル妊婦ノ致死傷	上、九〇	上、九〇	上、九〇
第二百十五條	醫師、産婆、藥劑師又ハ藥種商婦女ノ囑託ヲ受ケ又ハ其承諾ヲ得テ爲ス墮胎及ヒ之ニ因ル妊婦ノ致死傷	上、九一	上、九一	上、九一
第二百十六條	妊婦ノ囑託又ハ承諾ニ基カサル墮胎	上、九二	上、九二	上、九二
第二百十七條	第三十章 遺棄ノ罪	上、九六	上、九六	上、九六
第二百十八條	一般遺棄罪	上、二七	上、二七	上、二七
第二百十九條	保護ノ義務アル者ノ遺棄罪	上、三三	上、三三	上、三三
第二百二十條	遺棄ニ因ル致死傷	上、三六	上、三六	上、三六
	第三十一章 逮捕及ヒ監禁ノ罪			
	逮捕及ヒ監禁ノ罪	上、一〇〇	上、一〇〇	上、一〇〇

第二百二十一條	逮捕及ヒ監禁ニ因ル致死傷	上、一〇八	上、一〇八	上、一〇八
第二百二十二條	第三十二章 脅迫ノ罪			
第二百二十三條	脅迫ノ罪	上、一四四	上、一四四	上、一四四
第二百二十四條	強要罪	上、一四八	上、一四八	上、一四八
第二百二十五條	第三十三章 略取及ヒ誘拐ノ罪			
第二百二十六條	未成年者ニ對スル略取及ヒ誘拐ノ罪	上、一五三	上、一五三	上、一五三
第二百二十七條	營利、猥褻、結婚又ハ帝國外ニ移送スル目的ヲ以テスル略取又ハ誘拐	上、一五七	上、一五七	上、一五七
第二百二十八條	帝國外ニ移送スル目的ヲ以テスル略取又ハ誘拐、帝國外ニ移送スル目的ヲ以テスル人身賣買及ヒ被拐取者又ハ被賣者ヲ帝國外ニ移送スル罪	上、一六〇	上、一六〇	上、一六〇
第二百二十九條	略取罪ノ事後從犯及特定ノ目的ヲ以テスル被拐取者又ハ被賣者ノ未遂罪	上、一六三	上、一六三	上、一六三
第二百三十條	親告罪	上、一六五	上、一六五	上、一六五
第二百三十一條	第三十四章 名譽ニ對スル罪			
第二百三十二條	生害者ノ名譽ヲ毀損スル罪及ヒ死者ノ名譽ヲ毀損スル罪	上、一七〇	上、一七〇	上、一七〇
	侮辱罪	上、一七三	上、一七三	上、一七三
	告訴	上、一七六	上、一七六	上、一七六
	第三十五章 信用及ヒ業務ニ對スル罪			

條文	罪名	第一解 說頁數	第二解 說頁數	第三解 說頁數
第二百三十三條	信用及ヒ業務ニ對スル罪	上、五三		
第二百三十四條	同上	上、五三		
第二百三十五條	第三十六章 竊盜及ヒ強盜			
第二百三十六條	一般竊盜罪	上、三七	上、三六	
第二百三十七條	一般強盜罪及ヒ恐喝罪	上、四七	上、四六	
第二百三十八條	強盜ノ豫備罪	上、四五		
第二百三十九條	強盜的竊盜罪	上、四四		
第二百四十條	一般強盜罪	上、四五	上、三三	
第二百四十一條	強盜致死傷罪	上、四一		
第二百四十二條	強盜強姦及ヒ之ニ因ル致死罪	上、四九	上、三九	
第二百四十三條	他人ノ占有ニ屬シ又ハ公務所ノ命ニ因リ他人ノ看守スル自己ノ財物ノ強取	上、四〇		
第二百四十四條	竊盜、強盜ノ未遂罪	上、四〇		
第二百四十五條	親族相盜	上、四三		
	電氣ノ強取	上、四一		
	第三十七章 詐欺及ヒ恐喝ノ罪			

第二百四十六條	詐欺罪	上、五七	上、五四	
第二百四十七條	背信罪	上、五〇		
第二百四十八條	貪利罪	上、五九	上、五四	
第二百四十九條	恐喝罪	上、六〇		
第二百五十條	詐欺、恐喝及ヒ貪利ノ未遂罪	上、六〇		
第二百五十一條	本章ノ罪ニ第二四二、二四四、二四五條ノ準用	上、六〇		
第二百五十二條	第三十八章 横領ノ罪			
第二百五十三條	一般ノ横領罪及ヒ準横領罪	上、四七	上、四五	
第二百五十四條	監守物横領罪	上、四七	上、四五	
第二百五十五條	拾得物横領罪	上、四七	上、四五	
第二百五十六條	親族間ノ横領罪	上、四九	上、四五	
第二百五十七條	第三十九章 贓物ニ關スル罪			
第二百五十八條	贓物收受罪及贓物ノ運搬、寄藏、故買又ハ牙保ヲ爲ス罪	上、六三	上、六六	
第二百五十九條	贓物ニ關スル罪ノ特別	上、六三		
第二百六十條	第四十章 毀棄ニ關スル罪			
第二百六十一條	官公文書毀棄罪	上、四九	上、四八	
第二百六十二條	私文書毀棄罪	上、四九	上、四八	

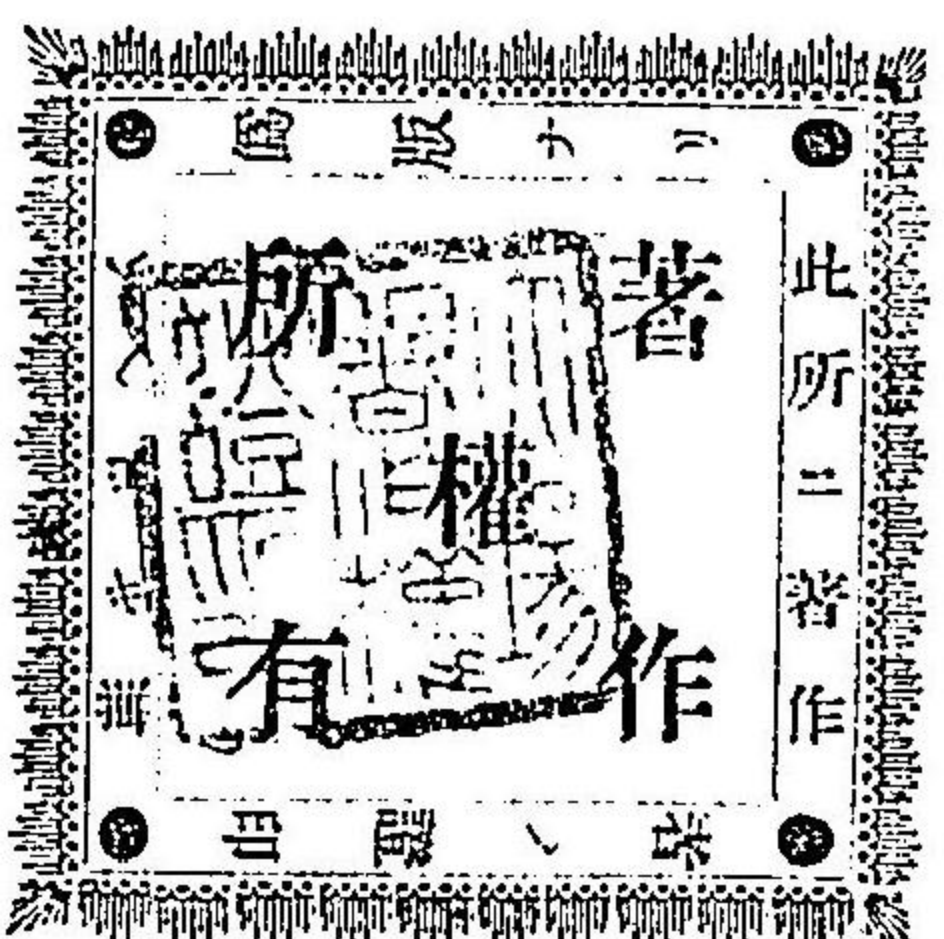


條文	罪名	第一解 說頁數	第二解 說頁數	第三解 說頁數
第二百六十條	建造物、艦船毀棄罪及ヒ之ニ因ル致死傷罪	上四九七	上四八一	
第二百六十一條	一般毀棄罪	上四九五	上四八一	
第二百六十二條	準毀棄罪	上五〇〇	上四八一	
第二百六十三條	信書隱匿罪	上五〇二	上四八一	
第二百六十四條	毀棄罪ノ告訴	上五〇五	上四八一	

索引終

明治四十三年七月二十九日印刷  
 明治四十三年八月一日發行

刑法各論下卷 與附  
 定價金參圓參拾錢



著作 兼發行	大場茂馬	東京市麴町區土手三番町三十六番地
印刷者	松澤 五三	東京市麴町區下六番町十七番地
印刷所	同 勞 舍	東京市麴町區下六番町十七番地

發行所

東京市神田區  
 三崎町三丁目

日本大學

發賣所

東京市神田區  
 仲猿樂町  
 振替口座第六五五六番  
 電話本局第三二五四番

巖松堂書店

大場茂馬先生著

最新刑事政策根本問題

全一冊菊版頗美本賣價金壹圓拾錢 神田仲樂猿町 送料内地金拾貳錢海外金參拾五錢 巖松堂發賣

著者ハ我國ニ於ケル刑法學ノ大家ニシテ特ニ刑事政策ヲ專攻セラレタル學者ナリ其留學中夙ニ斯學ニ關スル一書ヲ公刊シ以テ歐洲ノ學界ニ一大警鐘ヲ與ヘ噴々タル盛名ヲ博セラレタリ今ヤ此著書ニシテ本書ヲ著作セラル其内容ハ推シテ知ル可シ蓋シ刑事政策ハ刑法ノ基礎觀念ヲ明カニスルモノニシテ刑政ノ當局者ニ對シ刑事立法ノ方針ヲ示シ民政ノ當局者ニ對シ犯罪及ヒ其原因ト牽連スル社會政策ヲ如何ニ運用ス可キヤヲ教フルモノナリ法官、司獄官、警察官ハ是ニ由テ犯罪ノ檢舉刑期ノ量定刑罰執行ノ方針ヲ知ルヲ得可ク辯護士ハ是ニ由テ辯護ノ好材料ヲ得可ク又政事家ハ勿論一般愛國愛民ノ士ハ是ニ依テ犯罪ノ原因及ヒ其撲滅策ハ獨リ法律家ノ手ニ委メ可キニ非スシテ其責任ハ賢者自己ノ双肩ニ在ルヲ示スヘキナリ弊店カ特ニ本書ヲ當路ノ有司並ニ愛國愛民ノ士ニ薦ムル所以ノモノハ本書ハ我國ニ於テ初メテ公ニセラレタル唯一ノ刑事政策ニ關スル著作ナルヲ以テナリ左ニ信用アル諸大新聞紙ノ公平ナル批評ヲ掲ケ以テ本書ニ對スル世評ノ一斑ヲ示サン

報知 東京朝日 日本 東京朝日 大阪朝日 福岡朝日 大阪毎日 東京二六 大阪時事 法律新聞

本書ノ如キハ從來多ク見サルノ書ニシテ篤學ノ士一讀ノ勞ヲ愛ムヘキニアラス 議論透徹引證詳明亦叮嚀ニ、斯學ノ研究上大ニ嘉スベキノ事タラントス 政事家ハ勿論本問題ヲ窺ハントスル一般ノ人ニモ亦一讀ノ價值アラシ 著者ガ蓄クテ此刑事學上ノ根本問題ノ研究ニ從事シ歐洲法學界ノ中堅ニ突撃ヲ試ミントスルハ大ニ其篤學ト勇氣トヲ多トスヘク從ツテ本書ガ斯學上極メテ價值多キ著述タル多言スルノ要ナカラシ 立論ノ根據ヲ統計ニ仰キ勉メテ其見地ヲ明カニシタル點ニ對シテハ吾人ハ敢ヘテ萬腹ノ敬意ヲ表スルニ躊躇セス 筆致簡潔立論明確ニ一讀ヲ值ス 法曹家及ヒ司獄官等ハ本書ヲ一讀セハ利スル所尠少ニアラサルヘシ 著者ハ我邦刑事政策界ノ重鎮タリ精緻ナル研究ヲ送ケ時急ヲ濟フノ資ニ供セントス考證精透議論又明晰可及的空理空論ヲ避ケ陶案ヲ事實問題ノ上ニ置キ眞學ノ言論ヲ以テ政ヲ氣ヲクシシツシエ學派ノ爲メニ吐ケリ 刑政ニアタルモノハ元ヨリ社會政策ニ志アルモノハ一讀ノ價值アルヘシ 近時罕ニ見ル大文字ニシテ思ハズ案ヲ敵イテ快哉ヲ叫バシム、裁判官、檢察官、司獄官並ニ司法警察官等ニ對シ其探ル可キ方針ヲ示シタルヲ以テ任ニ之等ノ職ニ在ルノ士ハ必讀スヘキノ眞書ナリ

奧國司法大臣クライン博士、洪牙利國ラーソロ、ベルトルド博士、獨國デュビンゲン大學ベリッング博士、白耳義ブルツセル大學教授プリンス博士、維那大學教授貴族院議員ラマツシユ博士、同大學教授レフラー博士ケルン大學教授アッシャップエンブルク博士、其他各國斯學ノ大家數十氏ノ批評

大場茂馬先生著

## 刑事政策大綱

▲舶來上等紙  
▲紙數約二百頁  
▲正價金壹圓五十錢  
▲郵税金拾九錢

神田一ツ橋  
有斐閣發賣

著者ハ刑法大家ニシテ其西歐ニ遊學中伯林ニ於テ本書(原書)ヲ公ニス先ツ第一ニ古今東西ニ於ケル  
刑政ノ變遷及ビ學理ノ沿革現代ノ趨起ヲ說明シ第二ニ之ヲ評論シ第三(本論)ニ於テ我邦刑罰ノ沿  
革ヲ詳論シ之ヲ泰西ノ其ト比較シ次テ人ノ性質正義觀念、應報觀念法律準則刑法ノ目的刑罰ノ目的  
及保安處分ヲ詳論シ以テ刑法ノ基礎觀念ト併セテ人道維持正義ノ要求國利增進人權ノ安固ハ一ニ刑  
政ノ確保ニ依リ之ヲ全ウスルヲ得ベク世道風教ノ興廢隆汚ハ刑政ノ方針ノ當不當若クハ其一張一弛  
ニ繫ル所以ヲ明ニシ以テ一知半解若クハ輕佻浮薄ナル刑事政策論者ヲ警ム行文明確議論穩健ニシテ  
公正考證該博世界學海ニ於テ盛名ヲ博シタル所以ヲ知ルベシ由來刑政ハ政治ノ中樞ニシテ古來聖賢  
ノ潛心熟慮接排シタル所ナリ法曹ハ勿論人道正義ヲ唱フルノ士世道風教ヲ憂フルノ士人權ヲ説キ國  
利ヲ論ズルノ士速ニ本書ヲ座右ニ備ヘラレンコトヲ

人ノ指紋ノ同シカラサルコト恰モ其面ノ如シ (愉快ナル新發明)

大場茂馬先生著

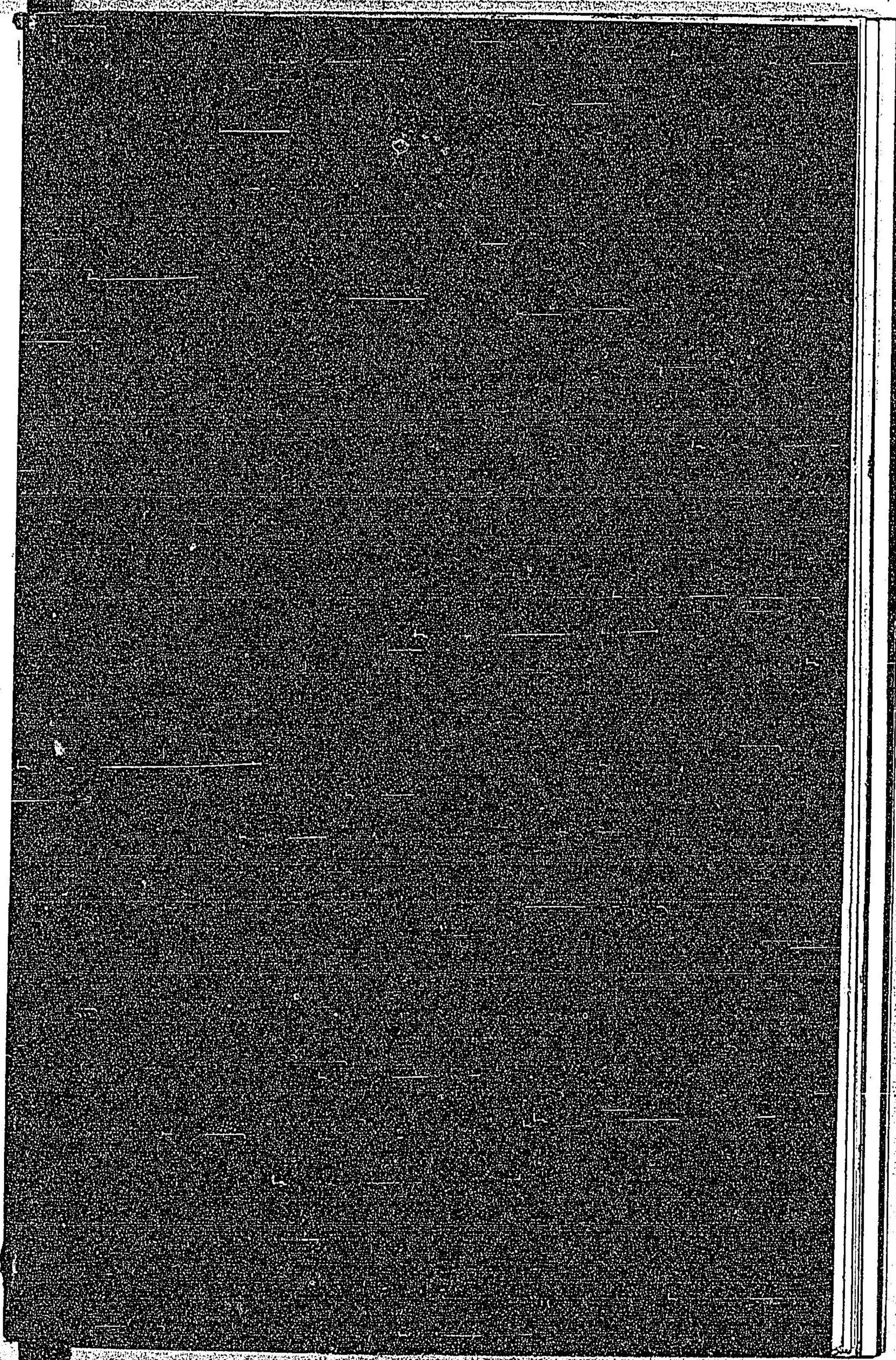
## 嶄新ナル名著 個人識別法

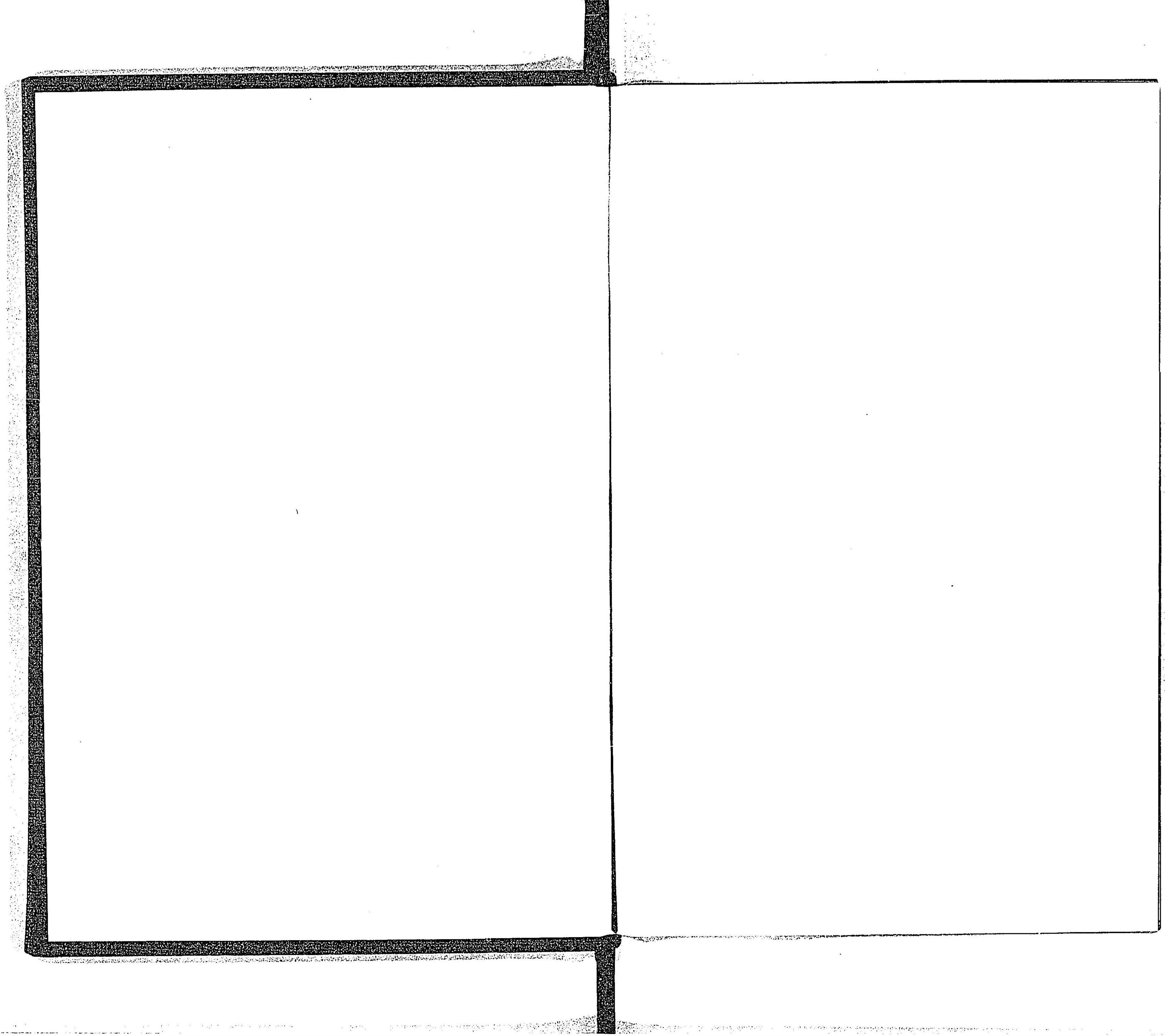
寫真版木版二百餘個入▲定價金壹圓五十錢▲郵税金八錢  
發賣所 神田一ツ橋 有斐閣  
神田仲猿樂町 巖松堂  
神田今川小路 清水書店

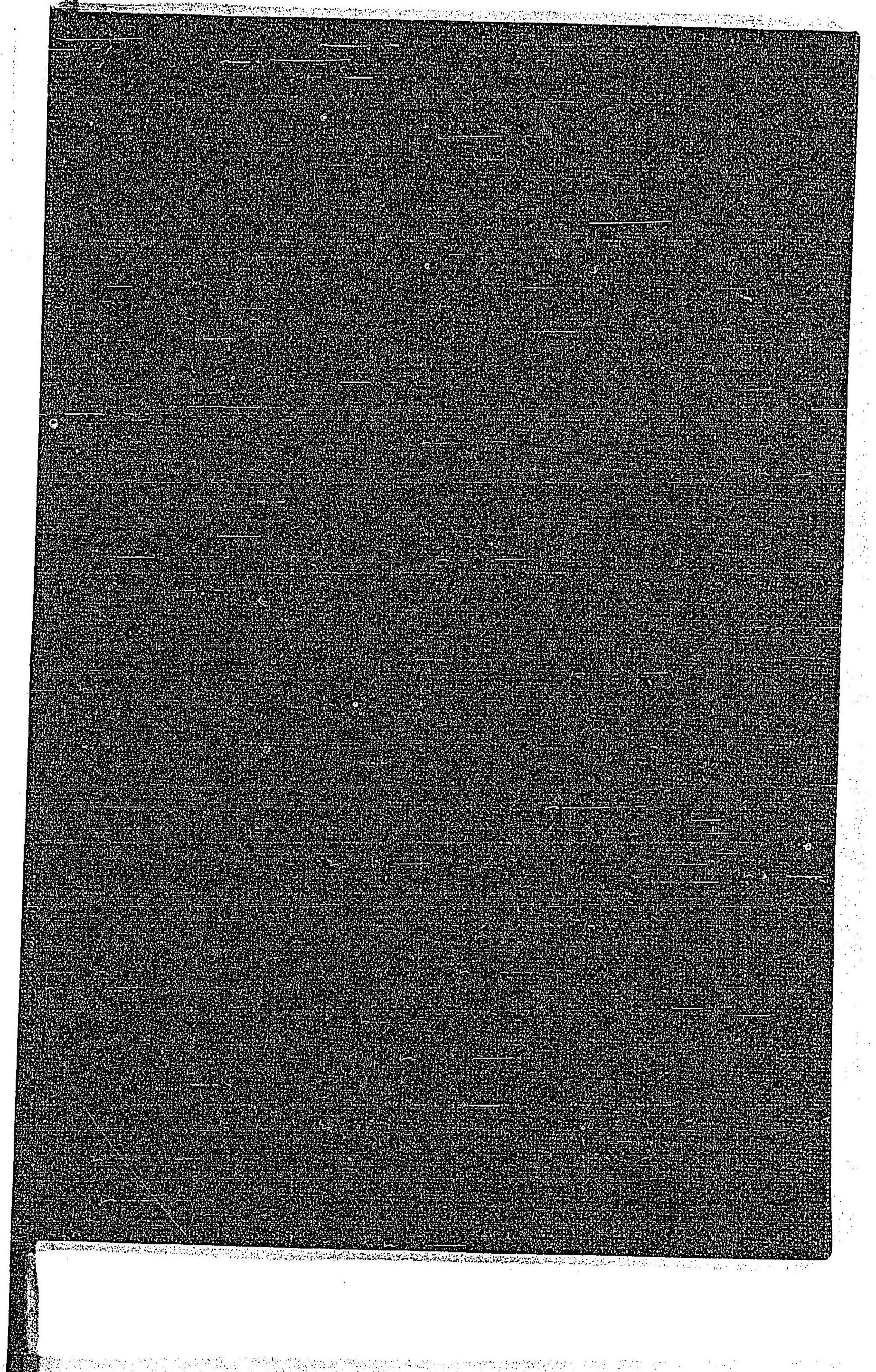
一切ノ法律關係ノ基礎タル可キ確的ナル個人識別ノ方法ハ印鑑ヤ寫真ノ類ノミニテハ未タ以テ充分  
ナリト謂フ可カラス刑事法學ノ泰斗大場先生海外ニ於ケル多年ノ研究ト内國ニ於ケル實驗トニ基キ  
指紋應用トベルチオン氏ノ人身測定トヲ比較攷究シ本書ヲ著ス說明最モ丁寧ニシテ實習用寫真版木  
版百數十個及一々實驗ヲ經タル探偵用ノ寫真版數十個ヲ以テ詳細ニ圖解ス初學者ノ爲メニハ好獨案  
内書タル可シ尙モ優良ナル國民ヲ以テ自ラ任セントスルモノハ何人ト雖モ此最新知識ニ對シテ一顧  
ノ要アラン特ニ法曹、醫家、警察官、司獄官、戶籍吏諸君ハ職務上精讀ノ値アラン

注意!!! 我政府ノ急速ナル指紋法ノ採用ハ其正確ニシテ過ナキ何ヨリノ證據









326

Q178k



